

相原山首遺跡

「風の丘葬斎場」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

あいはらやまくび
相原山首遺跡

「風の丘葬斎場」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

中津市教育委員会

2023

中津市教育委員会

相原山首遺跡

「風の丘葬斎場」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序

相原山首遺跡は、今から30年前の平成5（1993）年度に発掘調査された遺跡です。調査は市の火葬場建設事業に伴うもので、古墳時代の円墳や方形墳、古代から中世にかけての火葬墓が見つかるなど、当時大変注目された遺跡でした。その遺跡の重要性に鑑み、計画を変更し、現地保存されることとなり、平成9年には「風の丘葬斎場」整備に合わせて遺構が復元整備されました。さらに、平成22年には県史跡に指定されるなど、現在では火葬場を訪れた人のみならず、広く市民にも歴史公園として親しまれています。

一方で、学術成果の公表は概要報告にとどまっており、教育委員会としても相原山首遺跡の発掘調査報告書を刊行することは積年の課題でもありました。今回ここに発掘調査報告書を刊行できることになりましたのも、当時から調査や保存、整備に関わったすべての皆様方のご努力のお陰であり、感謝を申し上げるとともに、刊行が遅くなってしまったことについては、広く皆様方にお詫び申し上げる次第です。

この報告書が、現地に復元された史跡公園とともに、遺跡理解の一助として活用され、さらには地域の歴史解明にもつながりますならば幸甚に存じます。

令和5年3月31日

中津市教育委員会
教育長 粟田 英代

例　　言

1. 本書は中津市教育委員会が平成5（1993）年度に実施した相原山首遺跡（中津市大字相原字山首）の発掘調査報告書である。
2. 平成5年度に調査を実施した際は、遺跡名は「永添遺跡」である。そのため、遺物の注記（「NS」と略記）や測量図面はすべて「永添遺跡」となっている。
3. 発掘調査は大分県教育委員会文化課の指導を受け、栗焼憲児（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任、当時）が担当し、概要については『1993年度中津地区遺跡群発掘調査概報（VI）』（以下、「概報」とする）にて報告されている。
4. 遺構の名称については基本的に上記概報に従ったが、概報で火葬墓としたものの、明確な根拠を示すことができないものなどは、今回遺構名称の変更を行った。その際、「旧○○」としたものは、概報記載の名称を指す。
5. 出土遺物の整理作業は平成5年度と令和4年度に実施し、遺物は「風の丘葬斎場」に展示している一部を除き、旧和田公民館と中津市歴史博物館にて保管している。令和4年度の整理作業は、安倍方恵、栗田真弥、衛藤京子、吉上かおり、岩男純子、久原彩（以上、中津市教育委員会遺物整理作業員）が行った。
6. 本書の執筆は、第4章2節を高崎章子（中津市歴史博物館長）が、その他は小柳和宏（中津市歴史博物館専門員）が行った。なお、調査に至る経緯などについては、上記概要報告書を参考にしている。
7. 出土遺物については、小林昭彦氏（吉野ヶ里公園管理センター歴史専門員）から貴重な助言を得た。
8. 本書の編集は小柳が行った。

目 次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第3節	調査体制	1
第4節	調査後の経過	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	調査の成果	5
第1節	調査概要	5
第2節	遺構と遺物	9
1) 古墳		
1号墳	9
2号墳	11
3号墳	13
4号墳	16
5号墳	19
6号墳	20
7号墳	24
8号墳	26
2) 方形周溝遺構	28
3) 火葬墓および焼土坑	29
3号焼土坑	30
4号火葬墓	30
5号焼土坑	32
6号火葬墓	33
7号焼土坑	34
8号焼土坑	34
9号焼土坑	34
10号焼土坑	35
11号焼土坑	35
12号焼土坑	36
13号焼土坑	36
14号焼土坑	37
15号火葬墓	37
16号焼土坑	38
17号焼土坑	38
4) 埋甕遺構		
1号埋甕遺構	39
2号埋甕遺構	39
5) 土壙墓		
1号土壙墓	41
2号土壙墓	43
3号土壙墓	44
4号土壙墓	46
5号土壙墓	46
6号土壙墓	46
7号土壙墓	46
6) 溝		
1号溝	46
2号溝	47
3号溝	49
7) その他の遺物	49
第4章	総括	
第1節	相原山首遺跡の歴史的位置づけ	50
第2節	相原山首遺跡の整備活用について	59

挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図	3	第35図	5号焼土坑実測図	32
第2図	遺跡詳細位置図	4	第36図	5号焼土坑出土遺物	32
第3図	遺構分布図(旧地形入り)	6	第37図	6号火葬墓実測図	33
第4図	遺構配置図	7	第38図	6号火葬墓出土遺物	33
第5図	地籍図にみる明治時代の地目	8	第39図	7号、8号、9号焼土坑実測図	34
第6図	1号埴実測図	9	第40図	10号焼土坑実測図	35
第7図	1号埴張出部実測図	10	第41図	11号焼土坑実測図	35
第8図	1号埴出土遺物実測図	10	第42図	12号焼土坑実測図	36
第9図	2号埴実測図	11	第43図	13号焼土坑実測図	36
第10図	2号埴主体部実測図	12	第44図	14号焼土坑実測図	37
第11図	2号埴出土遺物実測図	13	第45図	15号火葬墓実測図	37
第12図	3号埴実測図	14	第46図	15号火葬墓出土遺物	37
第13図	3号埴主体部実測図	15	第47図	16号焼土坑実測図	38
第14図	3号埴出土遺物実測図	15	第48図	17号焼土坑実測図	38
第15図	4号埴実測図	16	第49図	1号埋甕遺構実測図	39
第16図	4号埴主体部実測図	17	第50図	1号埋甕構出土遺物	39
第17図	4号埴出土遺物実測図	18	第51図	2号埋甕遺構実測図	40
第18図	5号埴実測図	19	第52図	2号埋甕遺構出土遺物	41
第19図	5号埴主体部実測図	20	第53図	1号土壤墓実測図	42
第20図	5号埴出土遺物実測図	20	第54図	1号土壤墓出土遺物	42
第21図	6号埴実測図	21	第55図	2号土壤墓実測図	43
第22図	6号埴主体部と周溝遺物出土状態	22	第56図	2号土壤墓出土遺物	44
第23図	6号埴出土遺物	23	第57図	3号土壤墓実測図	44
第24図	7号埴実測図	24	第58図	4号土壤墓実測図	45
第25図	7号埴主体部	25	第59図	5号土壤墓実測図	45
第26図	8号埴実測図	26	第60図	6号土壤墓実測図	46
第27図	8号埴主体部	27	第61図	7号土壤墓実測図	47
第28図	8号埴出土遺物	28	第62図	溝実測図	48
第29図	方形周溝遺構	29	第63図	1号溝出土遺物	49
第30図	方形周溝遺構中心部土坑	29	第64図	その他の遺物	49
第31図	方形周溝遺構出土遺物	29	第65図	遺跡周辺の歴史的環境	51
第32図	3号焼土坑実測図	30	第66図	8世紀代の主な遺跡	55
第33図	4号火葬墓実測図	31	第67図	遺構変遷図	57
第34図	4号火葬墓出土遺物	32	第68図	遺跡の現況図	61

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	5
第2表	遺構一覧表	65
第3表	遺物観察表	66

写真図版目次

写真図版 1	遺跡全景	71
写真図版 2	遺跡全景	72
写真図版 3	1号埴空中写真	73
写真図版 4	2号埴空中写真	74
写真図版 5	3号埴と方形周溝空中写真/4号埴空中写真	75
写真図版 6	5号埴/8号埴空中写真/9号埴空中写真	76
写真図版 7	7号埴空中写真/5～8号埴空中写真	77
写真図版 8	1号埋甕裏土部/1号埋甕/1号埋甕遺構出土状況	78
写真図版 9	2号埴近景/2号焼土坑/2号埴遺物出土状況	79
写真図版 10	3号埴近景/3号埴周溝出土状況/3号埴遺物出土状況	80
写真図版 11	3号骨蔵器出土状況1/3号骨蔵器出土状況2	81
写真図版 12	4号埴近景/4号焼土石/4号埴前庭部	82
写真図版 13	5号埴近景/5号焼土石1/5号焼土石2	83
写真図版 14	6号埴近景/6号埴周溝遺物出土状況	84
写真図版 15	7号埴近景/8号埴検出状況/8号埴近景	85
写真図版 16	8号石室蓋石/8号埴遺物出土状況/方形周溝遺構	86
写真図版 17	3号焼土坑/4号火葬墓	87
写真図版 18	4号火葬墓/4号火葬墓/4号火葬墓/5号焼土坑/5号焼土坑	88
写真図版 19	6号火葬墓/6号火葬墓骨蔵器	89
写真図版 20	7号焼土坑/7号焼土坑/10号焼土坑	90
写真図版 21	11号焼土坑/12号焼土坑/13号焼土坑	91
写真図版 22	14号焼土坑/15号火葬墓1/15号火葬墓2	92
写真図版 23	17号焼土坑/1号埋甕遺構/2号埋甕遺構	93
写真図版 24	1号土壤墓/2号土壤墓/2号土壤墓遺物出土状況	94
写真図版 25	4号土壤墓/5号土壤墓/6号土壤墓	95
写真図版 26	相原山首遺跡の現状	96
写真図版 27	相原山首遺跡の現状	97
写真図版 28	出土遺物(1)	98
写真図版 29	出土遺物(2)	99
写真図版 30	出土遺物(3)	100

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成4（1992）年度に、老朽化した市営火葬場の全面改修の計画が持ち上がった。計画地が周知遺跡である永添遺跡（当時の名称）内にあたるため、担当課である市保健衛生課と協議を行い、事前に確認調査を実施することとした。

平成5（1993）年6月、計画予定地にトレーニングを設定し遺構の有無を確認したところ、工事予定地の西側微高地上で遺構が確認されたため、約5,000m²について本調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

平成5年6月 試掘調査実施、遺構を確認

平成5年10月20日 本発掘調査開始

平成6年3月7日 賀川光夫別府大学教授現場視察

3月29日 発掘作業終了

第3節 調査体制

平成5年度（届出はいずれも平成5年度）

調査責任者

高椋 忠隆（中津市教育委員会教育長）

調査指導委員

賀川 光夫（別府大学教授）

小田富士雄（福岡大学教授）

後藤 宗俊（別府大学教授）

甲斐 忠彦（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長）

真野 和夫（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長）

調査員

清水 宗昭（大分県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長）

栗焼 恵児（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任）

高崎 章子（中津市教育委員会市民文化センター文化財係臨時職員）

調査事務

土井 勝（中津市教育委員会市民文化センター館長）

佐藤 輝正（中津市教育委員会市民文化センター文化財係長）

田中布山彦（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主査）

令和4年度の整理作業の体制は下記のとおりである。

整理責任者

栗田 英代（中津市教育委員会教育長）

整理事務

高崎 章子（中津市歴史博物館館長）

花崎 徹（〃 研究館長・文化財係主幹）

浦井 直幸（〃 文化財係員）

小柳 和宏（〃 専門員）

第4節 調査後の経過

平成6年4月14日 報道各社、永添遺跡（当時）を「保存の方向性で検討中」と報道

5月26日 市民向け現地説明会を実施。永添遺跡（当時）を残すため、火葬場計画の見直しを正式表明

平成9年3月 風の丘公園として復元整備完了

平成22年3月30日 県史跡に指定される

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

相原山首遺跡は、沖代平野を見下ろす「下毛原」と呼ばれる洪積台地縁辺近くに位置している。この下毛原は、幅1.5～3kmほどの幅で南西から北東方向にかけて延びる（ただし、台地としては、三光原口で確認できる犬丸川が沖積世以前に山国川に合流していた痕跡の浅い谷状地形を隔てて、さらに南側に延びる）。標高は最も高い部分で40m、北側の周防灘を望む台地端に近いところで10mあまりである。台地の最西端は山国川に接し、そこから北側は山国川の沖積地、逆に南側から東側にかけては犬丸川の沖積地によって画されている。台地上では南西から北東方向に向かって浅い谷が幾本も発達し、その谷頭にはしばしば灌漑用水のための溜池が作られる。

相原山首遺跡は、この下毛原の最西端、標高約36mに位置している。山国川岸からは300mほど東にあたり、北側の段丘崖からは100mほど奥に入る。さらには微視的に見ると、遺跡の南側から東側にかけては浅い谷が入っており、遺跡の立地する部分は3mほど相対的に高くなっている。遺跡の西側はほぼ同じく、やや高い畠が広がっているが、100mほど西側には谷があり、5mほど低くなる。すなわち、相原山首遺跡の立地する場所は、東西幅約250mで、南北に延びた低い丘陵の先端部付近ということになる。

第2節 歴史的環境

相原山首遺跡が立地する下毛原台地西端付近から沖積地の万田地区にかけては、中津市内でも遺跡分布が濃密な地域である。旧石器時代の遺跡は知られていないが、縄文時代になると、さらには下流域では土偶が2体出土している高畠遺跡（後、晚期）が発掘調査されており、山国川に接する自然堤防上が縄文時代には生活の場となっていたことがわかる。続く弥生時代には下毛原上に大集落（諫山遺跡など）が形成されるが、沖積高地にも小規模な遺跡が点在している。高畠遺跡や三口遺跡などで竪穴建物や壺棺などの墓が出土している。

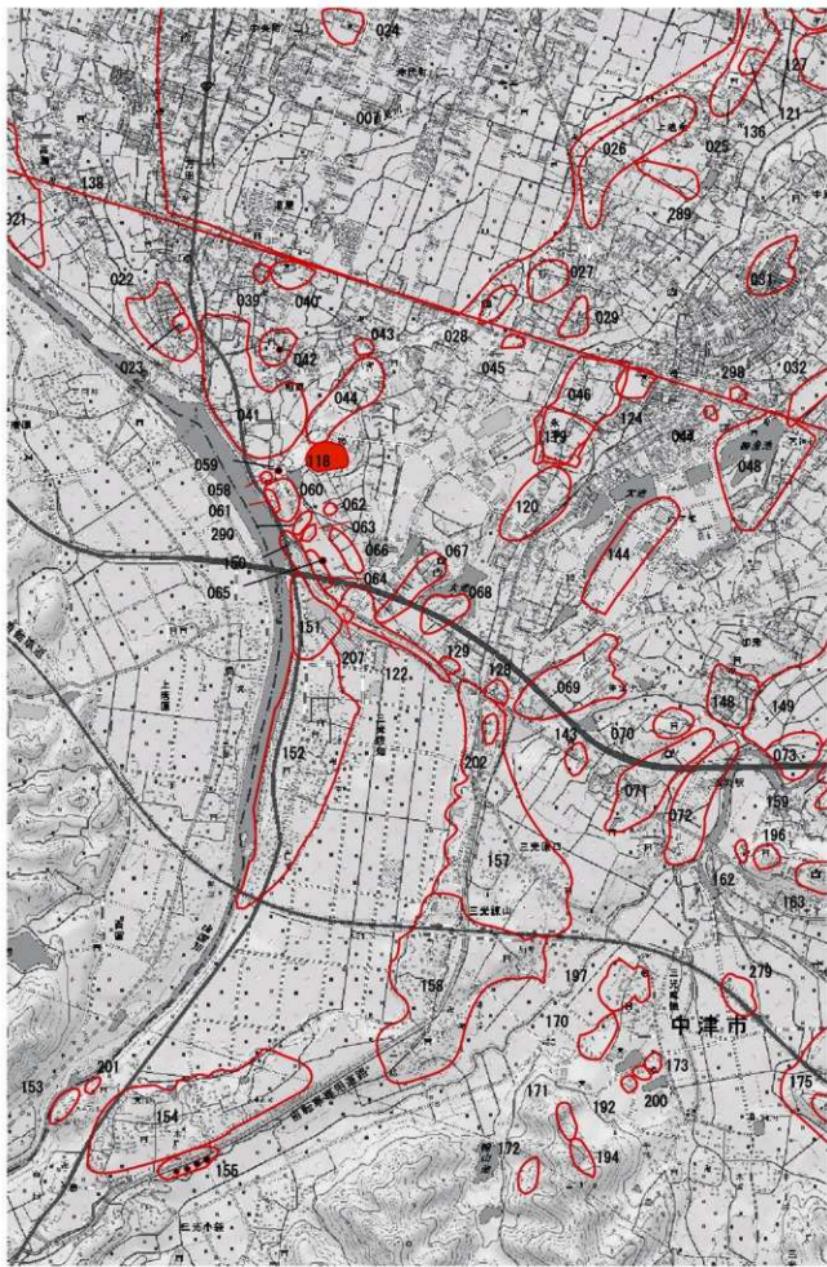
古墳時代になると、沖積地にも上方田遺跡や高瀬遺跡などの大規模遺跡が立地するようになる。しかし、いわゆる高塚古墳はまったく見られず、古墳はすべて洪積台地（下毛原）上に築かれる。最も古いと考えられているのが、相原山首遺跡の南0.5kmにある勘助野地遺跡で見つかった3基の方墳で、時期は5世紀前半である。次いで今回報告する相原山首遺跡1号墳が5世紀中頃に作られ、相原山首遺跡から0.3km南にある幣旗塚1号、2号墳なども造られる。合わせて、5世紀後半には山国川に面する洪積台地の段丘崖に横穴墓が数多く作られるようになっていく。上ノ原横穴墓群や坂手前横穴墓群などである。上ノ原横穴墓群では、最も新しい横穴墓は7世紀前葉である。

古墳時代終末期から奈良時代にかけて、相原山首遺跡で小型の石室墳が作られ、3号墳では火葬墓を主体部に持つようになる。これに前後して、相原山首遺跡や0.3km東にある坂手隈跡、さらには勘助野地遺跡などで骨蔵器に収めた火葬墓が造営され、山国川下流域での火葬墓造営の一大集中地区となる。

また、古墳時代から奈良時代にかけて、下毛原の南側斜面部では広範囲にわたって須恵器の窯跡群（伊藤田窯跡群）が確認されている。

古代には相原山首遺跡から北北西に約0.6kmの地点に法隆寺式伽藍配置を持つ寺院が作られ、相原庵寺と呼ばれている。それと前後して沖代平野には東西に直線をなす豊前道（勅使街道）が敷かれ、道路以北には条里が施工されたとされる。『和名抄』記載の郷名では大冢郷、野仲郷、麻生郷、小楠郷が沖代平野や下毛原台地周辺にあったとされ（『沖代条里の調査』本編 大分県立歴史博物館 2021）、相原山首遺跡周辺は麻生郷に比定できよう。

中世になると、麻生郷は弥勒寺領となり、藍原屋敷を中心とした神領と弥勒寺領得善保が成立した（『沖代条里の調査』本編 大分県立歴史博物館 2021）。中世末のムラの姿を伝える可能性の高い明治年間の地籍図によると、相原山首遺跡周辺では、集落の存在を示すような地割りは確認できない。



第1図 周辺の遺跡分布図 ($S = 1/25,000$)



第2図 遺跡詳細位置図 (S = 1/2,000)

第3章 調査の成果

第1節 調査概要

調査範囲は葬祭場建設予定地の南西部、南北約100m、東西50～30mの部分である。調査前は畠地であったが、すでに東側の一角が半月形に削られており、その痕跡（地割）は明治21年の地籍図でも確認できるので、明治中期以前に削平がなされたことがわかる。調査前の測量図によると、中央から東側が1.5mほど緩やかに下っているが、中央より西側はほぼ平坦であったことが周囲の畠の標高から窺うことができる。つまり、古墳の存在を示すような高まりや地割は一切なく、緩やかに小さな谷に向かって東に下るなどらかな地形であったということになる。

確認された遺構は、概報に従うと古墳8基（円墳1基、方墳7基）、方形周溝墓1基、火葬墓16基、土壙墓7基となるが、報告書作成に埋め合わせて再検討を行ったところ、次節に示すように円墳1基、方形墳7基、方形周溝状遺構1基、火葬墓3基、廻納遺構2基、現地火葬墓あるいは茶毬跡13基、土壙墓2基、土坑5基、溝3条となった。

1号墳は、張り出し部を有する円墳で、主体部は削平されており不明である。出土遺物から5世紀中頃とすることができる。その他の7基の方形墳は、石室を持たない3号墳を除いて、すべて東側の谷間に石室の入口を持ち、ほとんどは長い「墓道」を南東方向に伸ばしており、方形墳へのアクセスが東側にあることを示している。遺物が良好な状態で出土したものは少ないが、全体としてこれらは7世紀後半から8世紀前半のものと考えられる。

古代の火葬墓は骨蔵器を有する4基（須恵器3基、土師器1基）で、内1基は3号墳の主体部である。これらは8世紀中ごろから後半にかけて作られた。また、同時期かと推測される、壁面が被熱で硬化したいわゆる現地火葬墓、または茶毬跡などが点在するが、一部を除いて散在的である。これらは火葬墓を除くと時期を示す遺物がないが、状況から古代である可能性が高い。一方、白磁などを副葬した土壙墓や、備前焼壺などを埋置した納骨遺構2基は中世の所産である。

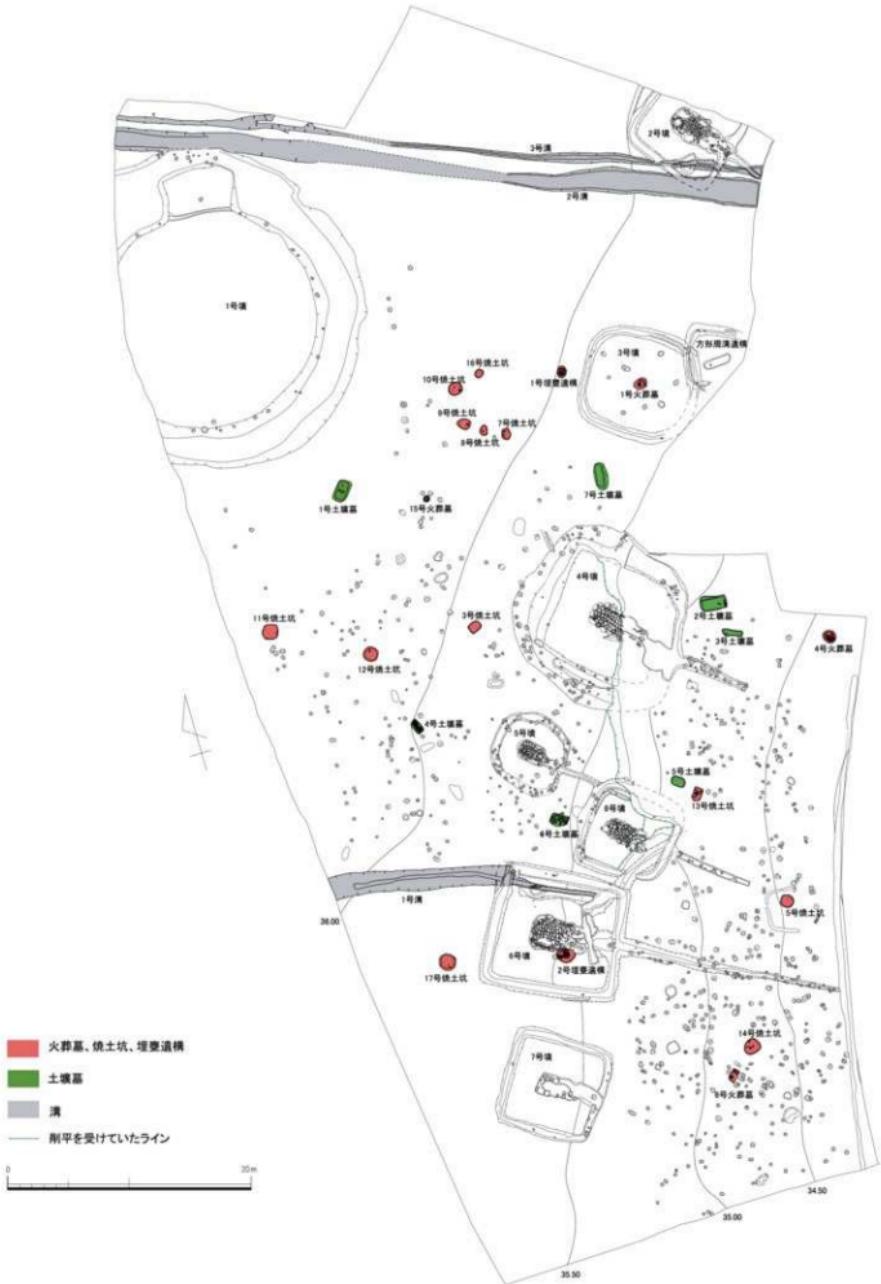
溝は3条検出されたがいずれも明確な時期を示す遺物は出土していない。

遺跡名	遺跡名	所在地	時代	遺跡名	所在地	時代
007 中代小字茶毬跡	中津市中央町ほか	弥生・古墳・古代・中世・近世	121 大塩跡	中津市下水原	中世	
012 鶴山内塗	中津市下水原	古墳	122 上ノ原甲斐遺跡	中津市相田・永良・三光・佐知	弥生・古墳	
021 高瀬遺跡	中津市高瀬	弥生・古墳	124 美濃城跡	中津市永瀬	古墳	
022 上万田遺跡	中津市万田	弥生・古墳・中世	127 石室地盤	中津市下水原	古墳・中世	
023 河原田遺跡	中津市弓削字河原田	中世	128 清次郎城跡	中津市田代	弥生	
024 円代小字枕草根遺跡	中津市弓削	弥生	129 上ノ原甲斐御遺跡	中津市永瀬	古墳	
025 下池水原遺跡	中津市下水原	弥生・古墳・中世	130 佐永城跡	中津市上水原	中世	
026 上池水原遺跡	中津市上水原	弥生・古墳	138 古代曾我道跡	中津市伊集田・福島ほか	古代	
027 来成城跡	中津市永瀬	中世	143 鹿遺跡	中津市加須	文政ほか	
028 西水原遺跡	中津市永瀬	弥生・古墳	144 中ノ林遺跡	中津市大森	弥生・古墳	
029 桐原屋跡	中津市永瀬	弥生・古墳	148 加須原鬼敷遺跡	中津市加須	中世・近世	
031 中原遺跡	中津市大曽根・上越木	中世・近世	149 加須早原	中津市加須・福島	文政・古墳	
032 大塩木代寺鬼塚跡	中津市大曽根	古代・中世	150 上ノ原甲斐六群	中津市三井田・佐知	古墳	
039 鶴谷城跡	中津市相原	中世	151 在知久原御遺跡	中津市三井田佐知	弥生・佐知・古墳	
040 佐渡遺跡	中津市佐渡尾	古墳・中世	152 在知遺跡	中津市三光・知和・上田宇賀村・藤原	文政・中世・佐渡・古墳・中世	
041 三口酒造跡	中津市相原・道原	弥生・古墳・古代	153 中津市五井鬼敷	中津市五井土田	古墳	
042 相原奥寺	中津市相原	古代	154 日木遺跡	中津市三井田日木	弥生・古墳	
043 法連寺今野跡	中津市相原	中世	155 佐久原城跡(1～4メートル)	中津市三井田日木	古墳	
044 台遺跡	中津市相原	弥生・古墳	156 外堀遺跡	中津市三井田原口	中世	
045 氷添中國跡	中津市永瀬	弥生・古墳	157 崖口遺跡	中津市三井田原口	弥生・古墳	
046 八宦城跡	中津市永瀬	中世	158 雄山遺跡	中津市三井田雄山	弥生・古墳	
047 東ノ浦遺跡	中津市大森	古墳	159 雄飛原城跡	中津市三井田雄山	文政・中世	
048 銀原庄内山遺跡	中津市大森	古墳ほか	160 北平原六群	中津市三井田森	古墳	
058 佐手原穴六群	中津市相原	古墳	162 難波原六群	中津市三井田森	古墳	
059 鶴市神奈裏山古墳	中津市相原	古墳	163 東處尾遺跡	中津市三井田下林	中世	
060 佐手原城跡	中津市相原	古代・中世	170 佐佐遺跡	中津市三光城跡	弥生・古墳	
061 佐手原穴六群	中津市相原	古墳	171 鶴見穴墨群	中津市三井田城跡	古墳	
062 相原古墳群	中津市相原	古墳	172 鶴山城跡	中津市三井田鶴山	古墳	
063 望岳原古墳群	中津市相原	古墳	173 鶴雲寺遺跡	中津市三井田城跡	古墳・中世	
064 美濃城跡	中津市相原	織文・古墳	175 美濃遺跡	中津市三井田開崎	弥生・中世	
065 美濃野地遺跡	中津市相原	古墳	176 美濃城跡	中津市三井田相口	中世	
066 鄭子池北側遺跡	中津市相原	弥生・古墳	192 佐庭母子遺跡	中津市三井田城跡	古墳	
067 六前町遺跡	中津市永瀬	弥生・古墳	194 大迫平根穴墨群	中津市三井田相口・城跡	古墳	
068 大迫遺跡	中津市永瀬	弥生	196 北平城跡	中津市三井田森	中世	
069 清水前田遺跡	中津市相原	古墳	197 田島城跡	中津市三井田城跡	中世	
070 大塩城跡	中津市相原	中世	200 駒堂遺跡	中津市三井田城跡	文政・平安・中世	
071 茅原遺跡	中津市茶毬	織文・中世・近世	201 上田城跡	中津市三井田土田	中世	
072 佐渡遺跡	中津市加須	織文・弥生・古墳・平安・中世	202 其なり古墳	中津市三井田原口	古墳	
073 鶴多田遺跡	中津市相原	弥生・古墳	207 上ノ原遺跡	中津市三井田佐知	弥生・古墳	
118 相原山遺跡	中津市相原	古墳・古代・中世	279 鶴ノ町遺跡	中津市三井田鶴ノ町・野ノ上	弥生・古墳・中世	
119 豊前屋宮安酒遺跡	中津市永瀬	弥生・平安	289 上水永樂遺跡	中津市大字上水永	中世	
120 鶴男田遺跡	中津市永瀬	古墳	290 鶴原城跡	中津市大字相原	中世	

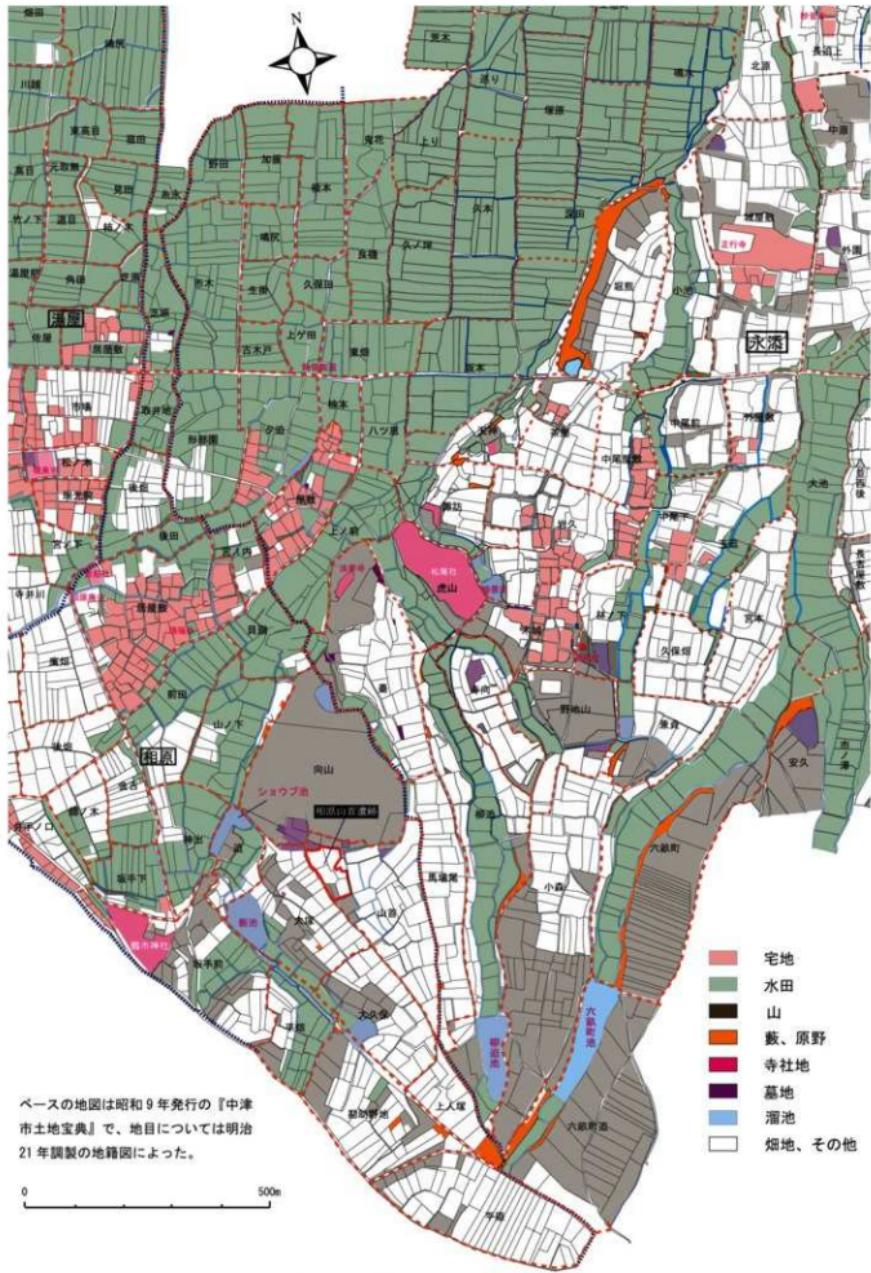
第1表 周辺遺跡一覧表



第3図 遺構分布図（旧地形入り）（S=1/500）



第4図 遺構配置図 (S=1/400)



ベースの地図は昭和 9 年発行の『中津
市土地宝典』で、地目については明治
21 年調製の地籍図によった。

第 5 図 地籍図にみる明治時代の地目

第2節 遺構と遺物

1) 古墳

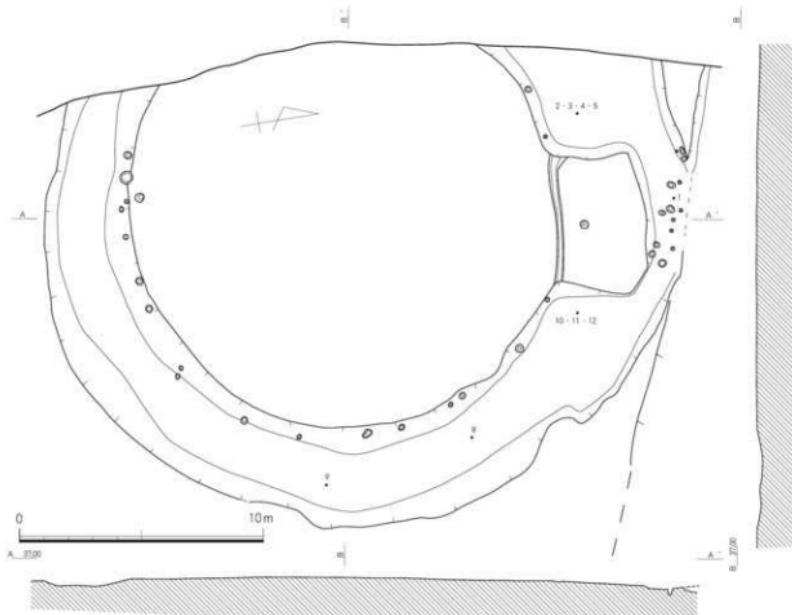
1号墳（第6図）

調査区の北西角部で確認された円墳、もしくは帆立貝式古墳である（概報では「円墳」としている）。西側の一部が調査区外にかかるが、概ね円丘部の直径は17.5mで、北側の張り出し部を含めた長さは21.0mとなる。そこに幅3.0m～5.7mの周溝があるが、北側の張り出し部分の周溝はやや北側に膨らんでおり、幅が2.0mほどと狭くなっている（一部2号溝に切られている）。張り出し部と周溝を含めた全長は約27mとなる。

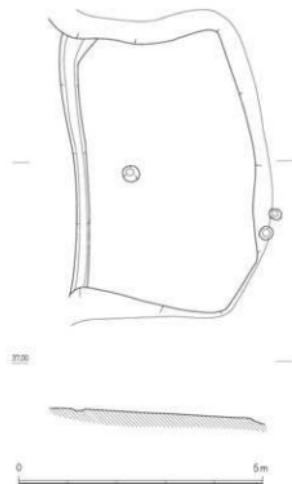
調査前（昭和期）の航空写真を見ると、古墳の痕跡が確認できないため、完全に削平されていたと考えられる。明治21年の地籍図（第5図）でも古墳の形状は反映しておらず⁴、明治段階でもすでに削平されていた可能性が高い。周溝の深さも0.2m程しか残されておらず、周溝部も含めてかなり削平されていたと思われるが、調査時の写真（図版8）を見ると、埴丘部分がわずかに高まりを持っていたことがわかる。しかしながら、主体部の痕跡は残されていなかった。

周溝の内側立ち上がり部分には、直径0.2mほどのピットが2.5mから3.0mほどの間隔で10カ所ほど埴丘を取り巻くように検出された。仮に埴丘が2mほどあったとしたら、ほぼ周溝の底に近い部分にあたり、概報で示された埴丘の裾に「木柱」を立てたのではないかという説はやや苦しくなるのではなかろうか。

張り出し部と円丘部との間に、幅0.3m、深さ数cmほどの浅い溝が直線的に伸びる。埴丘と張り出し部のレベル差がかなりあつた場合、すなわち張り出し部にあまり盛土がなされていなかった場合には、埴丘と張り出し部とを画する溝として機能した可能性がある（張り出し部の盛り土が厚い場合には溝の上端が広がって、張り出し部がかなり狭くなってしまう）。つまり、この溝を積極的に評価すると、帆立貝式古墳というより、周溝内部に低い張り出し部を有する円墳とする方が良いのかもしれない。



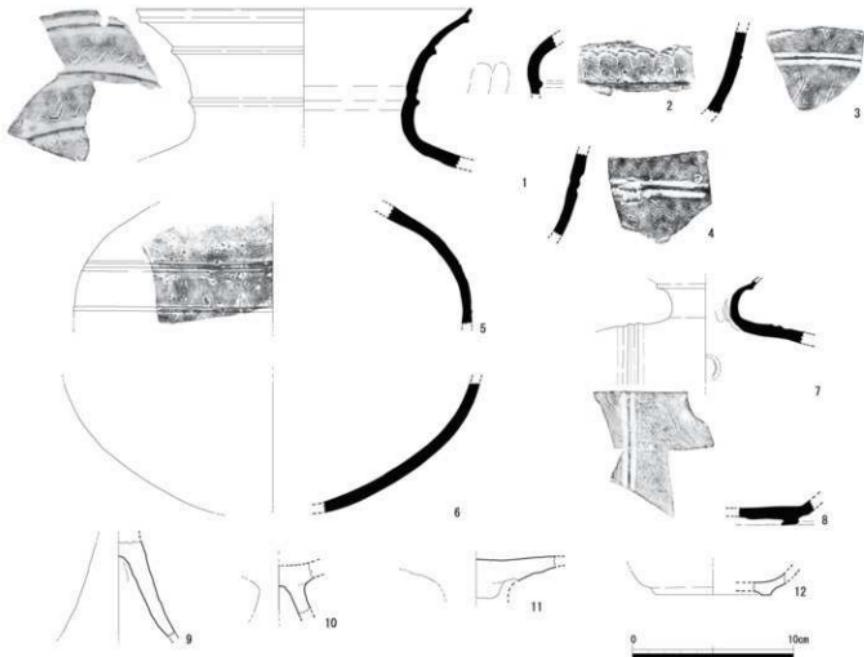
第6図 1号墳実測図 (S = 1/200)



第7図 1号墳張出部実測図 (S=1/100)

遺物は周溝の中から出土している。第8図1から12である。1から6は広口壺の破片で、同一個体と思われる。1は頸部から口縁部にかけての破片で、三条の突帯を巡らせ、その間には櫛描き波状文が描かれる。2は一条の突帯が廻り、櫛描き波状文を有する頸部の破片、3と4も一条の突帯が廻り、上下に二条の突帯が廻り、その間に櫛描き波状文が描かれる。5と6は広口壺の体部で、上半に二条の突帯が廻り、その間に櫛描き波状文が描かれる。これらは、張り出し部の西側や北側の周溝内から出土している。7は樽形罐で、肩部に二条の突帯が廻り、外側に櫛描き波状文が描かれている。8は高台付坪で、内側に踏ん張るような低い高台が付く。床面からやや浮いた状態で周溝内から出土している。9から11は土師器高环である。これらはいずれも張り出し部の南東角部の周溝内から出土している。12は瓦器で、扁平な高台となる。

この古墳の時期を示す遺物はいずれも張り出し部の周辺の周溝内から出土している。張り出し部がこれらの土器を使った祭祀を行なう場であったことを示しているようである。時期は5世紀中頃とすることができる。一方で、8世紀(8)や13世紀(12)の遺物が出土しているのは、周辺における当該期の活動を示すとともに、その時期までは周溝が完全には埋まっていたことを示している。積極的に評価するならば、当該の人々にとって、1号墳の存在が意識されていたということであろう。

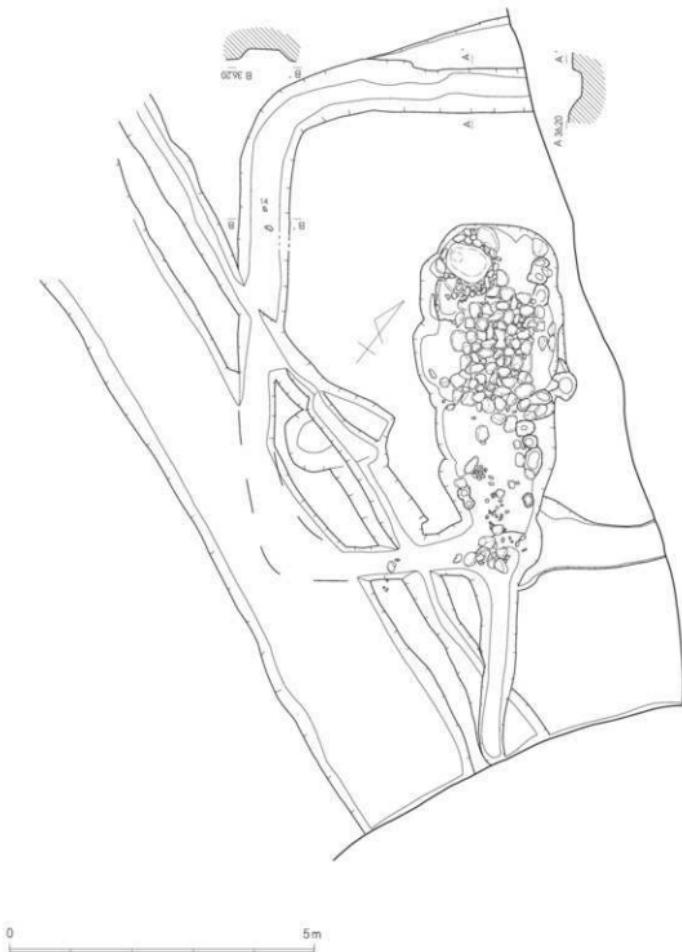


第8図 1号墳出土遺物実測図 (S=1/3)

2号墳（第9図）

2号墳は、調査区の北東角部で確認された方形墳である。北側3分の1ほどが調査区外に延び、周溝の南側コーナー付近は2号溝と3号溝に切られている。墳丘部分の大きさは、計測可能な南北方向で7.0m、周溝も含めると8.6mである。周溝の幅は0.7～0.8mで、残存する深さは0.2mほどである。

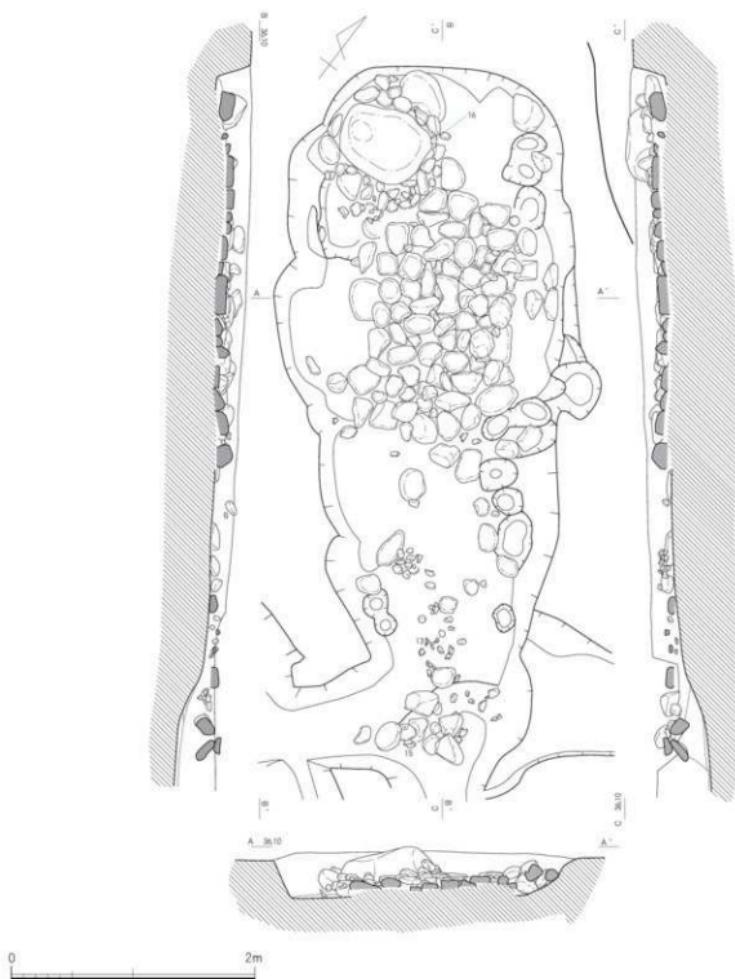
主体部は大きく削られ、側壁の石は全て抜き取られている。ただし、奥壁側には長さ75cmほどの大きな石が据えられており、これは奥壁の腰石の可能性がある。残存する敷石から復元すれば、石室内部は長さ2.3m、幅1.3m程度となるだろう。玄門や羨道の状況は不明であるが、周溝に向かって石室掘方は延びるので、横穴式石室であったと考えられる。周溝に接する墓道は、周溝内で一段の掘り下げの後、そのまま周溝を越えて南東方向に約3.0m延びて



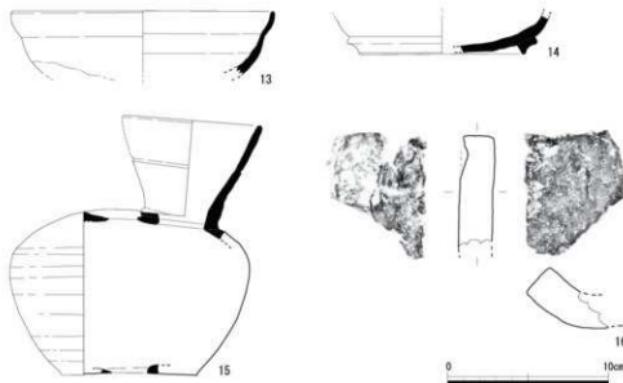
第9図 2号墳実測図 ($S=1/80$)

いる。

遺物は石室内と周溝、墓道から出土している。石室内から出土しているのは、16で古代瓦である。墓道からは13と15である。13は須恵器の鉢か、15は平瓶で、肩の部分と底部に打ち欠きによる穴が空いている。14は周溝から出土した高台付壺で、高台が外側に跳ね上がり、接点は高台内側のみとなる。



第10図 2号墳主体部実測図 ($S = 1/40$)



第11図 2号墳出土遺物実測図 (S=1/3)

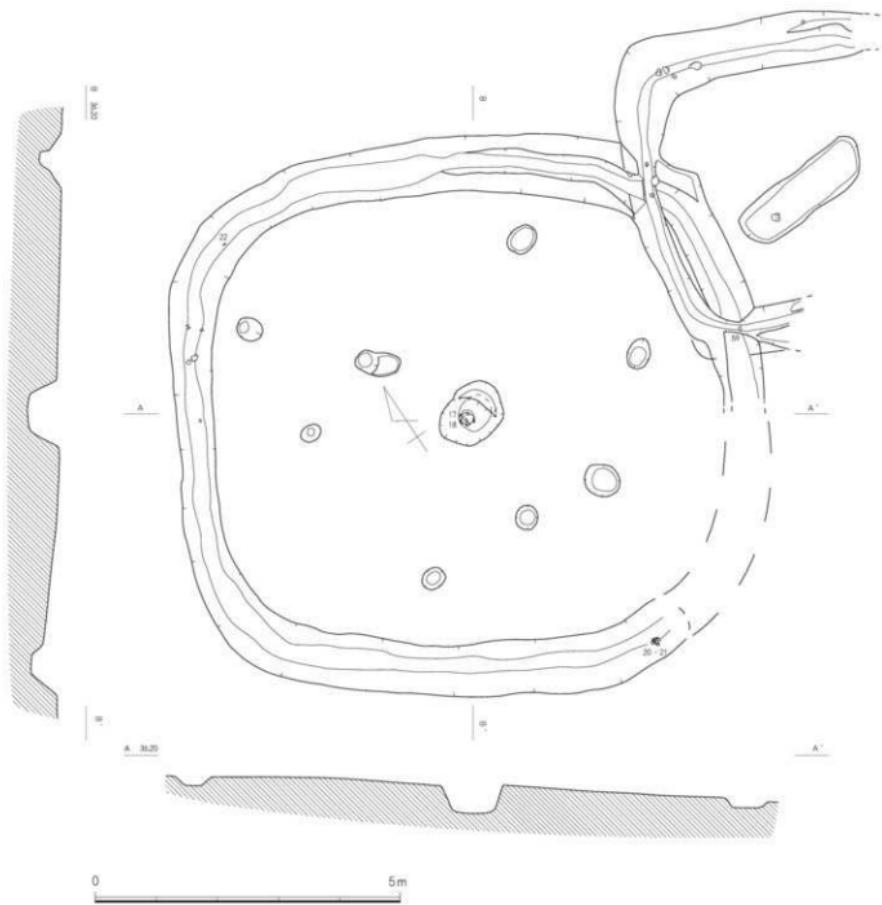
3号墳（第12図）

3号墳は、1号墳の東南東35m（墳墓の中心間の距離）に位置する副丸方形の方形墳である。9号墳に北東部の周溝を一部切られている他、南東側の一部は調査以前の掘削によって失われているが、幅0.6m～0.9m、深さ0.2m～0.4mの周溝が残る。封土はまったく残っていないかった。規模は周溝の外側で概ね南北8.4m、東西9.6m、周溝で囲まれた墳丘部分は南北7.4m、東西8.3mと、やや東西方向に長い長方形を呈する。

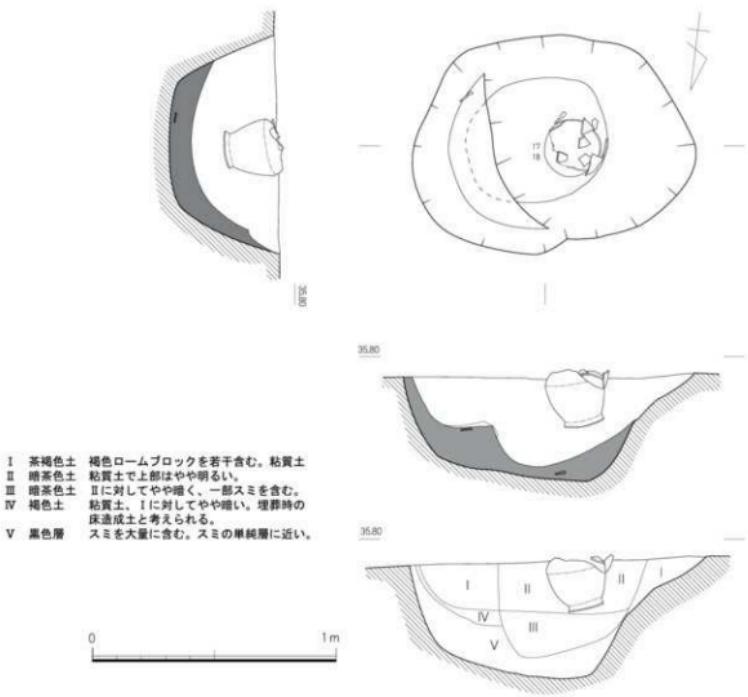
主体部は、調査時に1号火葬墓とした、骨蔵器を持つ火葬墓である。墳丘のほぼ中央部に、地山を削り込んで土坑を掘えている。土坑の底には厚さ0.2mほど船底状に炭（第13図V層）を敷いて、一度茶褐色土などで埋め戻したのちに、壺を据える穴（直径約0.6m）を掘り、暗茶褐色土を置いた上に骨蔵器を据えている。骨蔵器の口縁部は欠け、蓋も欠けているのは、封土を除かれた際か、その後の掘削によるものであろう。

骨蔵器は第14図18で、比較的長い高台（脚）が付く丸底の壺で、体部は肩が張って、あまり丸くならずに直線的に底部にいたる。17は蓋で、つまみはつかない。

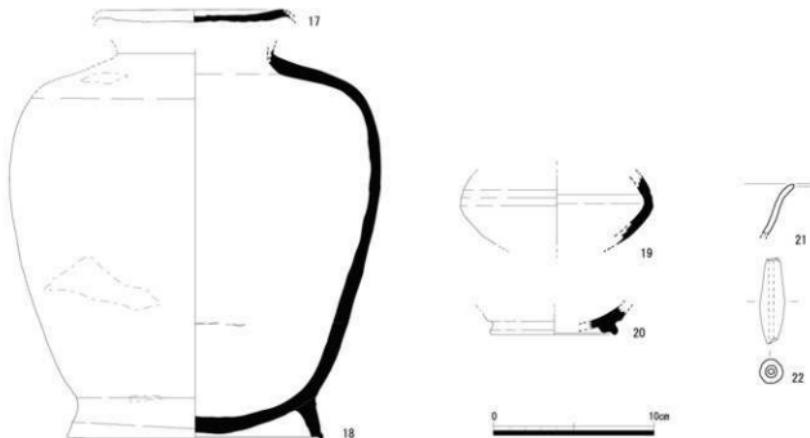
その他、図示できる遺物が、周溝内部から4点出土している。19は壺で、算盤玉形の胸部となる。20は高台付の須恵器高台付环であるが、焼成が不良で灰白色を呈する。高台は低く外側に張り出し、壺付には一条の凹線が廻る。21は土師器环で、口縁端部が小さく外反する。22は土師質の土鍤である。



第12図 3号填実測図 ($S=1/80$)



第13図 3号墳主体部実測図 ($S=1/20$)

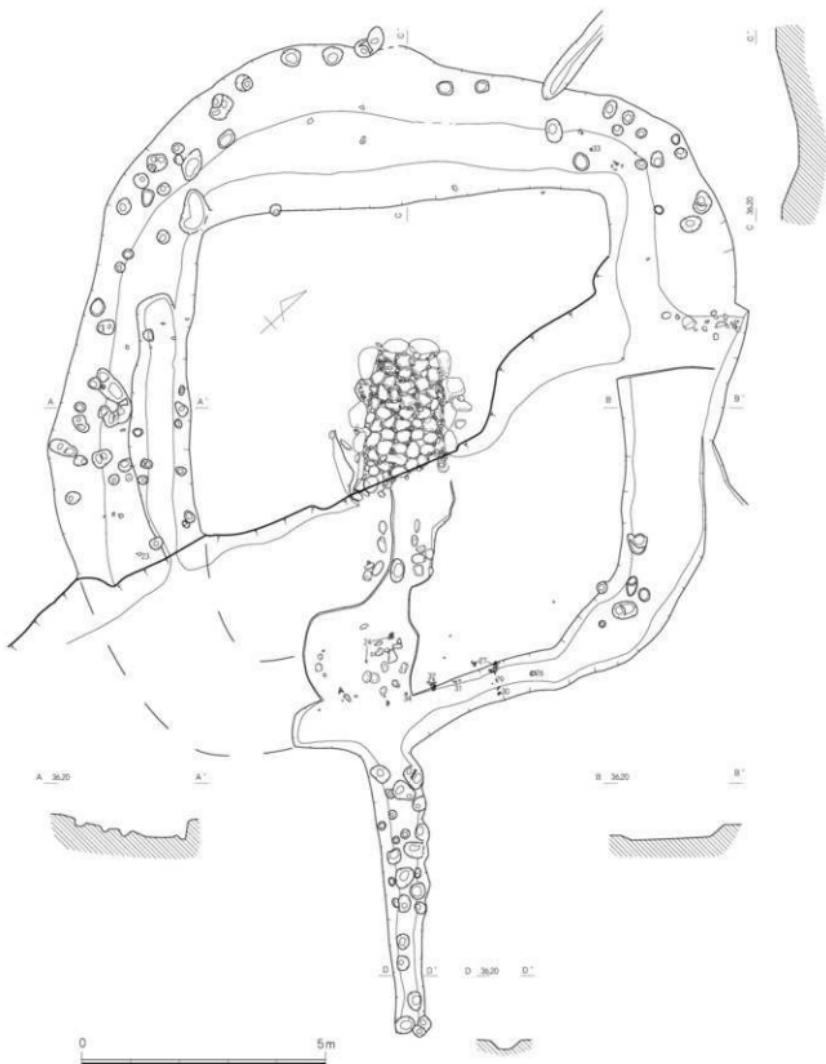


第14図 3号墳出土遺物実測図 ($S=1/3$)

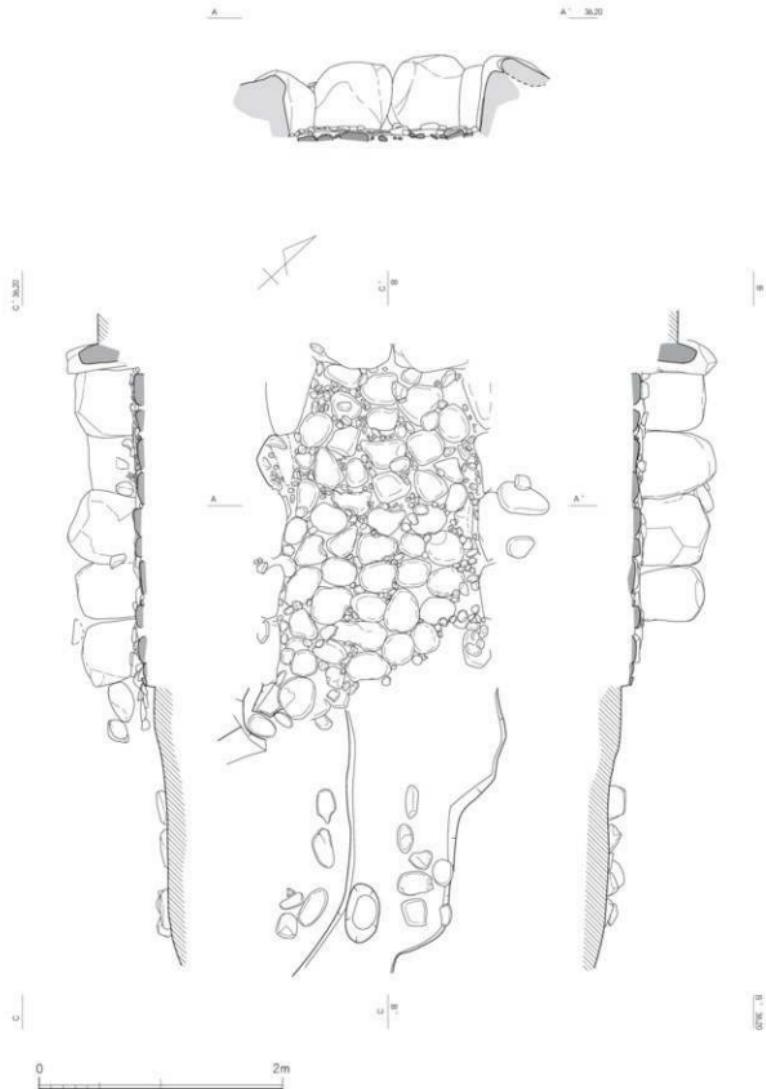
4号墳（第15図）

調査区のほぼ中央で検出された方形墳で、墳丘部が長軸10.0m、短軸9.0mのやや長方形で、周溝まで含んだ大きさは13.5m四方である。方形墳群の中では最も大きい。周溝は残りの良い部分で幅2.0m～3.3m、深さは0.3mほどで、外縁部がやや膨らむ形状を示す。

また、周溝と接続する形で幅1.0m～0.6m、深さ0.2mほどの墓道が5.5mほど直線的に伸びている。石室も含め



第15図 4号墳実測図 (S=1/100)

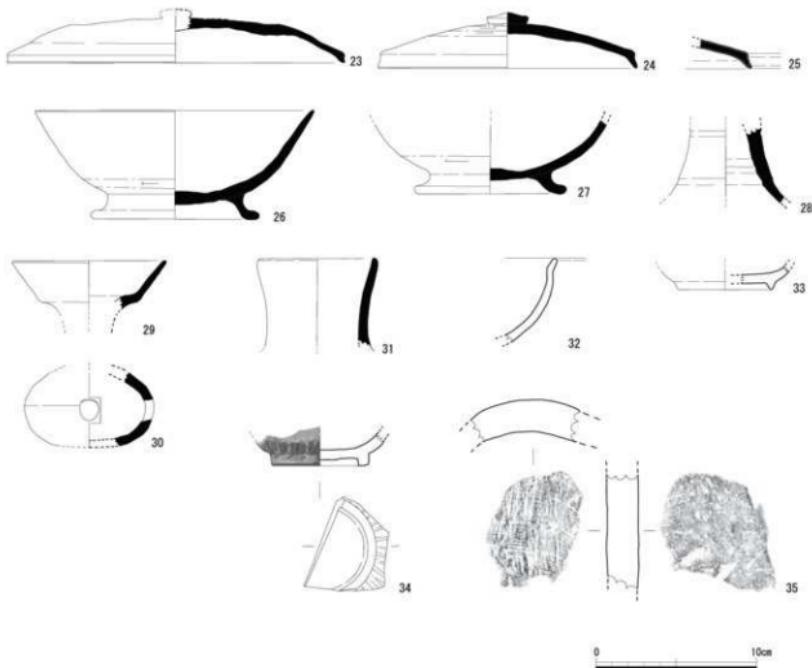


第16図 4号墳主体部実測図 ($S = 1/40$)

墳丘部分の東側2分の1ほどが削平を受けており、石室の掘方と周溝の一部が辛うじて残されているのみである。

石室は幅、高さとも0.5mほどの腰石を巡らせるが、袖石は削られているため全長は不明である。幅は奥壁側で1.2m、玄門側の残っている部分で1.6mと、逆羽子板状の单室の横穴式石室である。床面には0.3m大の扁平な川原石を敷き詰め、間には拳大的円礫を詰めていた。また、削平を受けた石室の羨道部側に、前庭部と考えられる「ハ」字状に並べた人頭大の礫がある。袖石は残っていないが、前庭部の状況から考えると、両袖式で、羨道部は短かつたものと思われる。石室内からは近世磁器染付や瓦質土器片など少量の遺物が出土している。

図示した遺物は12点で、すべて周溝からの出土である。第17図23から25は高台付环の蓋である。23は端部が小さく折れるのに対し、24と25はやや幅広く折れる。いずれも稜線を持って折れている。26と27は高台付环の身で、26は緩やかに外反しながら開く部に、端部で強く外方に折れて開く脚部を有する。27は26と同様の形態になると思われる。28は高环の脚部で二カ所に凹線が廻る。29と30は庵である。31は平瓶の口縁部か。直立気味で直線的に開く。32は土師器環で、内湾して開く体部に、端部が緩やかに小さく折れて外傾する口縁部がつく。33は土師器の塊で、断面三角形の高台が付く。34は白磁碗で、体部下端には強い片切彫りの痕跡が連続している。外面は残存部では袖葉は確認できない。内面は全て施釉され、一段の段をもって延びる。釉は光沢のない灰色の強い灰緑色を呈する。35は古代瓦で、内面に布目痕、外面は丁寧なナデである。

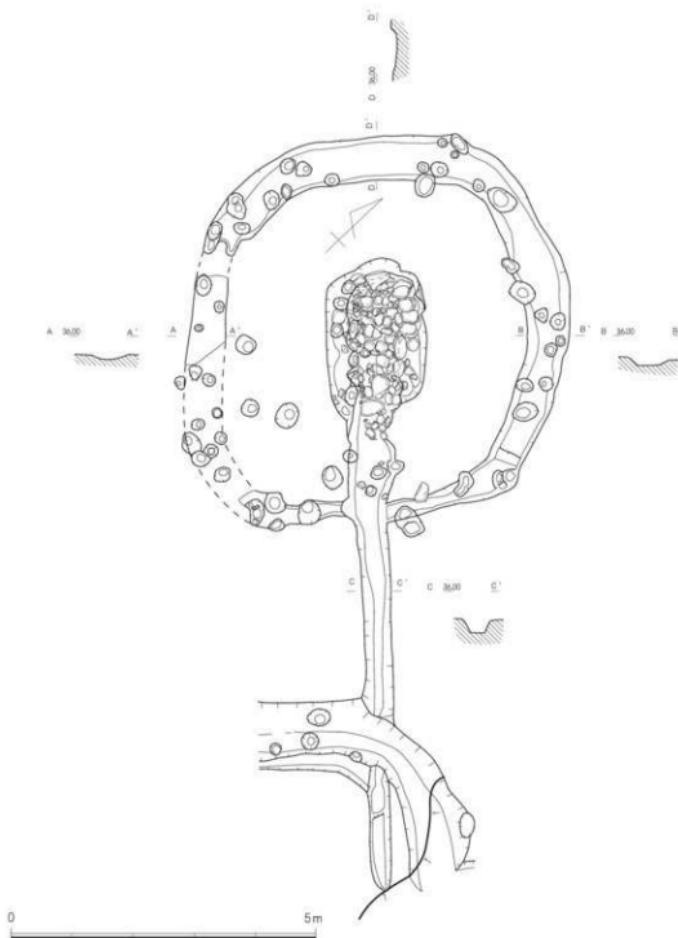


第17図 4号墳出土遺物実測図 (S=1/3)

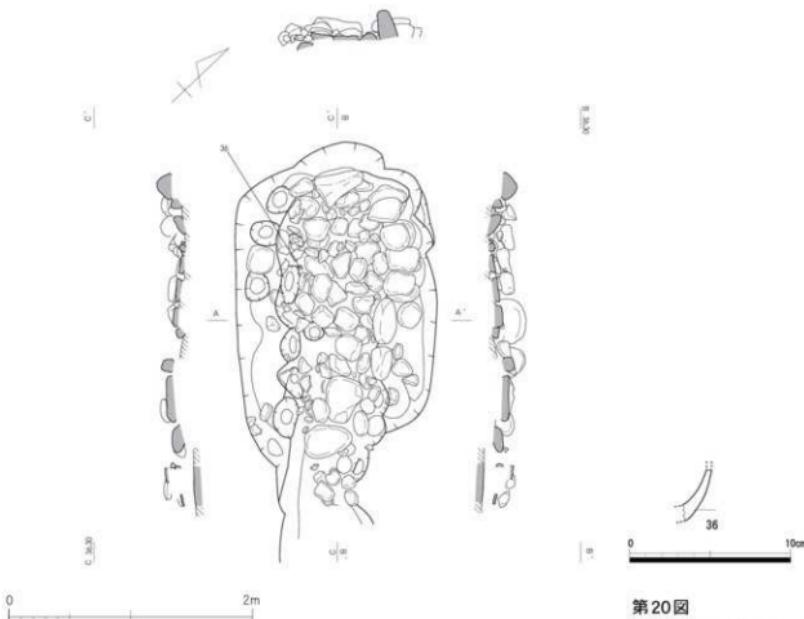
5号墳（第18図）

4号墳の南西側に並んで位置している。埴丘部は長軸5.3m、短軸4.8mで、やや北東側の一辺が膨らむ。墓道が周溝の外に直線的に約6m伸びる。墓道は8号墳の周溝に切られている。

周溝は幅0.6m前後で、残存する深さは0.1m程度である。周溝内からはピットが多く検出されているが、同時代のものかどうかは不明である。墓道は約0.4mで、残存する深さは0.2mほどである。石室は、残存する掘方の長さ2.2m、幅1.6mで、石室内部は全長1.7m、幅0.8mほどとなるだろう。石室は最下層の石しか残されておらず、さらに墓道部は大きく削平を受けているため、構造を把握するのは難しい。石室の側壁は人頭大の礫を小口側を内側に向



第18図 5号墳実測図 ($S=1/80$)

第19図 5号墳主体部実測図 ($S=1/40$)第20図
5号墳出土遺物実測図
($S=1/3$)

けて並べている。床には同程度の大きさの礫を敷き詰めている状況が確認できる。石室の入口側には長軸40cmほどの大きな石が据えられており、それが砾石とすれば、その東に羨道部、そして墓道と繋がっていたと考えられる。

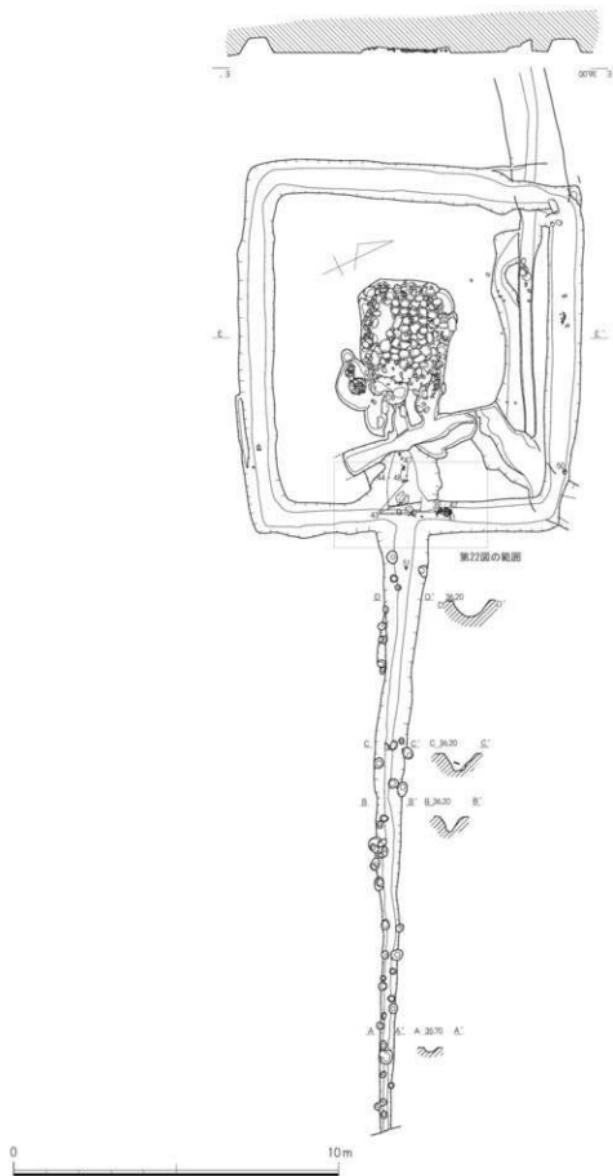
遺物は第20図36で、石室内から出土した青磁片である。底部に近い部分で、細かな櫛目文を横方向に入れ、その下位には一条の弦線を入れている。碗か壺であろうか。12世紀後半から13世紀代のものか。

6号墳（第21図）

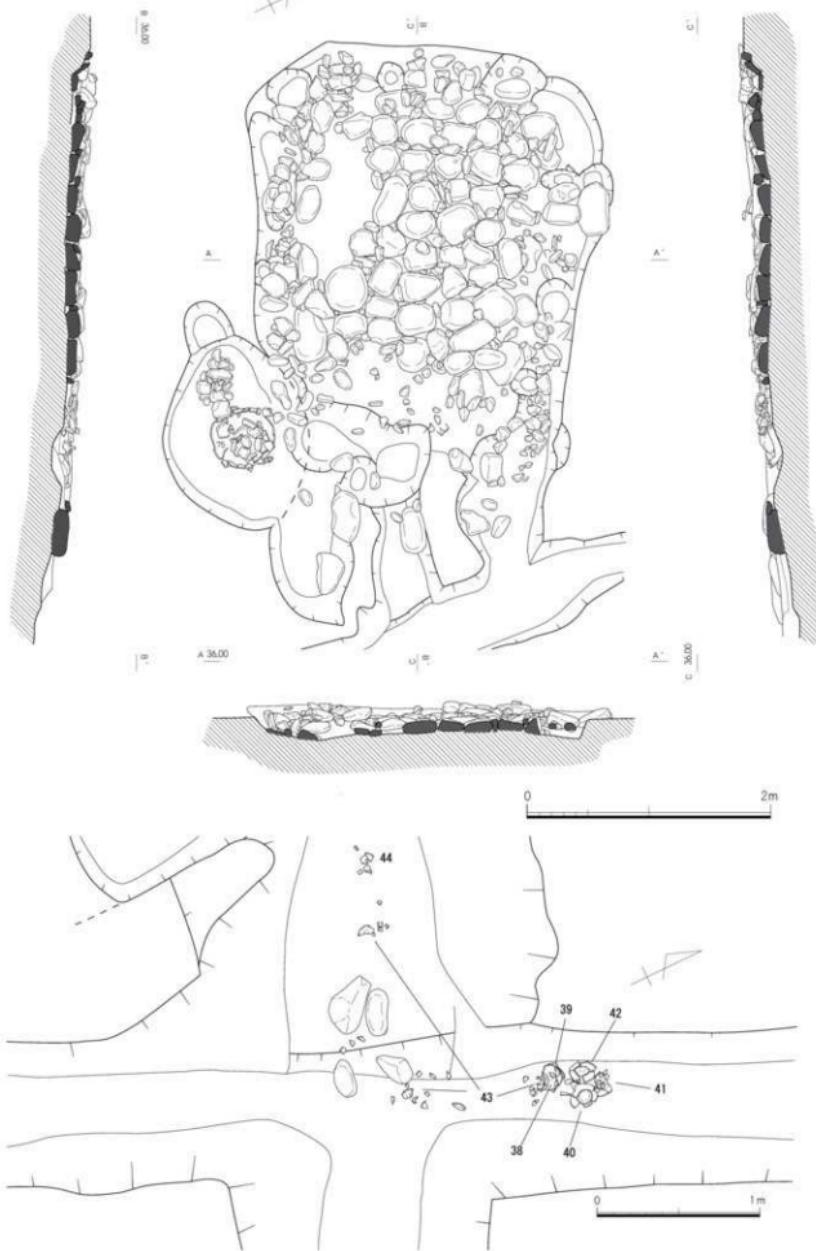
調査区の南側で検出された、方形墳では2番目に大きなものである。墳丘部は長軸9.5m、短軸8.3mとやや縦長の長方形を呈する。周溝まで入れた大きさは、11.5m×10.5mとなる。周溝は幅約1.0mで、残存する深さは0.3m～0.5mである。墓道は周溝の外側に18.5m伸びているが、削平されて全長は不明である。方形墳群で最も長い墓道となる。墓道の幅は周溝に接する部分で1.5m、そこから徐々に幅が狭くなり、最も東側で0.3mとなる。残存する深さは周溝に接する部分で0.5m、最も東側では0.1mほどしかない。

石室は、側壁の石はほとんど残されていない。床面には20～30cmの扁平な川原石が敷き詰められ、石の隙間は拳大の礫で埋められている。床面の礫敷きの大きさは奥行き2.5m、幅1.9mほどになる。玄門部が削平を受けているために、石室の構造は不明である。

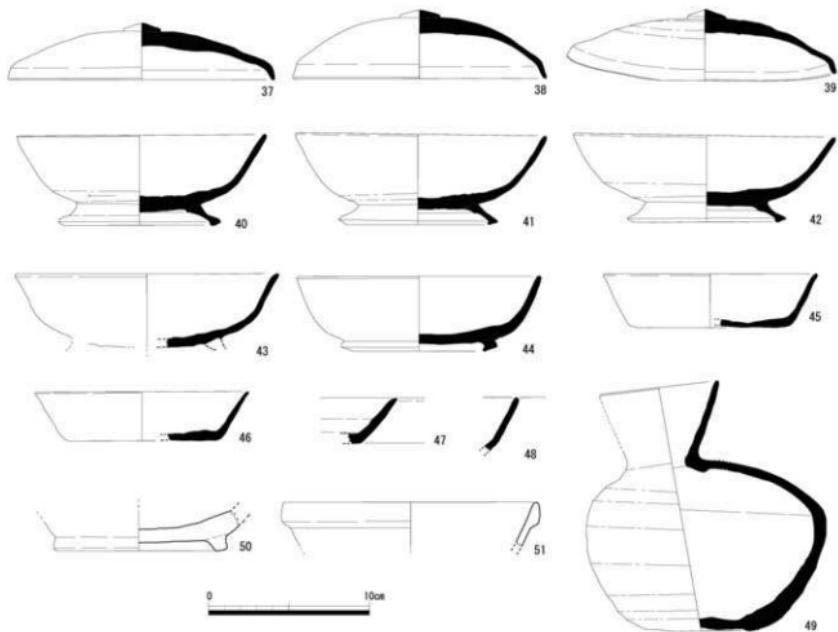
遺物は石室内、周溝、墓道から出土している。特に埋没当初の状況を呈しているのは、37から42の高台付壙と蓋である（第22図、図版14）。プライマリーな状態ではないが、一括資料として問題ない。蓋（37～39）はいずれも扁平な宝珠溝みで、口縁端部はやや長めに折れて緩やかに聞く同形態である。口径は15.8～16.7cmである。いずれも焼成不良で、灰白色を呈する。壙身は40から42で、緩やかに内湾しながら外傾して開く体部に、端部が内側に小さく張り出す脚部が付き、高台内（裏）中央を一段深く削り込むという共通の形態を有する。口径は15.5～16.3cmである。43は周溝や羨道部から出土した高台付壙で、40などと同形態である。44は羨道部から出土した短い高台の



第21図 6号墳実測図 ($S = 1/150$)



第22図 6号墳主体部と周溝遺物出土状態



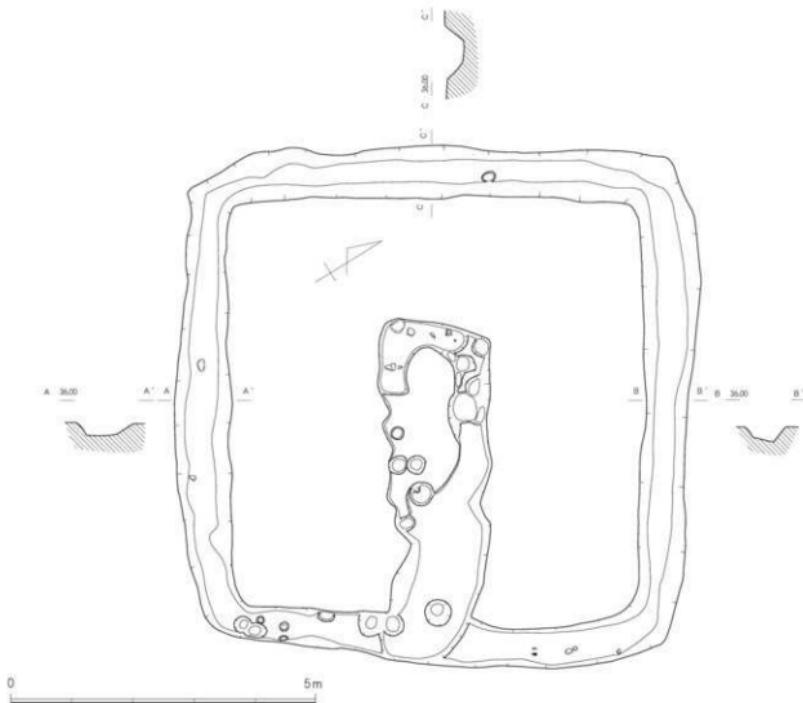
第23図 6号墳出土遺物 (S=1/3)

付く壺で、高台端部の処理は40～42と同様である。45から47は壺で、底部は回転ヘラ切りと思われるが、いずれも焼成不良で、表面が風化しており明確でない。48も壺で、焼成は良好である。49は平瓶で、やや肩の張った平底の体部に、真っすぐ伸びて開く口縁部が付く。小林氏が7世紀前半とする資料である（小林2016）。50は周溝内から出土した高台の付く壺と考えられる。器壁は厚い。51は白磁碗で、口縁部が玉縁を呈する。墓道埋土上面から出土しているので、12世紀代には墓道が埋まっていたことを示している。

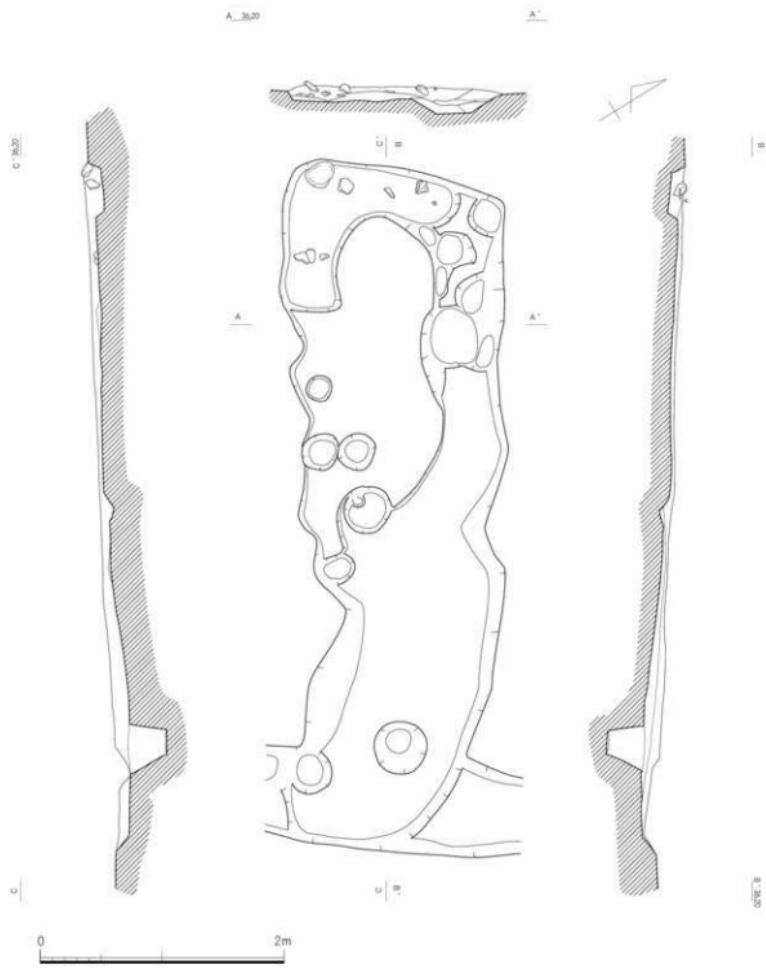
7号墳（第24図）

調査区の最も南側で確認された方形墳である。さらに南側には深い谷が入るので、調査区外に古墳が展開する可能性は低いと考えられることから、7号墳が古墳群では最も南に位置することになる。墳丘部の大きさは長軸7.0m、短軸6.8mとほぼ正方形に近い。周溝も含めた大きさはほぼ8.4m四方となる。墓道の存在は確認されなかつた。

石室は、石材をすべて抜き取られており、石室掘方の周縁部が0.15mほど低くなっていた。



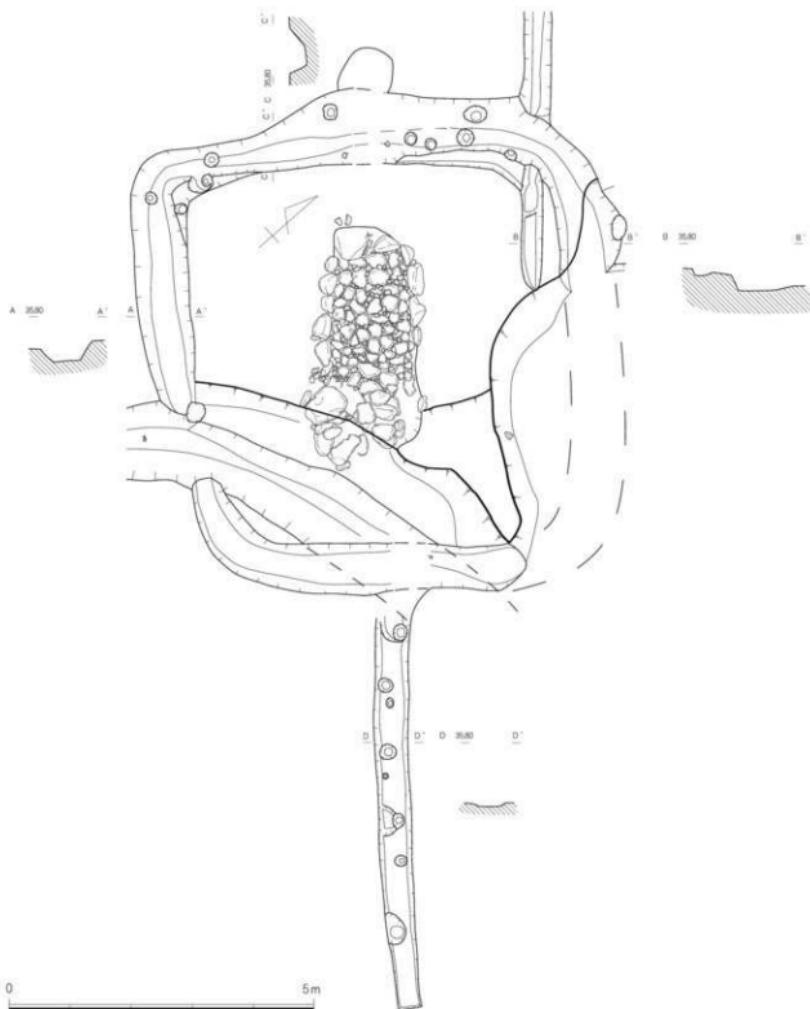
第24図 7号墳実測図 ($S=1/80$)



第25図 7号墳主体部 ($S=1/40$)

8号墳（第26図）

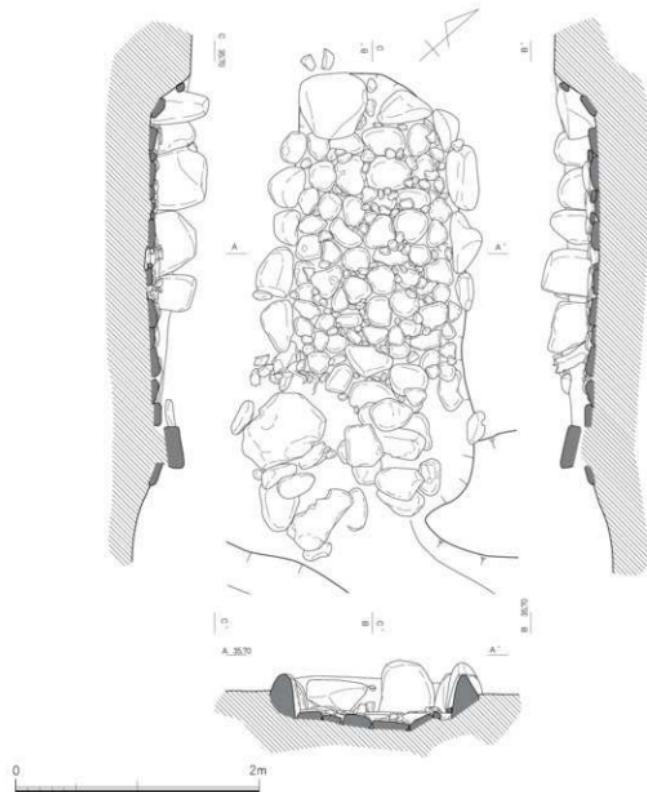
6号墳の北東側で確認された方形墳である。周溝の東側から南側にかけて後世の削平があり、削平は一部石室にも及ぶことから、正確な規模や形状は不明である。残存する部分からすると、墳丘部分の大きさは、 $6.1m \times 6.0m$ 、周溝まで含めると $7.9m \times 7.8m$ ほどと、石室の長軸方向に僅かに長い長方形を呈している。周溝は幅 $0.8m$ 前後で、深さは $0.15m$ ほどとなる。石室は、腰石となる川原石を縦に据えた一段目だけが残り、床面には人頭大の河原石を



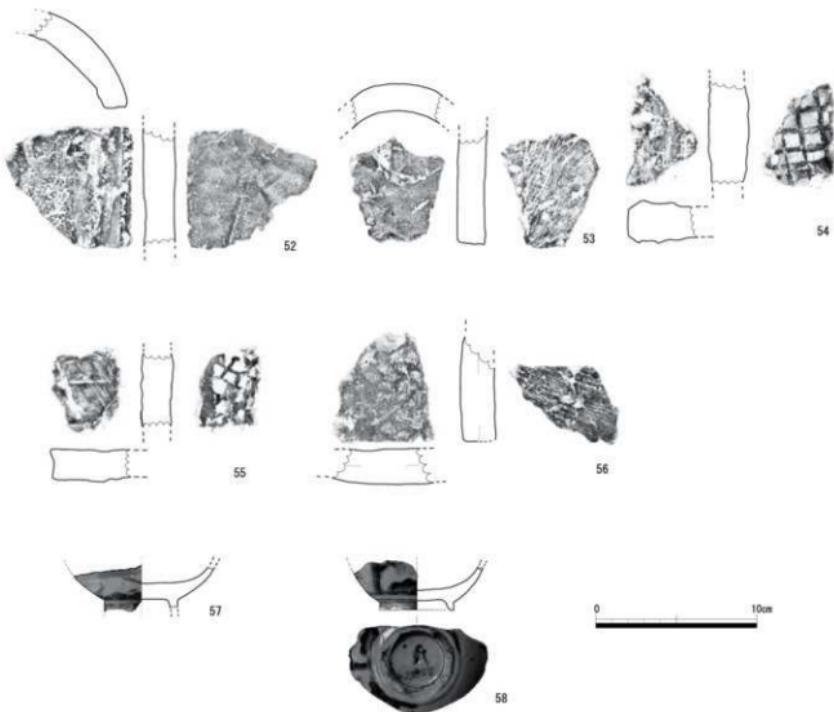
第26図 8号墳実測図 ($S=1/80$)

敷き詰め、隙間にこぶし大の礫を入れている。玄門があったと思われる南東側は、閉塞石の可能性がある礫が動いた状態で見つかっている。明確な袖石は確認できない。

遺物は、石室内の一括資料として古代瓦と近世磁器がある。古代瓦は第28図52から56で、外面に大きめの格子タタキ、内面には布目模が確認できる。56は2枚の粘土を重ね合わせているのが観察できる。57と58は近世の染付塊で、18世紀代のものである。



第27図 8号墳主体部 ($S=1/40$)



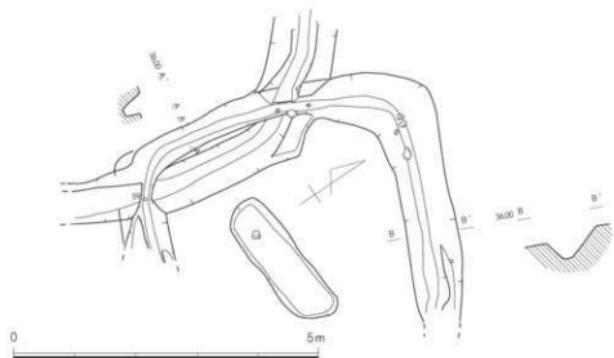
第28図 8号墳出土遺物 (S=1/3)

2) 方形周溝遺構（旧9号墳）（第29図）

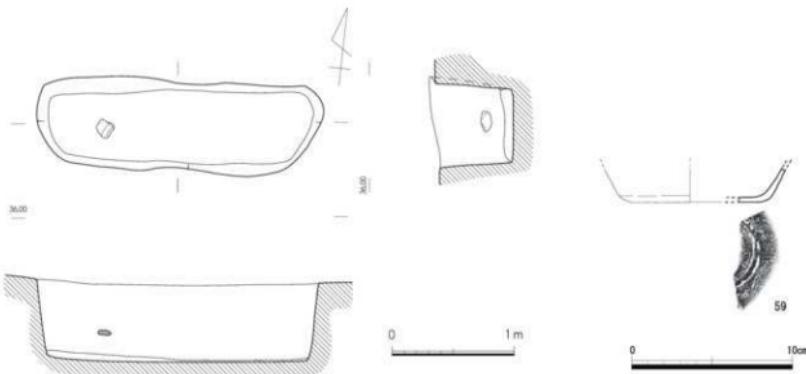
3号墳の東側で確認された方形周溝状遺構である。3号墳の周溝を切っている。周溝の東側半分ほどは削平を受けており、全形はうかがい知れない。南北の幅は、周溝の内側で3.8m、外側で5.4mである。周溝の幅は0.4m～0.8m、深さは0.3mほどである。周溝で囲まれた中央部分に、軸を対角線にとる土坑が検出されている。土坑は東西2.3m、南北0.7mで、深さは0.6mほどである。この土坑と周溝状遺構との関係は不明である。

遺物は周溝中から出土した1点である。第31図59は土師器壺で、底部には回転糸切り痕が残る。

出土遺物からすると、この方形周溝状遺構は中世の所産とすることができます。



第29図 方形周溝造構 (S = 1/80)



第30図 方形周溝造構中心部土坑 (S = 1/40)

第31図
方形周溝造構出土遺物 (S = 1/3)

3) 火葬墓および焼土坑

概報において「火葬墓」とされたものは計17基あるが、概報にもある通り、多くはいわゆる「現地火葬墓」とされる壁が被熱を受けていたり、床面に炭が堆積した土坑である。骨蔵器がある1号（ただし、これは3号墳の主体部のため、ここでは扱わない。）、4号、6号墓については火葬墓で間違いなく、15号墓については、類似例から火葬墓とした。その他については情報が少なく、現状において火葬墓と断定できるものはない。これらは「茶毬跡」なのか、いわゆる「現地火葬墓」なのかの区別が難しいため、これらは「焼土坑」として扱う。ただし、号数については調査時のみである。

また、2号火葬墓とされるものは備前焼甕を埋置しており、火葬墓とする根拠がないので、新たに1号埋甕造構として別に扱うこととする。

3号焼土坑（旧3号火葬墓） (第32図)

4号墳の西側で確認された土坑である。大きさは東西1.1m、南北0.8m、深さは0.15mで、隅丸の長方形を呈する。床面から壁面にかけて、被熱を受けて硬化している。土層断面を見ると、炭を含む層（IIからIV層）が全体にあり、中央部でそれを掘り起こし、そこに粘質の強い明茶色土を置いたように見える。

出土遺物はないが、状況から判断すると火葬後に取骨を行つた荼毘跡と考えられる。時期は不明である。



第32図 3号焼土坑実測図 (S=1/20)

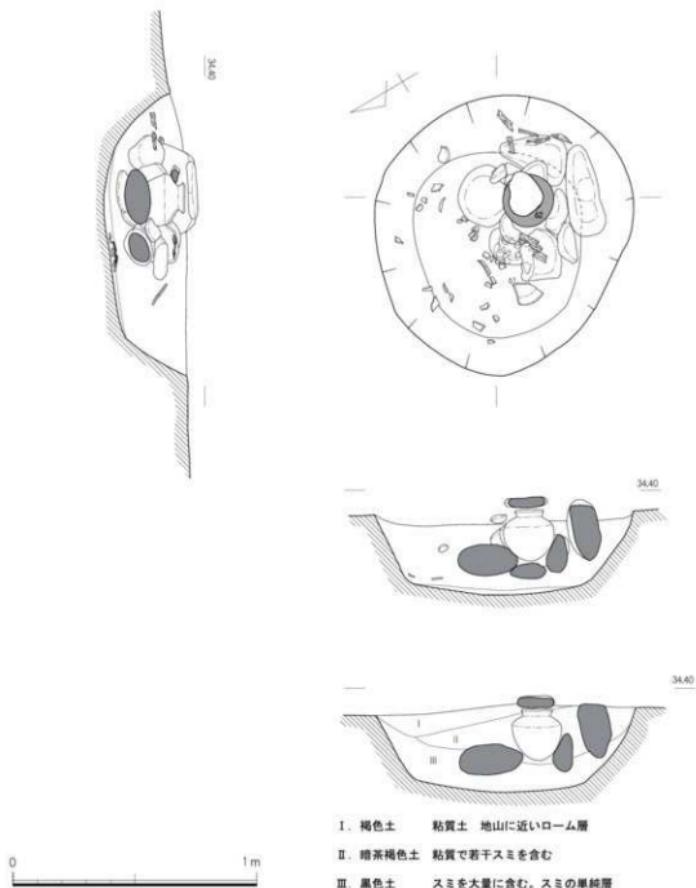
4号火葬墓（第33図）

4号墳の東側で検出された火葬墓である。大きさは径が1.15mから1.05mのやや不整円形を呈し、残存する深さは0.35mほどである。床面はやや緩やかにくぼむ。土層図からわかるように、炭の単純層（III層）を土坑床面に敷き、礫で小石室を堵え、その中に須恵器の壺を置き、さらに蓋として扁平な安山岩を被せてある。本来の蓋と思われる61の蓋は、破片となって石室の外から出土している。これは使用しようとした際に割れて廃棄されたものであろうか。

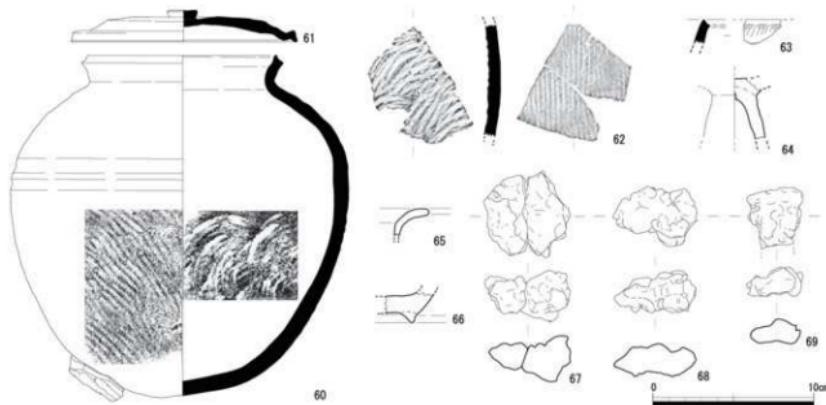
円形の土坑の床面やIII層下部から、土器、須恵器の破片（接合せず、摩滅が認められる破片が多い）や鉄滓があたかも撒かれたように出土している。これは、明らかに炭層を床に敷く前の段階で何らかの行為が行われたことを示唆している。特にしばしば古墳や横穴墓から出土する鉄滓（椀型滓）が混ざっていたことは、意図的であることを証左である。九州内では、火葬墓に伴う鉄滓は他に3カ所で知られるが（小嶋篤2009）、大分県内では初例である。鉄滓はいわゆる椀型滓で、鍛冶工房からの持ち込みである。

第34図60は骨蔵器に使用された丸底の短頸壺で、底面に近い部分に他の須恵器の破片が軸着している。外面は61は60の蓋に本来使われるはずだった环、または壺の蓋で、上面が窪む扁平な摘みを持ち、口縁端部は一度上方に折れ曲がってから、強く屈曲して外側に踏ん張る形状を呈する。62から66は床面から出土した200個近い破片の内、図化できた5点である。62は須恵器壺、63は須恵器壺などの口縁端部、64は土師器の高环である。65は土師器壺の口縁部、66は土師器で高台を持つ底部である。67～69も同じく床面から出土した鍛冶炉で生成される、いわゆる椀型滓である。69は割れた痕跡がある。

なお、この火葬墓は、土壠床面に破碎した土器や鉄滓をばらまいた後に火葬を行い、その後取骨した上で、石室を構築し、藏骨器を納めたものと考えられる。



第33図 4号火葬墓実測図 ($S = 1/20$)

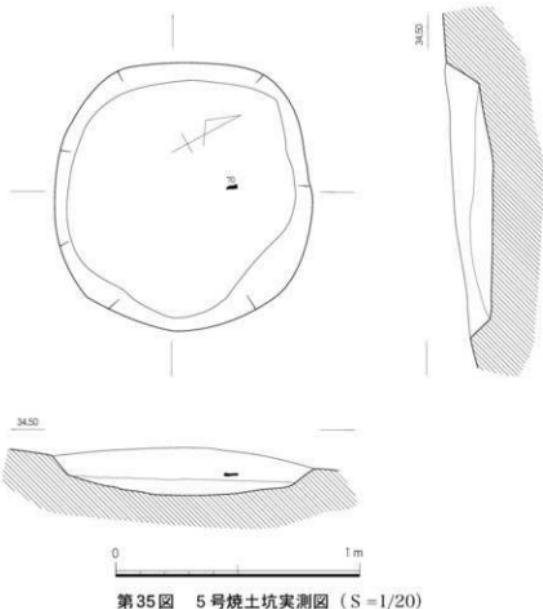


第34図 4号火葬墓出土遺物 (S=1/3)

5号焼土坑 (旧5号火葬墓)
(第35図)

8号墳の墓道の先で検出された土坑である。径が1.05mから1.1mの不整な円形を呈する。全面に炭が堆積していた。

遺物は鉄釘（第36図70）で、頭部を小さく折り返している。先端部を僅かに欠き中途で曲がっているが、本来は真っすぐだったものであろうか。あるいは折釘であった可能性もある。1本しか出土していないので、用途については不明である。



第35図 5号焼土坑実測図 (S=1/20)

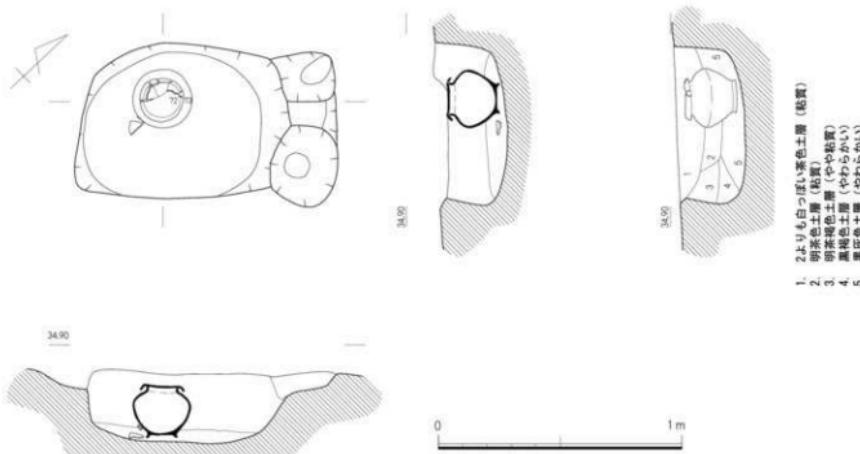


第36図
5号焼土坑出土遺物 (S=1/3)

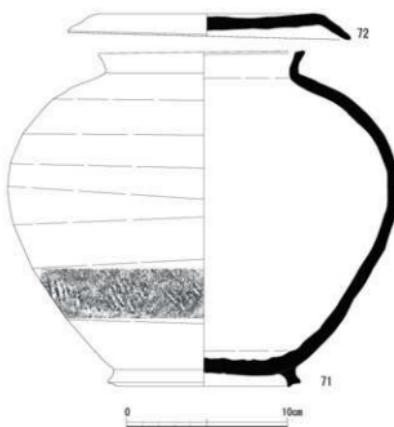
6号火葬墓（第37図）

調査区の最も南側で確認された火葬墓である。長軸0.85m、短軸0.62m、残存する深さ0.28mのやや北西側が脚張りになる長方形の土坑に骨蔵器を据えたものである。北東側は別のピットに切られている。床面に黒灰色土（5層）を敷き、その中に正位で脚付きの短頸壺を据え、転用した皿を蓋として被せていた。

第38図71は骨蔵器である。小さく「ハ」字形に開き内傾する脚が付き、やや最大径を上位に持つ体部に短い口縁部がやや外反しながら開く壺である。72は蓋として転用された皿である。口径は17.4cm、器高は1.2～1.6cmで、口縁部は底部から屈曲して直線的に開く。8世紀前半とされるコンゲ窯跡出土の皿との間で型式変化が認められる。



第37図 6号火葬墓実測図 ($S = 1/20$)



第38図 6号火葬墓出土遺物 ($S = 1/3$)

7号焼土坑（旧7号火葬墓）（第39図上左）

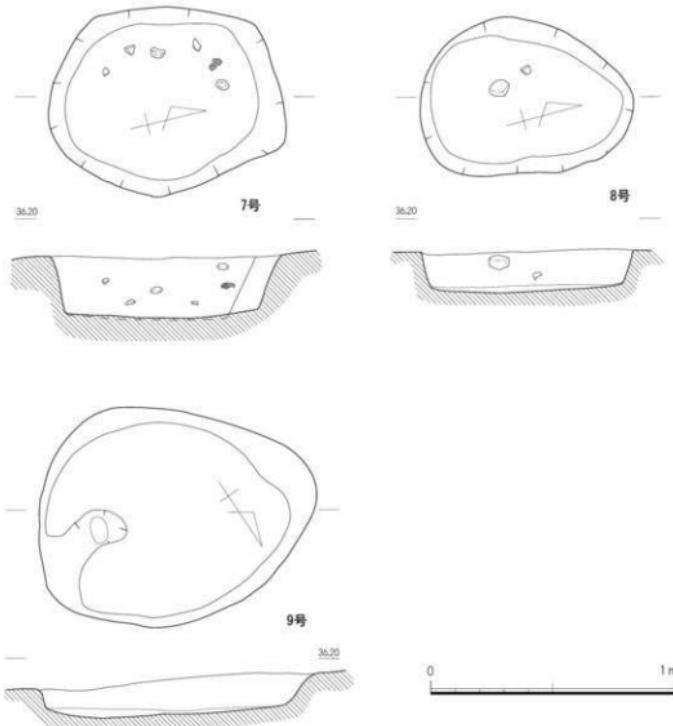
3号墳の西側で、他の4基の土坑と一緒にまとめて検出された。南北0.95m、東西0.77mで、残存する深さは0.25mの不整な長方形を呈する土坑である。出土遺物はない。

8号焼土坑（旧8号火葬墓）（第39図上右）

7号土坑と9号土坑に挟まる形で検出された。長軸0.76m、短軸0.63mの不整楕円形を呈する土坑である。残存する深さは0.17mである。出土遺物はない。

9号焼土坑（旧9号火葬墓）（第39図下）

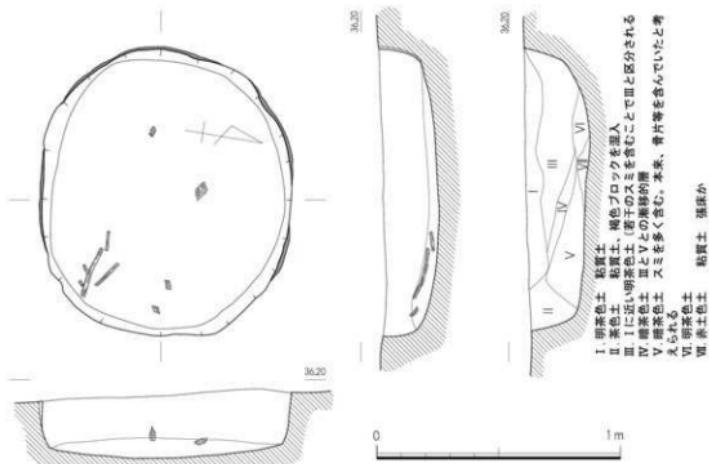
8号土坑の西側で確認された土坑である。長軸は1.17m、短軸は0.93mの不整な楕円形を呈し、残存する深さは0.15mである。出土遺物はない。



第39図 7号、8号、9号焼土坑実測図 (S=1/20)

10号焼土坑（旧10号火葬墓）（第40図）

9号土坑の北側で検出された土坑である。長軸1.17m、短軸1.04mのやや楕円形を呈する土坑で、残存する深さは0.23mである。壁面および床面は被熱によって変色、硬化している。断面を見ると、炭を多く含むV層を掘り込んで1層からIV層が堆積している。すなわち、火葬が行われた後、収骨行為があつたことを示している。よって、この土坑は荼毘跡と判断できる。

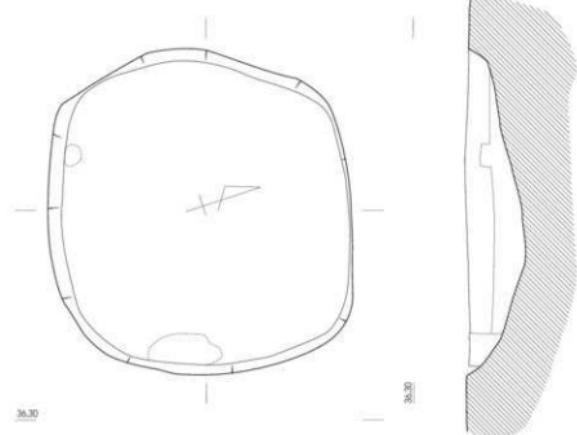


第40図 10号焼土坑実測図 (S = 1/20)

11号焼土坑

(旧11号火葬墓) (第41図)

調査区の西側中央付近で確認された土坑で、一辺1.23m × 1.33mの膨らみを持つ方形を呈する。残存する深さは中央の深いところで0.23mである。壁面が被熱で黄褐色に硬化している。出土遺物はないが、壁面の状況からこの土坑で火葬が行なわれたと判断した。収骨行為があつたかどうかは判断できなかつた。



第41図 11号焼土坑実測図

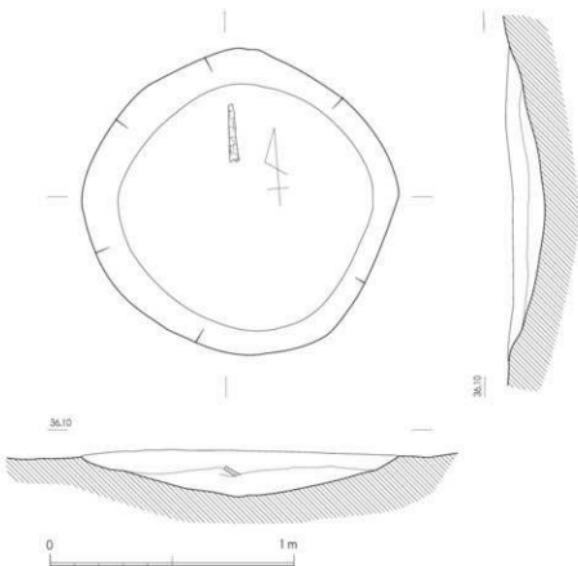
(S = 1/20)

12号焼土坑（旧12号火葬墓）
(第42図)

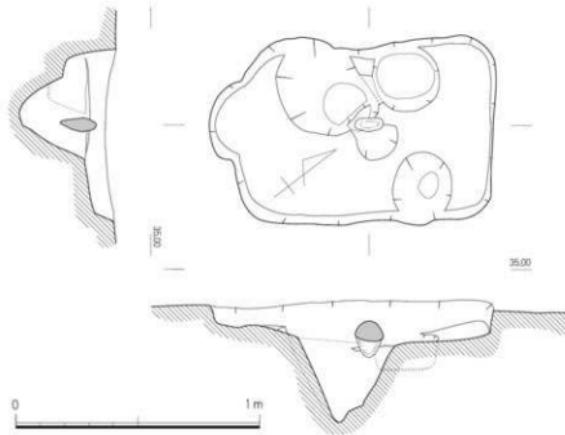
11号土坑の東側で検出された土坑で、一辺1.22mほどの膨らみを持つ方形を呈する。残存する深さは中央の深いところで0.13mほどである。壁面が被熱で硬化し、床面には炭化材が残る。出土遺物はないが、壁面の状況からこの土坑で火葬が行われたと判断した。取骨行為があったかどうかは判断できなかった。

13号焼土坑（旧13号火葬墓）
(第43図)

8号墳の東側で確認された土坑で、長軸1.03m、短軸0.7m、残存する深さ0.17mの長方形を呈する土坑である。いくつかのピットにより切られている。出土遺物はない。



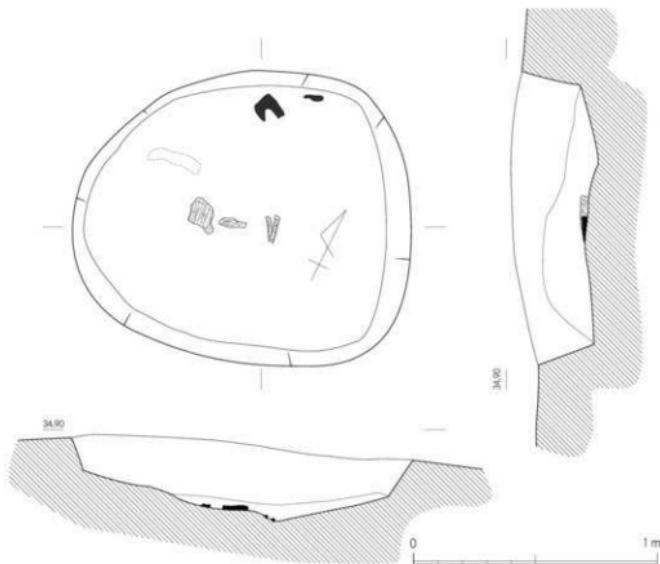
第42図 12号焼土坑実測図 (S=1/20)



第43図 13号焼土坑実測図 (S=1/20)

14号焼土坑（旧14号火葬墓）（第44図）

調査区の南東隅で検出された土坑で、長軸1.47m、短軸1.19mのやや方形ぎみの不整梢円形を呈する。残存する深さは0.3mである。床面や壁面に顕著な被熱の跡は認められないが、床面からは炭化材を含む炭化物が出土していることから、ここで火葬が行われたと判断した。遺物の出土はない。



第44図 14号焼土坑実測図 (S=1/20)

15号火葬墓（第45図）

調査区のほぼ中央、1号墳と4号墳の間で検出された、土坑の中に甕を伏せて据えた火葬墓である。土坑は、直径0.53～0.56mの円形を呈し、残存する深さは0.12mである。中央に土師器甕を伏せて置いている。土師器甕を容器とする火葬墓は、至近の坂手腰城跡や勘助野地遺跡、さらにやや離れた森山遺跡などで確認されているが、特に森山遺跡では倒置された事例もあり、この15号土坑も同様の火葬墓と考えても良いであろう。

第46図73は容器に使われた土師器甕である。口縁部は「く」字に折れ、直線的に聞く。胸部はあまり膨らまないと考えられる。外面はヘラ削りの痕跡が残る。胴部形状がわからないので時期比定は難しいが、8世紀代としても問題ないと考えられる。



第46図 15号火葬墓出土遺物 (S=1/3)

第45図 15号火葬墓実測図
(S=1/20)

16号焼土坑（旧16号火葬墓）

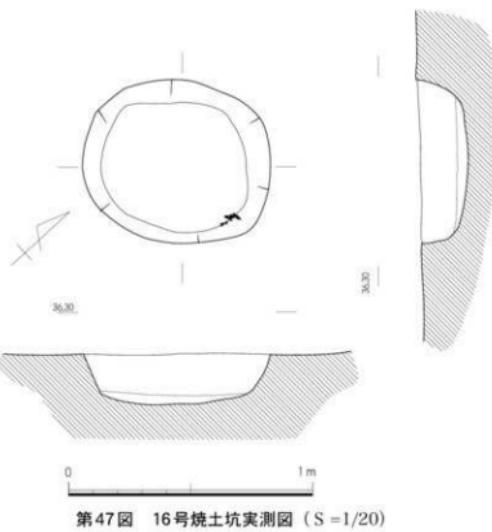
(第47図)

10号土坑に近接して確認された土坑である。長軸0.76m、短軸0.66mの胸張の長方形を呈する。残存する深さは0.2mである。床面や壁面には顕著な被熱の跡は見られなかったが、わずかに炭化物が出土している。ほかに遺物の出土はなかった。

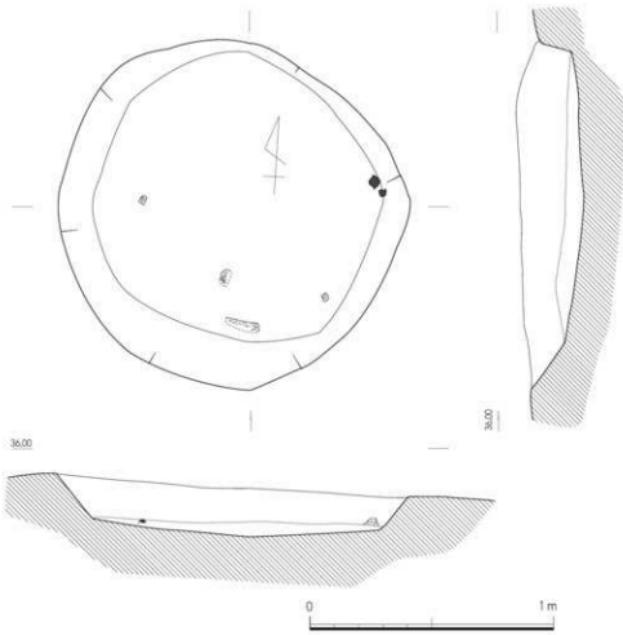
17号焼土坑（旧17号火葬墓）

(第48図)

6号墳の西側で検出された、直径約1.42mの不整な円形を呈する土坑である。残存する深さは0.18mである。壁面などでの明確な被熱の痕跡は認められないが、床面からは炭化材を含む炭化物が出土しているので、状況から判断して火葬が行われたと考えられる。収骨行為があったかどうかは判断できなかった。



第47図 16号焼土坑実測図 (S = 1/20)



第48図 17号焼土坑実測図 (S = 1/20)

4) 埋葬遺構

1号埋葬遺構

(旧2号火葬墓) (第49図)

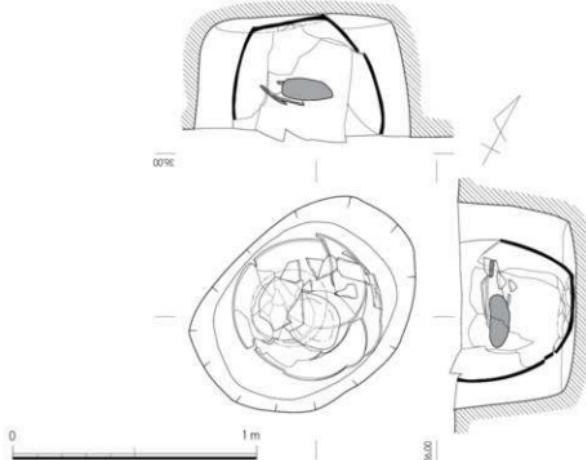
2号火葬墓は、3号墳のすぐ西側で検出されたもので、土坑の中に大型の備前焼壺が正置された状態で出土している。蓋についていたと考えられる扁平な安山岩(長軸30cmほどで、厚さは8cmほど)が壺内部に落ち込んだ状態で出土し、さらに口縁部の破片が1点もないことから、本来この壺は口縁部を欠いた状態で埋置されていたものと考えられる。頭部のところに不自然な欠け(打撃によるものか)があるのもそれを裏付ける。

調査所見として、これを「火葬墓」とした根拠(例えは焼骨が出土したなど)が残されていないので積極的に火葬墓とは言いたがたい。成人であっても小柄であれば、そのまま取まるほどの大きさがあるので、「甕棺墓」とした方が良いかもしれない。

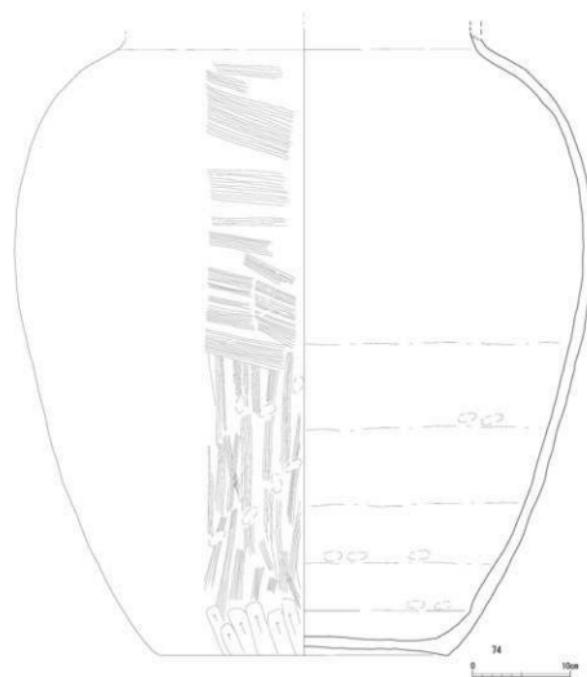
第50図74が、備前焼壺である。底径29.5cm、胴部最大径59.3cm、残存する高さは63.0cmである。おそらく、短く折れて開く、玉縁状の口縁部が付くものと思われる。口縁部がないので、厳密な時期の決定は難しいが、なで肩の胴部形状から14世紀の後半から15世紀の前半に位置付けられるものであろう。

2号埋葬遺構 (第51図)

6号墳の石室を切って作られた、瓦質の大型壺を納めた遺構である。この遺構は概報には記載がなく、遺構番号も付されていないため、ここでは2号埋葬遺構として扱う。長径1.6m、短径1.2mの掘り込みの中央に、更に穴を掘って壺を正置させている。壺は底部の大部分を欠き、口縁部は内部に落ち込んだ状態で出土している。棺とし



第49図 1号埋葬遺構実測図 (S=1/20)

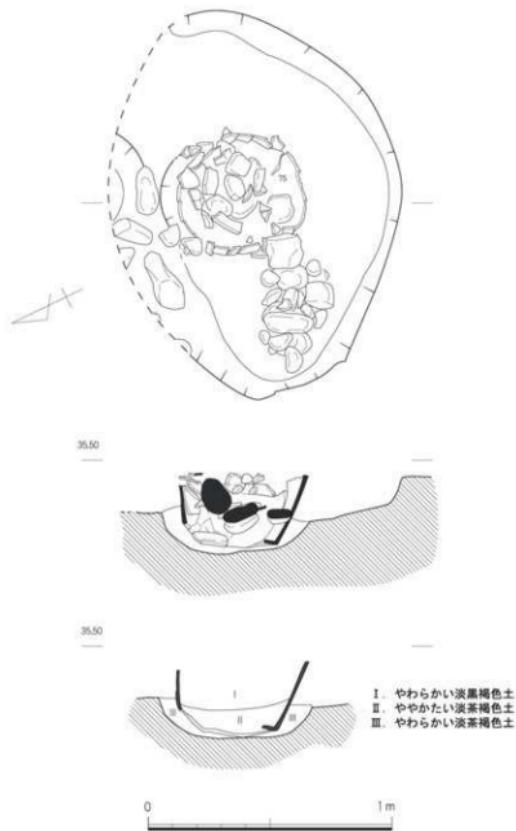


第50図 1号埋葬遺構出土遺物 (S=1/5)

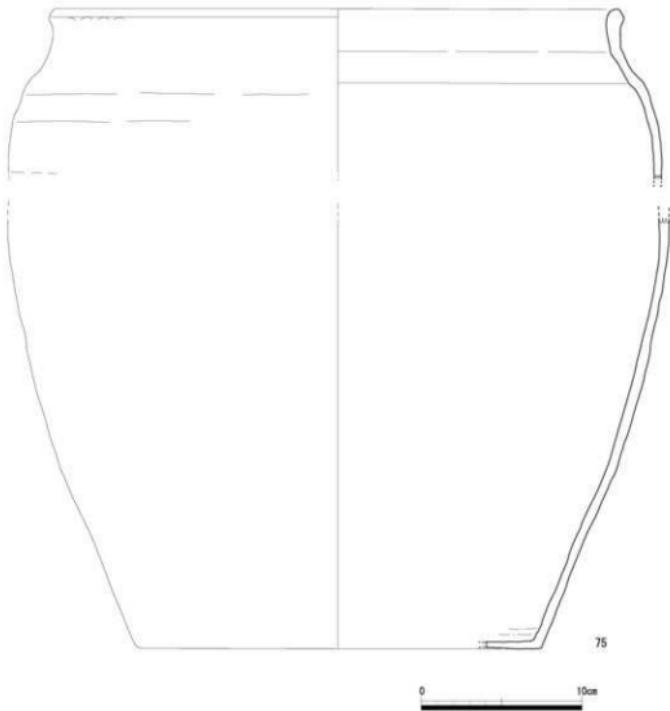
て使用したものかどうかの判断はできなかった。

第52図75の甕は口径46.6cm、底径32.6cmで、器高は52cm程度になると想われる。口縁部は直立ぎみに開き、胴部は僅かに肩が張る。底部は平底である。外面はヘラ削り、内面はナデ調整である。

時期は1号埋甕遺構と重なる15世紀代と考えられるが、瓦質の大型甕の出土例が少なく確定的ではない。



第51図 2号埋甕遺構実測図 ($S=1/20$)



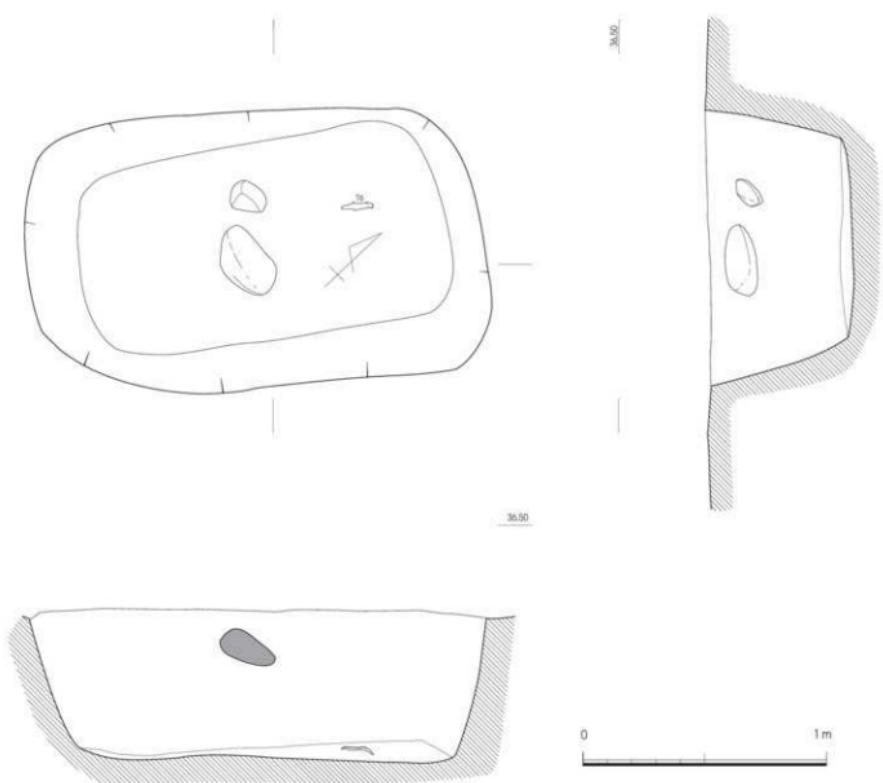
第52図 2号埋葬遺構出土遺物 (S=1/3)

5) 土壙墓

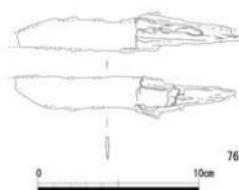
ここでは、概報において「土壙墓」とされた7基を扱う。

1号土壙墓（第53図）

1号墳の南側で確認された土壙墓である。長軸1.86m、短軸1.13mの開丸長方形を呈する。残存する深さは0.6mである。壁が二つ、検出面から10cmほどの深さで検出されている。床面北側で刀子（第54図76）が出土している。残存する長さは13.7cmである。復原長は15cmほどとなろう。両闇で、東部には木質が残る。刃部は研ぎ減りでやや内湾している。



第53図 1号土壤墓実測図 ($S = 1/20$)



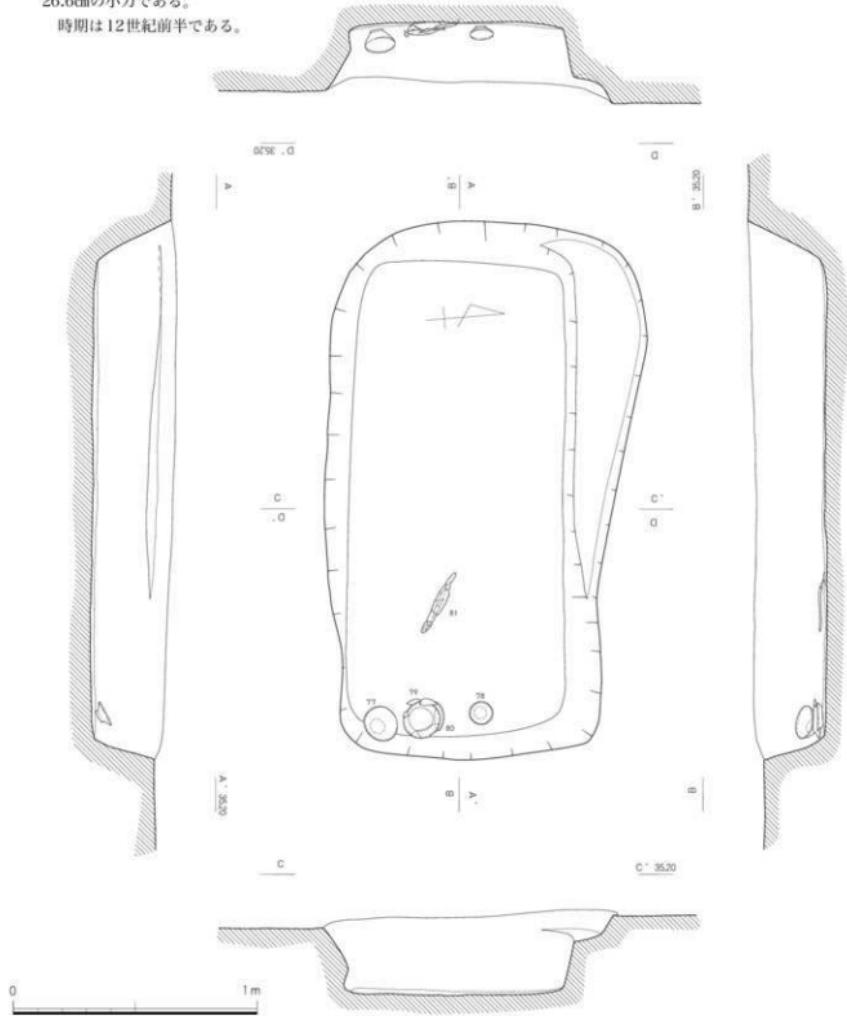
第54図 1号土壤墓出土遺物 ($S = 1/3$)

2号土壙墓（第55図）

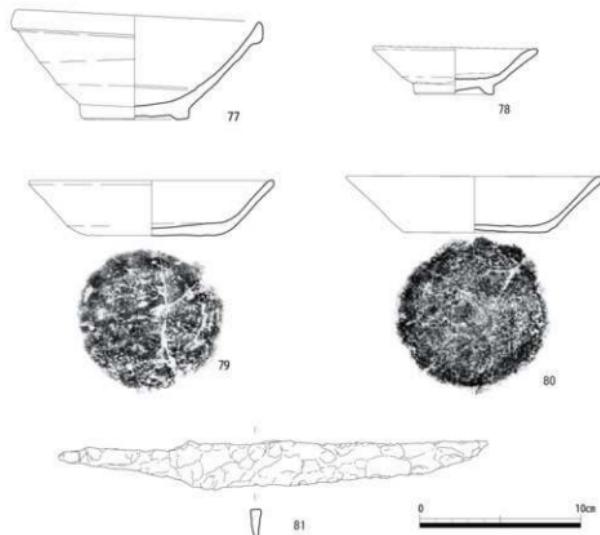
4号墳の東角部の外側で確認された土壙墓である。東西2.2m、南北1.1mの、比較的角がしっかりとした長方形を呈し、残存する深さは0.3～0.35mである。下端幅のやや広い東側床面壁際に、北から白磁皿、2枚を合わせた土器壺、白磁碗が、そしてそこから約0.3m内側（西側）に、切先を東に向けた小刀が置かれた状態で出土している。頭位は東であろう。

第56図77は口縁部が玉縁になる白磁碗、78は白磁の皿で見込み部分の袖を抜き取っている。79と80は口縁部同士を合わせた形で出土したもので、口径は15cm代である。底部はいずれも回転糸切り離しである。81は長さ26.6cmの小刀である。

時期は12世紀前半である。



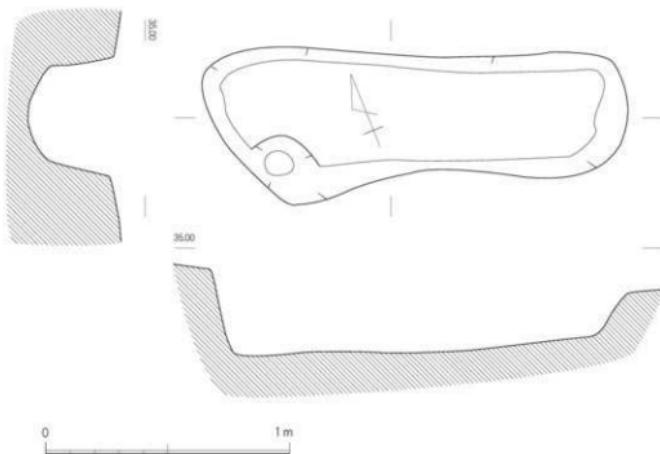
第55図 2号土壙墓実測図 (S=1/20)



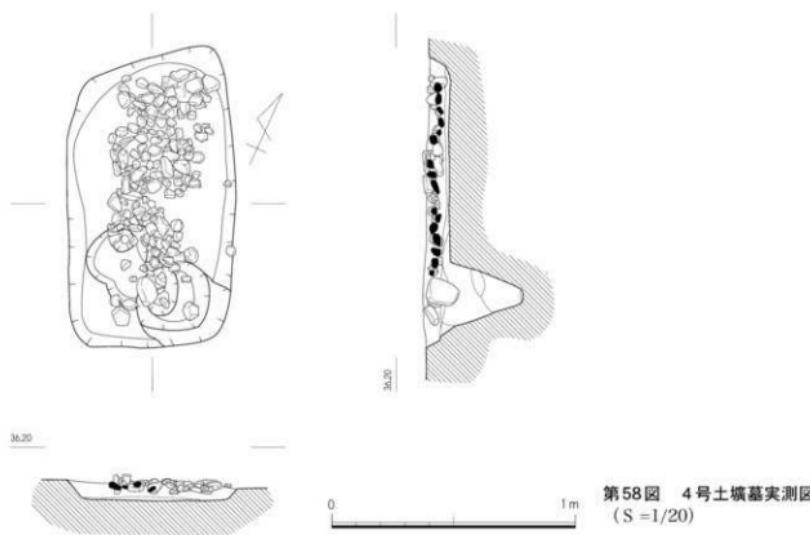
第56図 2号土壙墓出土遺物 ($S = 1/3$)

3号土壙墓（第57図）

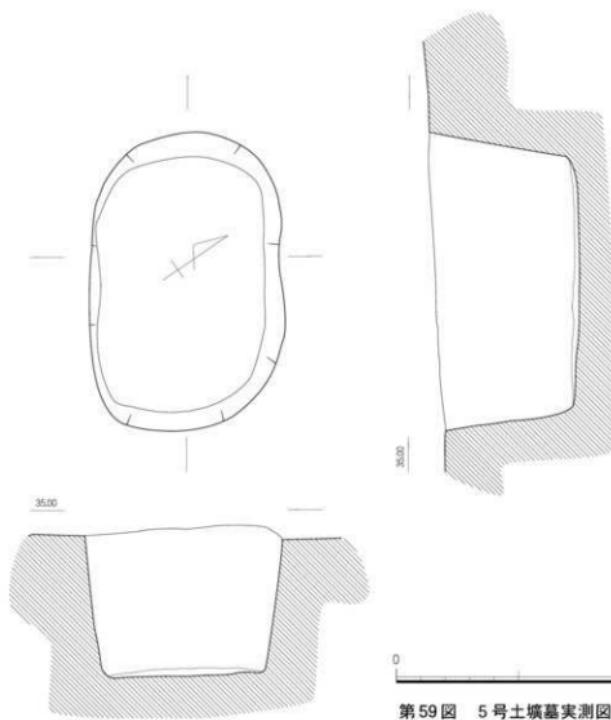
2号土壙墓のすぐ南側で検出された土壙墓である。長軸1.73m、短軸0.5m前後の長方形を呈し、残存する深さは0.15m～0.35mである。床面はわずかに船底状に窪んでいる。出土遺物はない。



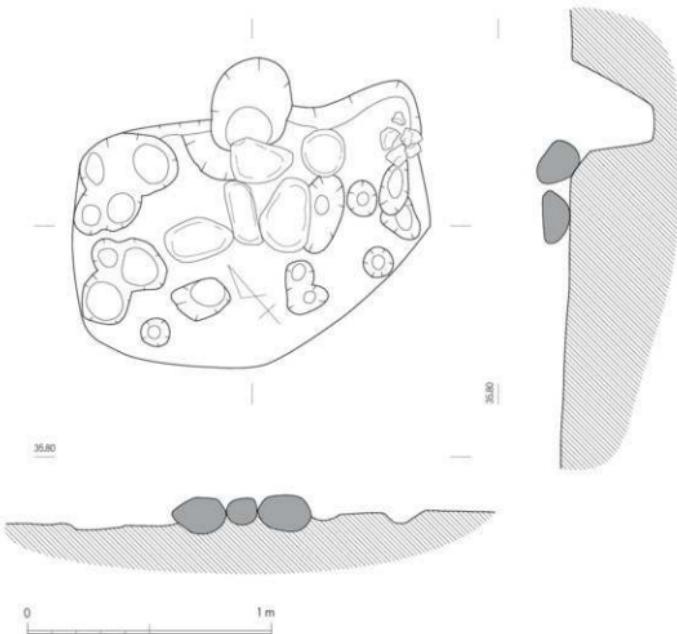
第57図 3号土壙墓実測図 ($S = 1/20$)



第58図 4号土壤墓実測図
(S=1/20)



第59図 5号土壤墓実測図 (S=1/20)



第60図 6号土壙墓実測図 ($S=1/20$)

4号土壙墓（第58図）

5号墳の西側で検出された土壙墓で、長軸1.2m、短軸0.65mの長方形を呈し、残存する深さは0.1m程度である。南側は後世のビットにより壊されていた。床面には拳大の礫が敷かれていた。遺物の出土はない。

5号土壙墓（第59図）

8号墳の北東で検出された土壙墓で、長軸1.2m、短軸0.8mの隅丸長方形を呈する。残存する深さは0.58mである。遺物の出土はなかった。

6号土壙墓（第60図）

8号墳の西側で確認された土壙墓である。長軸1.45m、短軸1.0mほどのやや不整な長方形を呈する。残存する深さは北側で数cmで、南側はほとんど掘り込みが残っていない。内部からは0.3m大の礫が置かれたような状態で出土しているが、土器などの遺物は出土しなかった。

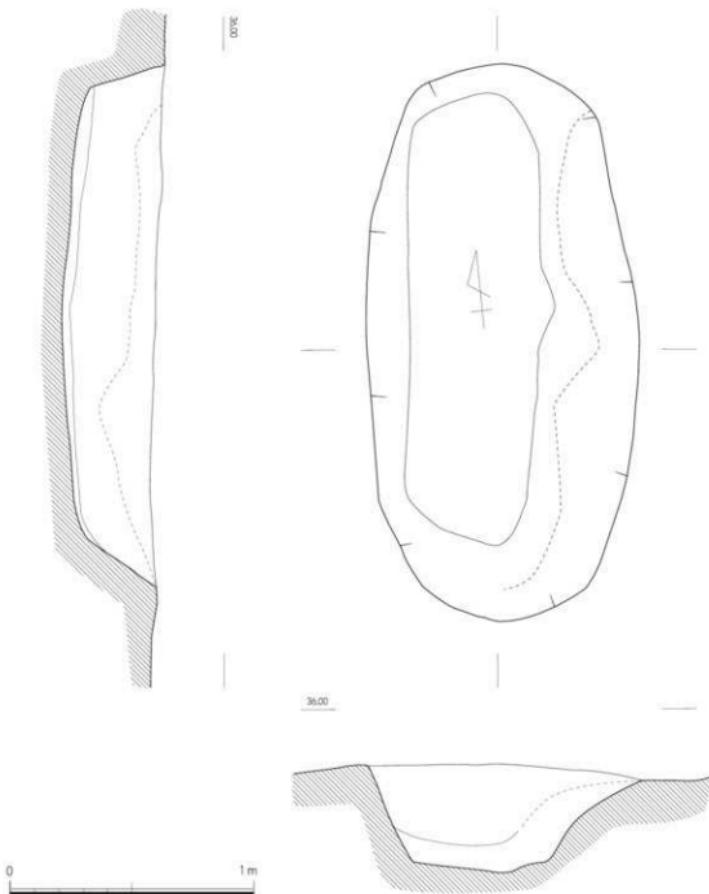
7号土壙墓（第61図）

3号墳と4号墳の間で検出された土壙墓である。長軸2.25m、短軸1.13mで、残存する深さは0.43mほどの、隅丸長方形を呈する。遺物の出土はない。

6) 溝

1号溝（旧SD-1）（第62図）

調査区の南側で確認された、略東西方向に延びる溝である。幅1.5m～1.9mで残存する深さは0.3mほどであ



第61図 7号土壤墓実測図 (S=1/20)

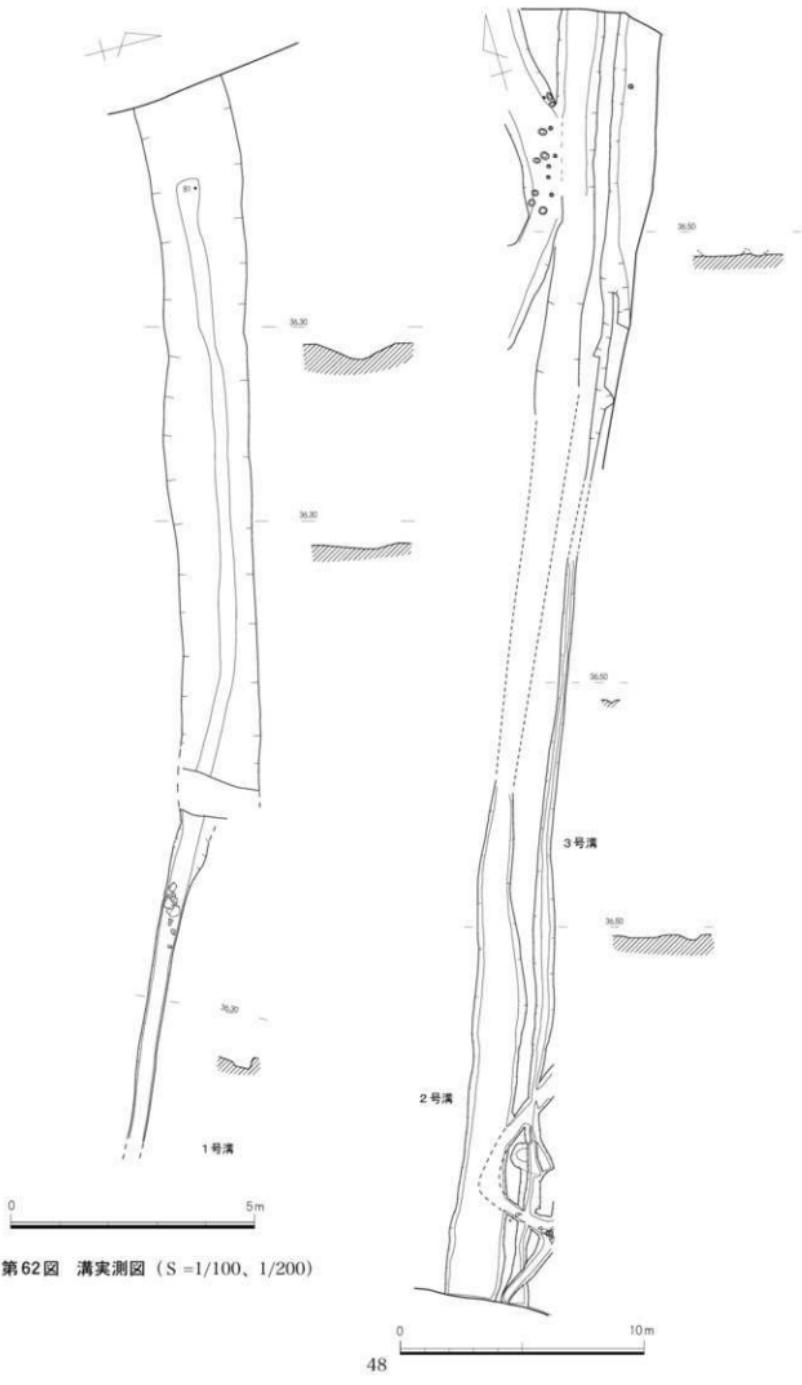
る。全体的に見ると、やや南側に湾曲している。西側は調査区外に延びるが、東側は6号墳を切っており、6号墳の周溝を優先して掘り下げたために形状が不明になっている。ただし、6号墳と重なって確認される部分は、幅0.4mほどと狭く、あるいは後述の2号溝、3号溝のように2本の溝が重なっていた可能性がある。

出土遺物は第63図82である。須恵器甕の破片であるが、溝の時期を示すものかどうかはわからない。

2号溝（第62図）

調査区の北側で確認された溝である。3号溝とほぼ並行する。幅1.4～2.3mで、残存する深さは、深いところで0.1m程度と、上部がかかなり削平されていると考えられる。ほぼ直線的に伸びる。

遺物の出土はない。



第62図 溝実測図 ($S = 1/100, 1/200$)



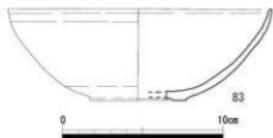
第63図 1号溝出土遺物 (S=1/3)

3号溝（第62図）

調査区の北側で確認された溝である。2号溝とほぼ並行する。2号溝より狭く、幅は0.4～0.8m、深さは残りの良いところで0.2mほどである。やや左右にぶれながらも、ほぼ直線的に伸びる。
遺物の出土はない。

7) その他の遺物

第64図83は、6号火葬墓の西側6～7m地点で検出した瓦器塊である。扁平な高台を持ち、内湾しながら聞く体部で、外面には指押さえの跡が残る。13世紀後半代の資料である。



第64図 その他の遺物 (S=1/3)

第4章 総括

第1節 相原山首遺跡の歴史的位置づけ

はじめに

相原山首遺跡の調査では、「墓」に関わる遺構が多く見つかった。それらは古墳時代中期の円墳、7世紀から8世紀の石室を主体部に持つ方形墳と主体部に骨蔵器を納めた火葬墓や単独の火葬墓、さらには中世の甕を用いた墓など、5世紀から15世紀にかけて断続的に墓所として利用されてきた（調査区に隣接する現在の墓地も入れると現代まで）。そこが、隣接してあった古い火葬場を新しく作り替える事業によって発見されたのである。この地が埋葬に関わる「場」として深い記憶に刻まれていたのであろうか。現代はさておき、古墳時代から中世の遺構は、やはり、何らかの繋がりがあったと考えた方が良いのではなかろうか。以下、そのことを探りつつ、相原山首遺跡の歴史的位置づけについて考えてみたい。

遺跡立地の背景

まず、この相原山首遺跡の立地する下毛原台地の最西端の遺跡の分布について見てみることにする。ここは、現在の「鶴市神社」を頂点として、柳迫池^(注1)に発する谷を底辺とする直角二等辺三角形形状を呈しており（第65図参照）、三角形の内部には5世紀から7世紀中頃の上ノ原横穴墓群、坂手限・坂手前横穴墓群などの横穴墓群、4世紀から7世紀前半（大部分が未発掘のため時期は推定も含む）にかけて造営された鶴市神社裏山古墳や幣旗郭古墳、上入塚古墳、相原古墳群（横穴式石室墳）などの高塚古墳、そして8世紀後半の火葬墓が確認された坂手限城跡や勘助野地遺跡がある。つまり、この地（以下、相原地区とする）は山国川右岸下流域にあって、古墳時代から奈良時代にかけて突出して墓地遺跡の集中する特異な地であることがわかる。さらにはその多くは崖に面する、つまり沖積地を眼下に望む場所にある。その中にあって、相原山首遺跡は直接崖に面することなく（崖からは約100m内側に入る）緩やかな丘陵上に位置している。

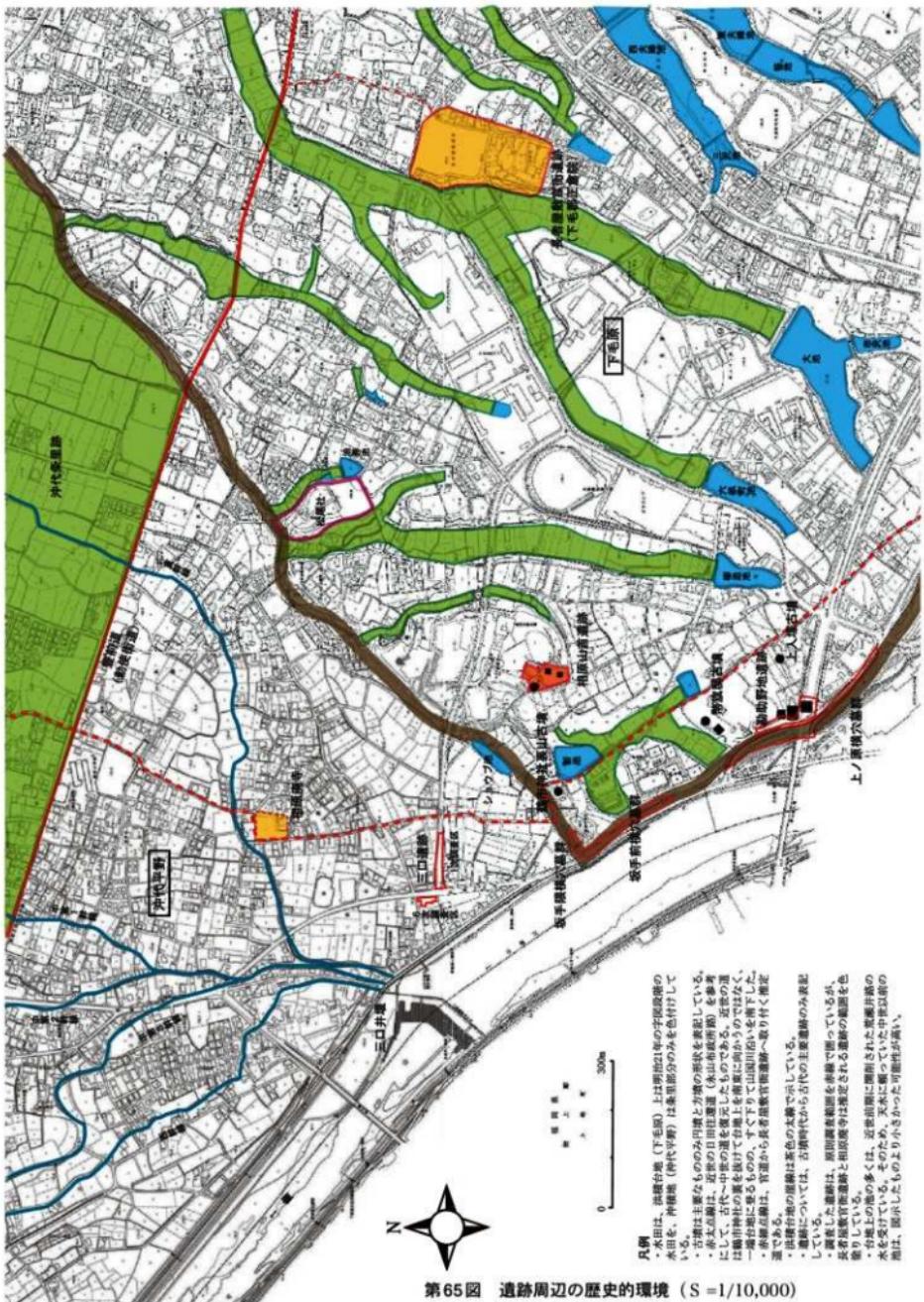
そして、台地から眼下に見下ろす沖代平野南端部の状況を見ると、大井手の水路が通る旧河道と、台地際を通る旧河道に挟まれた、後畠、廣畠、古城畠などの「畠」地名（小字）が残る微高地上に6世紀後半の豪族居館（三口遺跡 6次調査区：中津市教委2022）や9世紀代の官衙的建物群（三口遺跡 1次調査区：未報告）、そして微高地の北端に位置する相原庵寺などがある。さらには、山国川に近い場所（高潮）には下毛駅の存在も推測されている。ここが古墳時代後期から奈良、平安時代にかけて、継続して政治的にも重要な場所であったことがわかる。

方形墳の造営時期

5世紀代の円墳である1号墳を除く7基の方形墳の築造時期を、出土須恵器から探ってみたい。出土遺物でほぼ原位置を保って出土したものは、6号墳の37から42で、蓋と高台付环が3個体ずつ出土している。これらは墓前に近い周溝内の床面からやや浮いた位置で出土していることと、天地が逆転した状態で出土していることを考えると、追葬などに伴って片付けられたものか、追葬時あるいは墓前祭祀に使用されたものが捨てられたものかと推測される。しかしながら、高台付环の形状、すなわち長く伸びる高台を持つ环は小林氏のIV期（小林2016）、TK46段階（田辺1981）までであり、蓋の口縁端部の示す小林氏のV期とは齟齬がある。そこで可能性として考えられることは、①高台の高い高台付环がV期、すなわち8世紀前半まで存続した、②蓋と身は別時に別々にもたらされた、という考え方である。この蓋と身の組み合わせは4号墳でも認められるので、①の蓋然性が高いように思える。

さらに細かく詰めていけば、この4号墳と6号墳出土の高台付环と蓋を比較すると、蓋の口縁端部の屈曲が強く短いもの（4号墳）と緩く屈曲し長く伸びるもの（6号墳）という違いがある。さらに环を見ると、高台端部が外側に強く屈曲するもの（4号墳）と、端部が面をなし、内側に傾斜するもの（6号墳）という明確な違いがある。後者については、高台の低い环でも同様の傾向を示す。7世紀後半（TK46段階）に位置付けられる憩屋2号窓跡（中津市大字伊藤田、相原山首遺跡の東南東約5km）出土の高台付环の脚部端部は、高台脚部の端部形状と同じく小さく外側に張り出す（大分県埋文セ2010a）。そのことからも、外に折れる4号墳出土資料が古いことがわかり、4号墳出土資料→6号墳出土資料とすることができる。

この4号墳と6号墳の出土遺物は、蓋の扁平な宝珠つまみ、かえりの無い口縁部などから、至近の窓跡で比較できるのは8世紀前半（MT21段階）に位置付けられているコング窓跡（中津市大字伊藤田、相原山首遺跡の東南東



第65図 遺跡周辺の歴史的環境 (S = 1/10,000)

約5km)である(大分県埋文セ2010a)。しかし、坪蓋の口縁部形状が異なり、さらにコンゲ窓跡では高い高台を持つ坪が含まれない。コンゲ窓跡出土の坪蓋にはかなり扁平なものも含み、口縁端部にも屈曲を持たずに緩やかに丸まるものも含むなど、4号墳や6号墳出土遺物に比して、明らかに後出の要素が認められる。よって、4号墳や6号墳の高台付坪および蓋は、穂屋2号墳とコンゲ窓跡の間に位置付けられる資料とすることができるだろう。これらは7世紀末から8世紀前半という年代を与えておきたい。

一方、4号墳からは7世紀前半以前に位置づけが可能な29、30の甕が出土している。出土状況を見ると、原位置ではないものの、26や27の高台付坪とほぼ同一地点同一レベルで出土している。そうすれば、突出して古い可能性のある甕の時期をもって方形埴築造の時期とするには若干躊躇する。しかしながら、6号墳からも小林氏が7世紀前半に位置付ける平瓶が出土していることを勘案すると、4号墳、6号墳が7世紀の前半代に埴築された可能性はある。

ただ、相原山首遺跡出土須恵器を小破片まで見てても、坪蓋の口縁部にかえりを持つものは1点もない。このことを積極的に評価すると、埴築時期を7世紀末から8世紀前半に下らせることがある。その場合は、古い形態の須恵器が個々残っていたことになるが、その須恵器が坪や高坪などの「盛る」器種ではなく、平瓶や甕といった液体(酒)を入れる容器であることからかの意味がある可能性もある。

次に埴築の順序について考え、埴築時期を押さえておきたい。村上氏は、方形墳の規模や配置から、8基の方形墳の中で7世紀中頃から後半に4号墳と6号墳がまず作られ、続けて7世紀後半から8世紀前半後に5号墳と8号墳が、そして8世紀前半から中頃前後に7号墳が造られた、としている(村上2021)。調査区の北側には150mほどなだらかな地形が続くので、2号墳の北側に方形埴築が展開する可能性はあるものの、得られた資料からすれば、最も大きな4号墳が最初に作られた、と見るのは妥当性が高い。その時期は、6号墳も合わせて前述のように今回の検討では7世紀前半か、あるいは7世紀末から8世紀前半かという二つの時期が可能性として考えられる。しかしながら、遺構配置から4号墳や6号墳に後出と推測される8号墳から出土した7世紀後半の高坪の存在は、前者であれば矛盾しないことになる。その場合は、4号墳や6号墳で出土した7世紀末から8世紀前半代の資料は追弃、あるいは墓前祭祀などに伴う遺物ということになる。

このように、方形埴築群の埴築開始を7世紀前半あるいは中頃とすると、村上氏のいうように火葬墓を主体部に持つ3号墳が8世紀中頃に埴築されるまで100年以上にわたって雑続的に方形埴築が造られたのかどうかが次に問題となる。村上氏が後出とする5号、7号、8号墳は、8号墳の高坪を除いては良好な遺物が出土していないので、方形埴築の埴築を8世紀中頃まで下らせる根拠はない。火葬墓を主体部とする3号墳に引きずられたということであろう。もしろ、4号墳や6号墳、8号墳の埴築が7世紀代に収まるのであれば、5号墳や7号墳の埴築もあり差がないと考えた方が良いように思われる。8世紀前半代は、あくまでも追葬や墓前祭祀のみが継続されたというように解釈しておきたい^(注2)。そう考えれば、3号墳の埴丘部分の形状が隅丸方形で、5号墳を除く他の方形埴築とは形状が異なることが時期差であるということになるだろう。

ところで、この相原山首遺跡の南に展開する上ノ原平原遺跡(大分県教委2000)、上ノ原稻荷塚古墳(大分県教委2002)、原口遺跡(中津市教委2023)において、方形に溝が廻る遺構が各1基確認され、上ノ原稻荷塚古墳では破壊された石室が残されていた。そして、上ノ原稻荷塚古墳と上ノ原平原遺跡からは8世紀代の須恵器が出土しているのである。これらをどのように評価すべきなのか。相原山首遺跡の方形埴築との関係も含めて、今後この地域の墳墓の系譜を考える際に重要なポイントとなるであろう。

石室の構造

石室の構造は、残念ながらほとんどの石室で前庭部が破壊され、石を取り去られたものもあるなど、明確にはしない。その中でも4号墳と8号墳は幅50cm、高さ60cmほどの腰石を持ち、石室平面が入口側の幅がやや広い長方形を呈するという共通点を有する。5号墳は腰石に大型の石を使わずに幅20cm、高さ10cm程度の礎で側壁を構築する。つまり、定留鬼塚遺跡の石室墳と同様、明確な腰石を持つものと持たないものが共存する。袖の有無、あるいは片袖か両袖かについては明確にしない。

なお、現場では天井石に相当する大きな石は全く出土していない。このことは、類似の小型石室を持つ定留鬼塚古墳でも同様である。石室の側石を持ち送っていたとは考え難いので、天井部には木で蓋をしていたのではないかと考えられる^(注3)。そうであれば、木質が腐って封土が石室内部に流入し、同時に側石の崩壊を招く、というシナリオが描ける。封土が低かった可能性と合わせ、このことが、この種埴築の発見を難しくする要因とも言えるであろう。

火葬墓立地の歴史的条件

次に、相原山首遺跡の火葬墓について考える前に、山田川下流右岸の火葬墓造営の背景について、従来の見解をまとめると次のように整理できる。

- ①亀田修一氏は、畿内との関わり以外にも、朝鮮半島から渡來した人々による造営を考えた。(亀田2006)
- ②小田裕樹氏は、火葬墓受容で先行する宇佐郡の僧侶を介して火葬を受容し、遺物面では畿内との繋がりも窺える、とした。さらに、相原山首遺跡1号火葬墓は、先行する「方墳の伝統の中で、新来の葬法が受容され、火葬墓が造営されたものと考えられる」とした。(小田2019)
- ③村上久和氏は、正倉院文書大宝2年豊前国戸籍の「上三毛郡塔里」には「秦部」や「勝」の姓を持つ人々が多く見られるが、その周辺部に位置付けられる山田川下流域においては、「在来の人」が8世紀に至る過程で「秦部」や「～勝」として編成され火葬を受容していった、と考えた。(村上2019)

この地域の古代火葬墓を考える際には、古代寺院はもちろん、官道を含む古道、条里、須恵器や鉄の生産、終末期古墳、官衙(正倉も含む)などを考慮して考える必要がある。さらには、古代における葬送や墓地選地の思想的背景が重なる。後者については、考古資料のみでは語ることができないので、ここでは触れない。

官道(豊前道、あるいは勤使街道)は、沖代条里や野依条里的南限を規定する。さらに、直線的に東に伸ばせば宇佐宮の現西参道に重なり、そのまま呉橋を渡って弥勒寺の主要伽藍の北側に至る。このことは、豊前道の施工と宇佐宮創設の共時性、さらには条里施工との強い関係性も表している。宇佐宮の正史への登場は天平9年(737)で、新羅の無礼を伊勢宮や香椎宮などとともに宇佐宮に告げた(『続日本紀』)ものである。また、西参道に規制されて伽藍を配置した神宮寺である弥勒寺は、現在地での建立はやはり天平9年とされる(『宇佐八幡宮弥勒寺建立縁起』)。出土遺物からも齟齬はない。このように、8世紀の前半には国家にとって宇佐宮という存在が必要となつたことが窺える。

一方、官道に隣接する伊藤田田中遺跡(大分県埋文セ2010b)の製鉄炉(横置きの箱型が1基)から出土した炭の放射性炭素測定によると、7世紀終わりころという結果が出ており、同時期の創建と考えられる相原庵寺などとともに、官道の敷設、条里水田の整備、そして宇佐宮の(現在地での)建立といった一連の動きが7世紀終わりから8世紀前半にかけてこの地域で一気に進行したことが窺える。そこに渡来系の人々が大きく関わっていたことも、松尾社と条里の関係(後述)などから可能性は高いと考えられる。

ところで、古代寺院である相原庵寺は7世紀末頃の創建が考えられているが、豊前道から南に約400m入った所には、ほぼ南北方向の中軸線で伽藍が配置されていると想定できる。さらに、約400m引き込まれ、相原庵寺跡を西に回り込んだ後、南に向かう道は江戸期のいわゆる永山布政所路(日田往還)であり、この道も古代まで遡る可能性がある。そして、この道に接して、三口遺跡1次調査で確認された9世紀代の官衙的な遺構が展開しているのである。さらに、この道が下毛原台地に突き当たったのち、彫刻り状の道で台地上に上がり、ほぼ直線的に南東方向に延びる。この道の山田川側(西側)は崖までの幅が100~150mで、約1km延びて細くなって終わる。前記したこの細長い1km部分に4世紀代から7世紀にかけて古墳や横穴墓、8世紀の火葬墓が集中的に造られる。反対に、道の東側は今のところ相原山首遺跡の古墳や火葬墓が知られるのみである。しかし、広い目で見ると、この地は、古墳時代前期から奈良時代にかけて一大葬地であったことになる。

一方、この相原から犬丸川を挟んで、東北東に約3km離れた場所にある森山地区にも火葬墓の集中箇所がある(大分県教委1995)。相原地区に比べ、周辺の考古情報が少ないので、この地の位置づけについて確定的なことは言えないが、幾つかの周辺情報を示せば次のようなになる。一つは、加来の犬丸川沖積地を見下ろす丘陵上であるということ、さらに、犬丸川を挟んだ対岸には条里区画が遺存すること、そして丘陵裾部には古墳時代後期の横穴墓群があること、などである。一方で、豊前道とは直接関係せず、古代に遡る可能性のある古道も推測できない。ただし、森山の丘陵の南側には相原地区から延びる古道が通じていた可能性はある。また、森山地区では古代に遡る寺院も知られていない。

このように、相原地区と森山地区とでは歴史的条件が似ているということは現状では必ずしも言えないが、相原地区の火葬墓が相原庵寺との関係があるのであれば、森山地区にも至近に古代寺院があった可能性も考慮する必要がある(図4)。一方で、火葬墓が亀田氏の言うように渡来系の人との関係を考えるならば、必ずしも古代寺院がある必要はなくなる。しかしながら、どうしてこの場所なのかという説明は、やや難しくなる。

相原山首遺跡の火葬墓造営主体

村上久和氏は、「豊前における古代火葬墓の動向」（村上2021）の中で、相原山首遺跡の墳墓の時期的な変遷に加えて、検出された8基の古墳を三支群にわけることにより、その背後にある支群を形成した「イエ」（村上氏は「イエ」とは書いていないが、上ノ原横穴墓群の分析による親族構造を意識していると思われる）、ここでは系譜を辿れる「イエ」としておく。）にも言及する意欲的な考察を行っている。しかしながら、概報しか刊行されていない中での考察であったため、多分に理念先行的なところも見受けられる（註5）ものの、方形墳から火葬墓への転換を、「イエ」が支えた「小支群が解体し、律令制下の文官、武官などの特定人物が仏教に帰依した」ことがその背景にある、と示唆した点は、山国川に面する地点ではなく、より官衙に近いところに營まれた相原山首遺跡の立地から考えて、妥当性があるようにも見える。とはいって、石室を主体部とする方形墳の造営者と、火葬墓造営者が系譜的にまったく異なるとは考えにくいので、前者に連なる一族の中から官人となる人物が出たと解釈した方が適当であろう。実際に、他の遺跡では火葬墓が比較的狭い範囲に集中していることが多いのに対し、相原山首遺跡では、相互に20～40m近い距離を保ちながら埋葬されているのは、前代の「小支群」を意識していることの証ではなかろうか。

7世紀中頃までに4号墳や6号墳が造られ、その後2号墳以下の方形墳が築造されるのであれば、「評衛」に関係する一族の奥津城としてこの地が選ばれ、8世紀中頃になって仏教思想を背景として火葬が採用された、というようにも解釈できるであろう。

ところで、2号墳、4号墳、8号墳の石室からは古代瓦が出土している。8号墳では近世の磁器も石室内から出土しているが、古代瓦がわざわざ近世に持ち込まれたとは考え難い（註6）。何らかの意図を持って、8世紀代に石室内に置かれたと考えられる。この古代瓦は、相原庵寺のものである可能性が高く、被葬者と相原庵寺との関係も強く示唆される。そうすると、ここに方形墳を営んだ人物が、相原庵寺との強い関係を有していたと解釈できるならば、官人層と古代寺院との関係性の発現の一つと理解できる。

一方、至近の火葬墓で、前代との連続性を持たない坂手隈城跡火葬墓や勘助野地遺跡火葬墓は、8世紀の中ごろ新たに官人層に加わった人物か、あるいは相原庵寺の僧侶を想定しておきたい。

墳墓の地として継続した理由

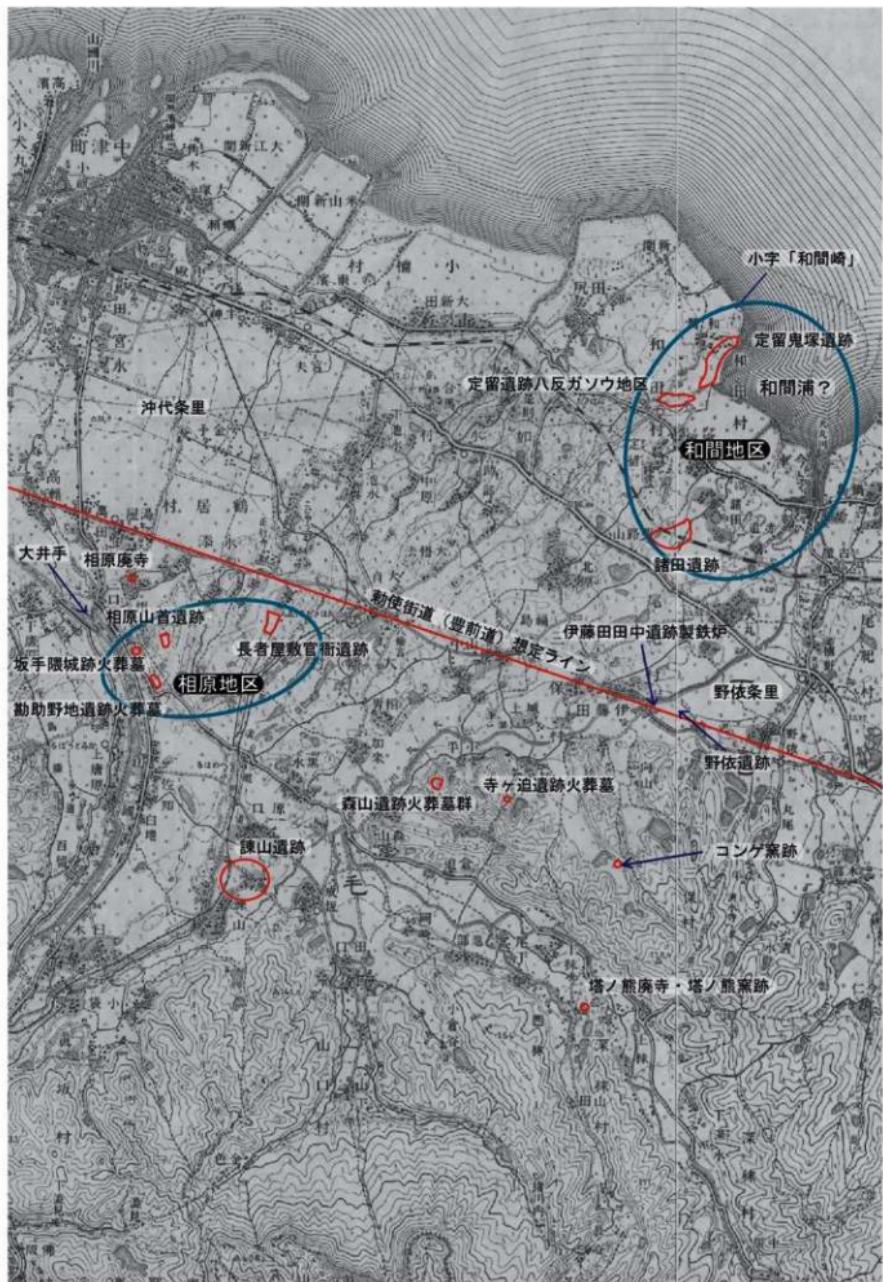
それでは、先に述べた、約1kmにわたって細長く伸びる、山国川に面した土地はどうして古墳時代から奈良時代にかけて墳墓の地として引き継ぎ使われ続けたのかについて考えてみたい。

この地の最北端部を「坂手隈」と言う。「隈」という地名そのものが境界であることを物語るように、古来「境界」の地として認識されていたのである。ここは、下毛原台地が直接山国川の流れに接しているため、沖代平野がこれより南に広がらず、一端途切れため、沖代平野の最南端の地であること、そして、筑後方面に向かうには（現在は丘陵を削って台地と川の間に道が通るが）、台地に登るためには急坂を登らなくてはならないこと、といった要素が境界性を際立たせる。中世には、南北朝期の觀応2年（1351）に株・深水の囚徒が下毛郡に打ち出で、高潮（坂手隈から2kmほど下流側）以下を焼き払ったので、在地土豪の成恒氏は「酒手隈」に向かい、敵を追い散らし、城を破壊した。さらに戦国期には、沖代平野を望む、まさに堀で三角形に切り取った台地先端部に「坂手隈城」が作られており、ここが、沖代平野から見たときに外界との接点であったことは中世を通して意識されていたと考えられる。（註7）さらに、地名の「坂手」が呪術にかかわる「逆手」を意味しているのであれば、この境界の地が何らかの呪術に関わる地でもあったことになる。

このように、この地は一般的な居住区などにはなりえない、特殊な地としての意識が古代から中世にかけて存続したと考えられる。あるいは、近世までそのような意識が続いているのかもしれない。

相原山首遺跡と官衙の関係

相原山首遺跡がそのエリアを越えて東側にあることは、さらにその東にある長者屋敷官衙遺跡（都御正倉）の近くにあると推測される郡衙や、位置未確認ではあるが、その前身としての評衛の存在を意識したものであった可能性が高い。最初に記した、柳迫池に発する谷によって区切られた三角形のエリアは、まだ発掘調査によって十分な情報が得られていないが、沖代平野の条里開発に大きくかかわる可能性がある。柳迫池や油善池に発する谷水を利用した初期の条里水田の存在が推測されているからである。相原山首遺跡に葬られた人々は、そのような開発にも関わった可能性があるだろう。それらが渡来系の人たちであったのかどうかについては、考古学的資料はないが、柳迫池や油善池に発する谷に挟まれた、沖代平野を望む丘陵先端部に「松尾社」が鎮座するのは示唆的である。松



第66図 8世紀代の主な遺跡

尾社は渡来系の泰氏が信奉する、平安京の西の鎮護を担う神社であり、正食院文書断簡の「大宝二年豊前国上三毛郡戸籍」に見られる「泰部」姓の多さ（西別府1989）は、（直接的に相原地区の戸籍があるわけではないが）泰氏がこの地に松尾社を勧請した可能性を示唆するのである（注8）。相原廃寺の瓦が百济系瓦のみで構成されていることも、渡来の人々が造寺に関わった可能性が高いことを示していよう。

6世紀後半の豪族居館（三口遺跡6次調査区）は直接的な起源とはならないまでも、この地の優位性を背景として、渡来人たちが関与して7世紀末には寺院（相原廃寺）を建立し、その前後の時期には台地上に方形の低埴丘墓が築かれ、8世紀の後半には火葬を選択する。この間に豊前道（勅使街道）等の整備や、古墳時代に引き続く須恵器生産（伊藤田窯跡群）、鉄生産（伊藤田田中遺跡）、そして豊前道を南限とする条里（沖代条里や野依条里）の施工がなされたのであろう。

二つの核となる地域

ここで沖代平野から下毛原台地の範囲で、相原地区と同様に横穴式石室を持つ方形墳や火葬墓が確認されている和間地区的様相を一瞥し、相原地区との比較をおこなっておきたい（第66図参照）。和間地区は、相原地区から東北東に約6kmの天貝川や犬丸川の河口部に位置している。

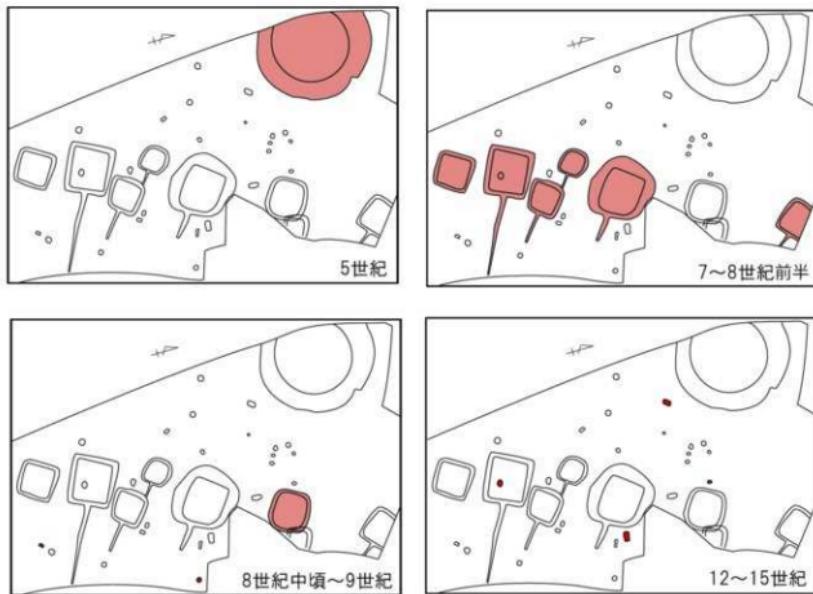
犬丸川河口部に近い崖際（下毛原の北東部）にある定留鬼塚遺跡（大分県埋文セ2015）では、6世紀後半から7世紀代（注9）の20基の小石室墳が確認されており、長大な墓道や人頭大の河原石を積み上げる小石室の形状、さらに周溝が残る7基の内3基が方形墳であることなど、相原山首遺跡の方形墳と類似する要素が多い。

また、周辺でも古墳時代後期から奈良時代の遺跡が点在している。定留鬼塚遺跡の0.5kmほど南西にある定留遺跡八反ガソウ地区（中津市教委2006）では、8世紀代の掘立柱建物群と竪穴建物、蛸壺焼成坑、火葬墓の可能性のある遺構（注10）、時期不明の横穴式石室墳1基などが見つかっている。さらに、この八反ガソウ地区から天貝川という小河川を隔てて東側の台地上には定留遺跡赤松地区（中津市教委2018）がある。ここでは綠釉陶器や灰釉陶器を伴う8世紀から9世紀の集落跡が確認されている。掘立柱建物には50m前後の大型のものも含まれるなど、八反ガソウ地区よりも上位に位置付けられる。高崎章子は「赤松地区は首長達の居住空間であり、その対岸の八反ガソウ地区の台地の落ち際に赤松地区を望む形で首長の横穴式石室がつくられ、その周囲には赤松地区より下の階層の人々の居住空間がある」とし、この定留地区での「古代集落」の姿を描いた（中津市教委2006）。

また、犬丸川河口部にほど近い諸田遺跡古池地区では8世紀代の38棟に及ぶ掘立柱建物群が確認されているが、官衙的要素はないものの、片庇建物や竪柱建物があり、さらに同一場所で2～3回の建て替えを行っているなど、通常の集落ではない様相が窺える。

村上氏は定留遺跡八反ガソウ地区が、『萬葉集』巻第15に描かれる、「佐婆の海中」から遣新羅使が漂流しながらも順風を得て着いた「豊前の国下毛の郡の分間の浦」にあった集落の一部ではないかとする（村上2021）。大字定留の最も海に突き出たところに小字「和間浦」という地名が残り、地域名称とあってこの地域を「和間」と呼ぶことから、和間浦=分間浦であろうとされている。もう少し広く考えると、この八反ガソウ地区を含む和間地区一帯が、「浦」（注11）を含む一つの共同体として機能していたと考えた方が良いのではないか。その紐帶の一つが蛸壺に象徴される漁業であり、交易にも関わる津の機能だったのではないか（中津市教委2018b）。遣新羅使は、難破して「分間の浦」に流れ着いたのではなく、「順風」を得て着いたということは、そこに港湾があり、一定の集落があったことを前提として「分間の浦」に着いた、と考えられる。

海に面していたことから定留遺跡では蛸壺焼成坑があるが（定留鬼塚遺跡では6世紀後半の古墳石室から蛸壺が出土している。大分県埋文セ2015）、それを除くと相原山首遺跡や長者屋敷官衙遺跡を含む永添地区の遺構の在り方、すなわち横穴式石室を有する方形墳があり、大型の掘立柱建物群があり、そして火葬墓があるという在り方は非常によく似ている（注12）。そうすると、沖代平野や下毛原、さらには犬丸川流域という7km四方ほどのエリア、つまり古代の野仲郷、大家郷、麻生郷、小楠郷に比定されるエリアでは、海に面した和間地区と、下毛原台地縁辺部にある相原地区という大きく二つの核が形成されていたことが窺える。ただし、掘立柱建物群の柱穴規模や規格のある配置などの点は全く異なり、郡衙に関わる遺跡のある相原地区に比べて、和間地区的集団は下位に位置付けられるだろう。この二つの地域が、「郡の中心」と「郷の中心」といった違いを表していた可能性を考えておきたい。そして、この二つの核の形成が6世紀代まで遡る可能性があることも重要である。これらの地域が、少なくとも古墳時代後期には須恵器生産などを紐帶とする政治的な結びつきを強めていたとすることができるのではないか。（注13）



第67図 造構変遷図

おわりに

あらためて、発掘調査によって確認された遺構の変遷とその意義について整理しておきたい。まず、5世紀代の張り出し部を有する円墳が造られる（主体部は削平により不明）。次いで7世紀代に横穴式石室を持つ方形墳が6基造られ、8世紀前半にかけて追葬、あるいは墓前祭祀が続く。次いで周溝を巡らせる火葬墓が8世紀中ごろに築かれる。その後9世紀前半にかけて火葬墓が3基作られ、「現地火葬墓」あるいは「荼毘跡」と考えられる土坑も前後して作られたと考えられるが、時期を示す遺物がない。この段階の相原山首遺跡を含む相原地区周辺は、官衙の存在ばかりではなく、諸生産や移動手段としての道の起点が集中するなど、社会、経済的にも中核的位置にあったといえるであろう。その中で、下毛郡内ばかりではなく、豊前国全体の中でも火葬墓の特異な集中地域が形成されたと考えられる。その背後には、「坂手限」と呼ばれる特殊な「場」という意識があったと考えられる。

その後は、中世に壇を埋納する遺構が2基作られるが、その内1基が6号墳の石室を壊しているので、この段階ではすでに方形墳の封土は失われていたことが想定できる。この14～15世紀は、下毛原台地上において、多くの中規模な在地領主がムラを基盤として成長を遂げつつあった時期であり、埋葬遺構が墓であれば、彼らの墓地であった可能性もある。

また、13世紀を前後する時期の遺物も散見できる。この13世紀前後という時期は、下毛原台地から見下ろす冲代平野でも、一つの画期となる時期である。沖代平野の多くの調査地点で13世紀代の遺物が出土しており、そのことは、保元元年（1135）に構築されたといわれる「大井手」の開削に端を発するものと解釈できる。沖積平野の開発の動きが、何らかの形で下毛原にも及んでいたのか、あるいは古代以来継続して境界としての特殊な「場」という意識が継続していたのか、どちらかであろうが、14～15世紀の埋葬遺構の存在を考えると、後者であった可能性が高いと考える。

その後は、調査区内で遺構は形成されていないが、江戸時代には隣接地に大きな墓地が形成され、現代に至っている。

なお、本節の執筆にあたり、村上久和氏、小林明彦氏には有益なご助言を頂き、また浦井直幸、丸山利枝の両同僚にも多大なご示唆を頂いたことを明記しておく。

註

- 1 この池は、沖代条里的東端部に水を供給するが、その築造が奈良時代に遡る可能性が指摘されている。(大分県立歴史博物館2021)
- 2 佐賀県の金立開拓遺跡ST39やST002などでも8世紀前半までの追葬が見られる。(佐賀県1984)
- 3 この点については村上久和氏よりご指摘をいただいた。
- 4 豊前地域では、古代寺院と火葬墓の分布は対応していない、という指摘がある。(小田2019)
- 5 本文中の骨蔵器の時期と、編年表の骨蔵器の位置づけが異なっていることなど。
- 6 相原庵寺からかなり離れた中世から近世の遺跡でも、相原庵寺の瓦が出土する場合がある。これらは沖積地の整地に伴い、相原庵寺近辺の土砂を利⽤したためと考えられている。
- 7 現在丘陵先端部には「八幡市神社」が建つ。この神社は平安時代後期の保延元年(1135)、山国川に大舟手を架けて沖代平野の水田化を進めようとした時、人柱として腹に埋められた小鶴と市太郎の親子の靈を慰めるために八幡社に祭ったという説を持ち、人口に膾炙している。しかし、明治以前は「八幡市神社」と呼ばれており、「市」が人名ではなく、市場の「市」ではなかったのかという疑問も湧く。この地が境界性を帯びていることを考慮すると、市が開かれる場所であったと考えた方が自然ではないだろうか。
- 8 下毛都第二の大きさの野依条里を東側から見下ろす台地縁辺部にも松尾社がある。この松尾社は北側が豊前道に接している。
- 9 遺物が出土するものは少なく、出土しているのはいずれも6世紀後半が主体であるが、より新しいと考えられる小規模な石室などは7世紀まで下ると考えられる。
- 10 この「火葬墓」について、村上氏は火葬骨が出土していないことや容器が短頸壺ではないことをもって、「地鎮跡の遺構と遺物」とされているが、火葬墓の可能性がまったくないわけではないと考える。
- 11 現在、埋め立てられてダイハツ中津工場になっている場所が「和間浦」と呼ばれていた可能性がある。
- 12 和間地区では、6世紀後半にはいわゆる「オンドル状遺構」を持つ竪穴建物が存在するなど、渡来系の人々の居住も想定されている(中津市教育委員会2018a)
- 13 諸田遺跡古跡地区では、6世紀中頃の竪穴建物から特注品と考えられる直径20cmの环身が出土している。これも、須恵器生産地との直接的な関係を窺わせる。

参考文献

- 小田祐樹 2019 「古代火葬墓造営の一様相—豊前地域を対象にー」『論集 葬送・墓・石塔』筑川真一さん還暦記念会
- 小嶋 篤 2009 「鉄滓出土古墳の研究」『古文化談叢』第61集 九州古文化研究会
- 小林明彦 2016 「大分県の古代須恵器について」『考古学の諸相 4』坂詔秀一先生卒寿記念会
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 西別府元日 1989 「大宝二年豊前國戸籍とその歴史的背景」『山国川・自然・社会・教育』大分大学教育学部
- 村上久和 2021 「豊前における古代火葬墓の動向」『古文化談叢』第86集 九州古文化研究会
- 中津市教育委員会 1993 「永源寺跡 中津城 ブヤ池窓跡」中津市文化財調査報告第13集
- 中津市教育委員会 2000 「定留跡八反ガゾウ地区発掘調査報告書」中津市文化財調査報告第38集
- 中津市教育委員会 2011 「坂手限城跡」中津市文化財調査報告第52集
- 中津市教育委員会 2016 「諸田遺跡・諸田南遺跡発掘調査報告書(遺物編)」中津市文化財調査報告第76集
- 中津市教育委員会 2018a 「諸田遺跡・諸田南遺跡発掘調査報告書(遺構編)」中津市文化財調査報告第88集
- 中津市教育委員会 2018b 「定留跡赤松地区発掘調査報告書」中津市文化財調査報告第89集
- 中津市教育委員会 2022 「三口遺跡6次調査」中津市文化財調査報告第109集
- 中津市教育委員会 2023 「原口遺跡」中津市文化財調査報告第114集
- 三光村教育委員会 1994 「森山遺跡」
- 大分県教育委員会 1988 「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」
- 大分県教育委員会 1988 「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」
- 大分県教育委員会 1995 「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(6)」
- 大分県教育委員会 2000 「上ノ原平原遺跡」
- 大分県教育委員会 2002 「清次郎原遺跡 上ノ原福荷塚古墳」
- 大分県教育厅埋蔵文化財センター 2010a 「伊藤田窯跡群発掘調査報告書<コンゲ窯跡・他1号窯跡・他2号窯跡>」
- 大分県教育厅埋蔵文化財センター 2010b 「伊藤田田中遺跡 屋敷田遺跡」
- 大分県教育厅埋蔵文化財センター 2015 「定留鬼塚遺跡」
- 大分県立歴史博物館 2021 「沖代条里的調査 本編」
- 佐賀県教育委員会 1984 「金立開拓遺跡」

第2節 相原山首遺跡の整備活用について

はじめに

平成6年4月、中津市は永添遺跡（相原山首遺跡）の発掘調査結果を発表した。当時の新聞記事には「古墳時代から奈良時代への変遷を示す墓域を発見。一帯を支配した豪族の歴代の首長の墓ではないか」という見解が中津市教育委員会の言葉として掲載された。大分県文化課は「県指定の価値がある」との評価であり、県は遺跡の保存を強く市に要請したため、市は一体となった新火葬場と風の丘広場の当初設計を見直し、遺跡を葬祭場の公園として整備することになった。本格的な遺跡公園としては中津市初のものであった。

この項では整備の考え方や方法を記すが、遺跡を発掘調査した埋蔵文化財担当職員は平成6年3月をもって退職し、整備を担当した市職員も退職したことから、整備終盤を引き継いだ筆者が、整備の記録簿をもとに当時の記憶をたどり書きとどめるものである。



雨の中の現地説明会の様子（平成6年5月26日）

1. 遺跡整備にいたる経緯

遺跡は葬祭場に付属する「風の丘公園」の一角に位置し、葬祭場と風の丘公園の設計は共に慎設計が行った。平成7年3月10日、火葬場と風の丘公園の工事入札。火葬場は平成8年7月、公園は平成9年3月に完成した。葬祭場は近代的感覚の建物ながら周囲の風景にマッチしたものを志向したといい、遺跡の表示もデザイン性の高いものとなった。

遺構の保存や表示方法については、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）に指導を受けて行ったと記録されている。

2. 遺構の盛り土について

完成した遺跡公園は丘陵上の斜面に方墳の墓道部が細長く弧を描いてのびる形状となっている。しかし、実際の検出面は周囲の土地と大きな高差はなかった。整備後の形状は、大量の客土による盛り土で丘陵を作り、その上に遺構表示を行った結果である（第68回参照）。

盛り土には設計者の葬祭場全体デザインの理想が反映されている。設計者から当時聞いた言葉は「盛り土をすることで水平方向の古墳が若干斜めに立ち上がる。火葬場、待合室の遺族が屋外をみれば、そこにははるか昔の先祖の墓がみえ、石室床面の石敷きが太陽の光にてらされ白く輝く。葬祭場の建物がある側の芝生広場を囲む円形の通路と、遺跡公園の円形は重なり空から見ると無限大∞の形となり、死者を送る場としての理想の空間となる。」つまり、多量の盛り土は葬祭場からの眺望を意識したものであったが、葬祭場完成後は、建物と公園の間に大きな壁が設置され、待合室から遺跡



6号墳の石室復元工事状況

を見ることはできない。当初計画を変更せざるを得ない事情が生じたものかもしれない。

3. 遺構表示方法について

発掘調査により検出された主な遺構の種類は、古墳、方形周溝墓、火葬墓、土坑墓である。「古墳」には、「盛り土を行うもの（1号墳）と「盛り土をせず、石室床面を表示させたもの（2号墳、4～8号墳）」がある。円墳である1号墳は、唯一墳丘まで盛り土し整備している。墳頂に登る階段を設け、墳頂には低木を落下防止柵代わりに設置した。造り出し部には周溝を渡る木の橋が架けられているが、橋の存在を示す遺構は検出されていない。周溝からは、直径20cmほどのピットがめぐるように検出された。ピットについては「墳丘を盛る際に必要な足場の痕跡ではないか」とする説や「木製埴輪がめぐっていたのではないか」とする説などがあり、短い擬本を立てて表示することとなった。

2号墳、4号墳～8号墳は石室を持つ方墳で、墳丘を盛らず石室床面を見せる形で、検出された当時の状態に近い整備とした。周溝からのびる渓道も再現したが、遺跡全体を丘陵上に盛り土したため、渓道部が実際よりも強く弧を描いて表現されている。1号～9号墳の周溝はソイルセメントで検出面を表現した。

火葬墓と土坑墓については設計者のメモが残されている。「火葬墓、土坑墓とも、発掘の形状（平面形状）をなるべくそのまま表示する。発掘形状一四型の浅い穴一の雰囲気を伝えるため、浅い穴として表示する。浅い穴の中に、火葬墓はステンレス鏡面の表示板、土坑墓は黒ミカゲミガキの表示板を据える。人は小さな穴の中に、空や自分の顔を映し出す表示板をみることになる。」当時、「火葬は炎のイメージで反射するステンレス素材に、土坑墓は墓石のイメージで御影石素材を選択した」との設計者の言葉を記憶している。

方形周溝墓は出土遺物がないため時期は不明。土坑検出面を表現する整備としている。

以下の作業（事業）は、筆者が担当した。

まず3号墳は方墳でありながら主体部が藏骨器を収めた土坑で、土坑検出面を表現することとなっていた。これは古墳時代と奈良時代の火葬が結びついた、当遺跡を特徴づける遺構であるため、出土した藏骨器をセラミックで復元し、現地に納め、見学者がのぞき込むと藏骨壺が見える仕掛けとした。（しかし残念ながら、藏骨器の複製品は設置後再三抜き取られたため、現在は撤去している。）

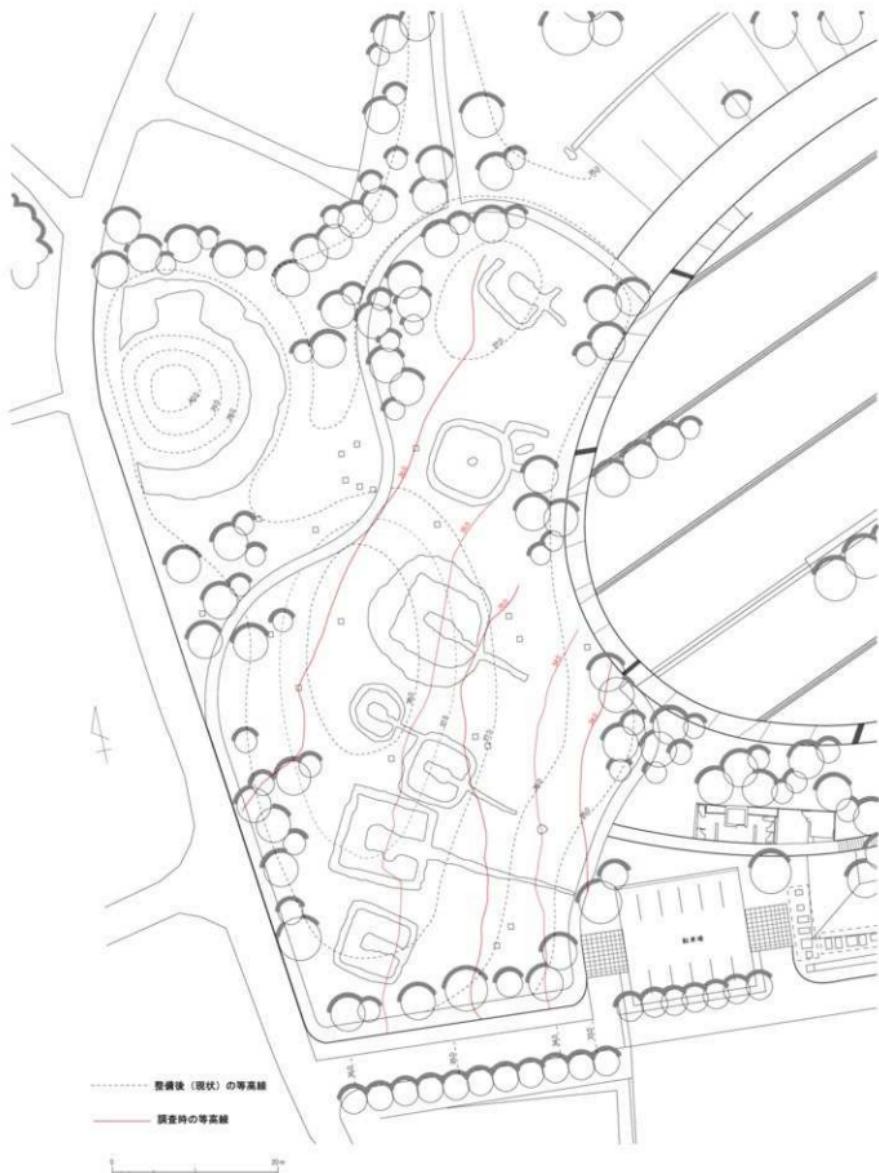
遺跡・遺構の説明板については、公園のデザイン性重視の観点から、遺跡内に立ち上がらない地表面すれすれの高さで設置された。また設置場所は、風の丘公園の入り口とされている地点であるが、葬祭場の施設や駐車場から最も遠い場所で、来園者が気づきにくいものとなった。その後、平成22年に遺跡が大分県指定史跡に指定されたのを機に、発掘当時の写真を盛り込んだ遺跡全体の説明看板を新たに作成し、葬祭場の建物間に設置した（写真図版26参照）。



4号墳石室復元工事の様子



5号墳石室復元工事の様子



第68図 遺跡の現況図 ($S = 1/600$)



復元整備された相原山首遺跡



整備後の 5 号墳の状況

4. 出土品展示コーナーについて

平成25年、文化庁の「地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業」の補助金を受け、相原山首遺跡の出土品を展示する展示ケースを購入した。展示場所は葬祭場の待合室である。待合室は身内を亡くした人々が火葬が終わるのを待つ空間であり、一般的の見学者は訪れにくい。しかし、はるか千数百年前の昔とはいえ、その地を代々おさめてきた首長たちの累代墓が築かれた場所である。古墳には祭祀の痕跡があり、火葬骨は丁寧に蔵骨壺に納められていた。昔も今も、死に直面した人々の思いは変わらず、身内の死は古代から連続と続く歴史の1ページになっていくのだと、火葬場に来た方に感じてほしい。その思いから、あえてこの場所を展示場所に選択した。幸い、施設を運営する法人のご厚意で、待合室利用の可能性の低い午前中であれば見学可能という対応をしていただけのこととなった。



風の丘葬斎場ロビーの展示コーナー

5. 古代ゾーンとしての活用について

相原山首遺跡整備中の平成7年、遺跡の約1km東で下毛郡衙正倉跡と推定される長者屋敷官衙遺跡が発見され、平成22年、国指定史跡に指定された。長者屋敷官衙遺跡は8世紀前半～10世紀の遺跡で、相原山首遺跡の火葬墓と時期が重なる。当時の都司は地元有力者が着任するため、火葬墓との関連性もうかがわせる。両遺跡の北側の県道は、豊前国府と宇佐神宮を結ぶ古代官道に比定され、官道を南限とした沖代地区条里跡は方形の地割を留め、一部水田景観を留める。さらに官道は宇佐神宮の祖宮である薦神社を通り、周辺には古代寺院である相原庵寺もある。中津市はこの一帯を古代のまちづくりが生きた空間「古代ゾーン」として位置づけ、各ポイントの整備活用を計画し、隨時各遺跡を巡るバスツアーやウォーキングイベントなどを開催してきた。相原山首遺跡のある風の丘公園は、公園のみの利用ができる場所で、公園用の駐車スペースやトイレ設備もあり利用者に便利な環境が整っている。葬祭場の一隅という特殊な立地ではあるが、古代からの人々の思いにふれることのできる史跡公園として、古代ゾーンの主な構成要素として、積極的な活用をすすめていくべきと考える。



風の丘葬祭場（右下）と復元された相原山首遺跡

第2表 遺構一覧表

本報告遺構名	旧名称(概報時)	主な出土遺物	時期	備考
1号墳	1号墳	須恵器壺・罐、土師器	5世紀中頃	張り出しを持つ円墳
2号墳	2号墳	須恵器平瓶、古代瓦	7~8世紀	方形墳
3号墳	3号墳	須恵器骨蔵器	8世紀後半	主体部は火葬墓、方形墳
4号墳	4号墳	須恵器高台付壺・罐、高环、古代瓦	7~8世紀	方形墳
5号墳	5号墳	青磁	7~8世紀	方形墳
6号墳	6号墳	須恵器高台付壺・罐、平瓶、白磁碗	7~8世紀	方形墳
7号墳	7号墳		7~8世紀	方形墳
8号墳	8号墳	古代瓦、近世磁器	7~8世紀	方形墳
方形周溝遺構	9号墳	土師器	中世	
3号焼土坑	3号火葬墓		古代?	
4号火葬墓	4号火葬墓	須恵器壺・罐、土師器、鉄滓	8世紀後半	
5号焼土坑	5号火葬墓	釘?	古代?	
6号火葬墓	6号火葬墓	須恵器壺	8世紀後半	
7号焼土坑	7号火葬墓		古代?	
8号焼土坑	8号火葬墓		古代?	
9号焼土坑	9号火葬墓		古代?	
10号焼土坑	10号火葬墓		古代?	
11号焼土坑	11号火葬墓		古代?	
12号焼土坑	12号火葬墓		古代?	
13号焼土坑	13号火葬墓		古代?	
14号焼土坑	14号火葬墓		古代?	
15号火葬墓	15号火葬墓	土師器壺	8世紀代?	
16号焼土坑	16号火葬墓		古代?	
17号焼土坑	17号火葬墓		古代?	
1号埋甕遺構	2号火葬墓	備前焼甕	14世紀	
2号埋甕遺構	なし	瓦質深鉢	中世	
1号土壤墓	1号土壤墓	刀子	中世?	
2号土壤墓	2号土壤墓	白磁碗、白磁皿、土師器壺、刀子	12世紀	
3号土壤墓	3号土壤墓		不明	
4号土壤墓	4号土壤墓		不明	
5号土壤墓	5号土壤墓		不明	
6号土壤墓	6号土壤墓		不明	
7号土壤墓	7号土壤墓		不明	
1号溝	SD1	須恵器甕	不明	
2号溝	なし		不明	
3号溝	なし		不明	

第3表 遺物觀察表(1)

番号	出土遺物名	遺物注記名	種別・器種	残存率	量				色調	胎土	焼成	調整・技法	備考	
					口径	縦高	底径	その他						
1	1号壙	NS1ショウコウ内	須恵器・壺	小片	(20.8)	(9.8)			内外面：青灰色 断面：小豆色	非常に繊細	良好			
2	1号壙	NS1ショウコウP13	須恵器・壺	小片		(4.7)			茶色っぽい青灰色	0.5mm白色粒子・微量 黒色粒子	良好	外：櫛目波状文、沈線、 内：ナデ、押さえ		
3	1号壙	NS1ショウコウP15	須恵器・壺	小片		(5.0)			青灰色	繊細	良好	外：櫛目波状文、沈線、 内：回転ヨコナデ、一条凸帯 内：回転ヨコナデ		
4	1号壙	NS1ショウコウP15	須恵器・壺	小片		(5.0)			青灰色	繊細	良好	外：櫛目波状文、沈線 2本 内：回転ヨコナデ		
5	1号壙	NS1ショウコウP15	須恵器・壺	小片					外内：やや緑色を帯びた青灰色 断面：あすき色	角閃石砂粒子・少量 繊細	良好	外：回転ヨコナデ、貼付 内：回転2条、櫛目波状文 内：回転ヨコナデ	反転復元	
6	1号壙	NS1ショウコウP15	須恵器・壺	小片					外内：やや緑色を帯びた青灰色 断面：あすき色	角閃石砂粒子・少量 繊細	良好		反転復元	
7	1号壙	NS1ショウコウ内	須恵器・樽型罐	断面 5分の1		(6.3)			外内面：青灰色 断面：小豆色	非常に繊細	良好	外：回転ヨコナデ、ヨコナデ 内：回転ヨコナデ、シボリ直	陶器産の可能性大	
8	1号壙	NS1ショウコウP11	須恵器・高台付环	小片		(1.4)			茶灰色	0.5~1mm白色粒子	良好	外：ナデ 内：ナデ		
9	1号壙	NS1ショウコウP12	土師器・高环	小片		(6.0)			橙色	0.5~1mm白色粒子・中量 0.5~1mm灰石・中量 0.5mm白色粒子・中量	良好	外：ナデ 内：ナデ	表面に細かいヒビ 反転復元	
10	1号壙	NS1ショウコウP12	土師器・高脚脚部	小片		(2.8)			淡橙色	0.5mm大白色粒子・中量 0.5mm茶色粒子・微量	良好	不明	反転復元	
11	1号壙	NS1ショウコウP12	土師器・高脚接合部	小片		(2.8)			灰橙色	0.5~1mm大白色粒子 赤色粒子・少量	良好	外：ナデ 内：ナデ		
12	1号壙	NS1ショウコウP6	瓦器・壺	小片		(1.4)	(4.0)		外：暗茶褐色 内：茶褐色	0.5mm大角閃石・微量 0.5mm大白色粒子・微量	良好	外：ナデ 内：ナデ	高台脚部に木目痕 反転復元	
13	2号壙	NS2 P6	須恵器・林	小片	(16.4)	(4.0)			茶灰色	繊細	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	反転復元	
14	2号壙	NS2ショウコウP2	須恵器・高台付环	小片		(2.3)	(11.8)		灰白色	白色粒子・少量 黑色粒子・微量 微量鉄割と 繊細	良好	外：ヨコナデ 内：ナデ	反転復元	
15	2号壙	NS2ショウコウP1	須恵器・平瓶	ほぼ完形	(B.7)	16.2	8.4	最大 diameter 14.9	淡灰白色	白色粒子・斜長石 中量・中量 3mmのレキ 少・少量	良好	ヨコナデ、ヨコ方向ケズ 底部に穴をあけて いる		
16	2号壙	NS2セキシ	古代瓦・(平 瓦) P1	須恵器・平瓶	長さ (7.0)	幅 (6.0)	厚 (2.2)		灰蒸白色	0.5mm大白色粒子・黑 色粒子・少量	良好	外：ナデ 内：布目痕		
17	3号壙	火葬墓 1 3号墓主体部	須恵器・壺	小片		0.8+ α			外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	白色粒子・中量 斜長石・多量	やや粗	外：回転へラ切り後多方 向に複数ナデ 内：回転ヨコナデ、中心 部に擦痕あり		
18	3号壙	NS-1 カソウワ	須恵器・壺	口縁部から 裏にかけて 一部欠		底径 16.0			最大 diameter 23.2	淡い青灰色	精良	外：ヨコナデ 内：丁寧なヨコナデ、丁 寧なナデ	貼付け高台 内面に粘土縮痕み る	
19	3号壙	NS3ショウコウ コウP4	須恵器・壺	小片		(4.3)			最大 diameter 12.0	外：灰褐色 内：灰黃褐色	白色粒子・少 量 黑色粒子・微量 鉄割と 繊細	良好	外：回転ヘラケツリのち ナデ 内：ナデ	反転復元
20	3号壙	NS3ショウコウ コウP1	須恵器・高 台付环	小片		(1.7)	(8.0)		底蒸白色	0.5mm大茶褐色 0.5mm白色粒子・少量	良好	外：ナデ 内：ナデ		
21	3号壙	NS3ショウコウ コウP1	土師器・杯	小片		(3.2)			淡茶褐色	0.5mm大茶褐色 0.5mm白色粒子・少量	良好	外：ナデ 内：ナデ		
22	3号壙	NS3ショウコウ コウP3	土師質・土器	98%		長さ (5.3)			最大 diameter 1.5	灰蒸褐色	0.5mm大角閃石・中量 0.5mm白色粒子・少量	良好	外：ナデ 内：ナデ	
23	4号壙	NS4 (P1)	須恵器・壺	25%	(21.0)	(2.8)			淡灰白色	白色粒子・斜長石 黑色粒子・中量	良好	外：回転ヨコナデのち甚なナデ 内：回転ヨコナデ	反転復元	
24	4号壙	NS4 P12	須恵器・壺	30%	(16.1)	(3.4)			淡青灰色	斜長石・少 量 白色粒子・中量	やや粗	外：ナデ・回転ヘラケツ リ・回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ、回転 ヨコナデ後多方向ナデ	反転復元 抜けひずみ有	
25	4号壙	永赤4号一階	須恵器・杵蓋	小片		(1.8)			灰褐色	赤色粒子・黑色粒子・少 量	良好	回転ヨコナデ		
26	4号壙	NS4 P14.9.12	須恵器・高 台付环	50%	(17.4)	6.7	10.5		淡灰褐色	白色微粒子・中量 斜長石・少量	堅密	外：回転ヨコナデ、回転 ヘラケツリ 内：不定方向ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	一部反転復元	
27	4号壙	NS4 P9.12	須恵器・高 台付环	不明		(4.5)	9.4		淡灰褐色	白色微粒子・中量 黑色粒子・少 量	良好	外：回転ヨコナデ、回転 ヘラケツリ 内：不定方向ナデ	一部反転復元	
28	4号壙	NS4	須恵器・高 台付环	小片		(4.7)			灰褐色	角閃石・少 量	良好	回転ヨコナデ	反転復元	
29	4号壙	NS4 P12	須恵器・壺	不明		(9.6)			淡灰褐色 ～黒灰色	白色微粒子・中量	堅密	外：回転ヨコナデ、多方向ナデ 内：回転ヨコナデ	反転復元	

遺物觀察表(2)

番号	出土遺物名	遺物注記名	種別・器種	残存率	主張				色調	胎土	焼成	調整・技法	備考
					口径	高さ	底径	その他					
30	4号壙	NS4 P13	須恵器・縁	不明					淡灰褐色 ～黒灰色	白色微粒子・中量	堅焼	外：回転ヨコナデ 多方向ナデ 内：回転ヨコナデ	外からの穿孔 反転復元
31	4号壙	NS4 P6	須恵器・不明	小片	(7.5)	(5.3)			淡灰褐色	角閃石・中量 石英・斜長石・少量	良好	回転ヨコナデ	反転復元
32	4号壙	NS4 P7	土師器・杯	小片		(5.2)			磁褐色	0.5mm大角閃石・多量 0.5mm大石英・中量	良好	外：ナデ 内：ナデ	
33	4号壙	NS4シェウ コウP6	土師器・瓶	小片		(1.5)	(6.0)		淡茶白色	0.5mm茶色粒子・黒 色粒子・中量	良好	外：ナデ 内：ナデ	反転復元
34	4号壙	NS4 P4	白磁・碗	小片		(2.1)	(6.0)	文様：無し	精細		良好	外面：速井文	底部露胎 反転復元
35	4号壙	永添 4号石室	吉代瓦・丸瓦	小片	長さ (7.1)	幅 (6.6)	厚 2.0		茶褐色	赤色粒子・黑色粒子・ 少量	良好	内：布目直	
36	5号壙	NS5ゲンジ ツウチ p1	青磁・碗	小片		(3.2)			灰青色	やや黄土色ぎみ	良好	一条の沈綴文	
37	6号壙	NS6p-1	須恵器・蓋	口縁を一部 欠く	16.6	3.5			灰色	白色粒子・少量 黑色粒子・少量	やや不良	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ、回転ヨ コナデ後 3条の痕跡あり	
38	6号壙	NS6シェウ コウP1	須恵器・蓋	65%	(15.8)	(4.2)			淡黃白色	白色微粒子・少量 1mmの大灰色レシ・中量	やや軟	外：ナデ、回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	一部反転復元
39	6号壙	NS6シェウ コウ内p-2	須恵器・蓋	完形	16.7	4.4			淡灰褐色 (一部黒灰色)	白色微粒子・中量 黑色微粒子・中量	やや硬	外：ナデ、回転ヨコナデ、 回転ヘラタキアゲヨコナデ 内：回転ヨコナデ、一方 側に壓縮あり	
40	6号壙	NS6p-1	須恵器・高 台付环	口縁を 3分 の 1欠く	15.5	5.6	10.1		淡灰褐色 ～淡黒灰色	白色微粒子・中量 斜長石・少量	やや硬	外：回転ヨコナデ、回転 ヘラタキアゲヨコナデ 内：ヘラ切り後回転ヨ コナデ	
41	6号壙	NS6シェウ コウ内p-1	須恵器・高 台付环	口縁部2ヶ 所欠く	15.6	5.6	8.8		淡灰褐色	白色微粒子・中量 黑色微粒子・中量	やや硬	外：回転ヨコナデ ケズメ 内：回転ヨコナデ、多方ナデ	
42	6号壙	NS6シェウ コウ内P2	須恵器・高 台付环	95%	16.3	5.2～ 5.5	9.8		淡灰褐色	白色微粒子・少量 角閃石・中量	やや硬	外：回転ヨコナデ、ヨコ タキアゲヨコナデ、回転ヨ コナデ後ナデの痕跡	
43	6号壙	NS6セイザイ 内P2.4	須恵器・高 台付环	33%	(16.4)	(4.5)			青灰色	白色微粒子・少量	堅焼	外：回転ヨコナデ、ナデ 内：回転ヨコナデ、多方ナデ	反転復元
44	6号壙	NS6センドウ ウP1.2	須恵器・高 台付环	70%	15.2	4.6	9.7		淡灰褐色	斜長石・中量 黑色微粒子・中量	やや硬	外：回転ヨコナデ、ナデ 内：回転ヨコナデ	抜けひずみあり
45	6号壙	NS6センド ウP1.3	須恵器・杯	50%	(13.4)	3.3	10.2		灰白色	1mm大白色粒子・少量 3～5mm大角閃石・ 少量	やや不良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ、多方向ナデ 底部：ヘラ切り後丁寧な ナデ	一部反転復元
46	6号壙	NS6センド ウP1-p-2	須恵器・杯	小片	(13.3)	3.1	(9.2)		淡黃白色	白色微粒子・少量	やや不良	回転ヨコナデ、ナデ	反転復元
47	6号壙	永添 6号石室	須恵器・杯	小片		(2.8)			淡褐色	黑色粒子・白色粒子・ 微量	やや不良	回転ヨコナデ	
48	6号壙	永添 6号石室	須恵器・杯	小片		(3.2)			黑色粒子・少量 赤色粒子・白色 粒子・微量		良好		
49	6号壙	NS6p-2 p-3	須恵器・平底		(7.4)	15.6	7.0	扁大頭 14.8	黒灰色	白色微粒子・中量 1～3mmの白色レシ・ 少量	堅焼	外：回転ヨコナデ、丁寧なナデ 内：ヘラタキアゲヨコナデ	
50	6号壙	NS6シェウ コウP7	土師器・甕	小片		(2.6)	10.8		外：椎形 内：褐色	角閃石・石英・白色 粒子・赤色粒子・微量	良好	ナデ	
51	6号壙	NS6センド ウP4	日磁・碗	小片	15.8	(2.7)					良好		反転復元
52	8号壙	永添 8号石室	吉代瓦・丸瓦	小片	長さ (7.2)	幅 (7.4)	厚さ (1.9)		淡褐黄色	0.1mm大赤・白 色粒子・多量 0.1mm大角閃石・少量	良好	外：ナデ 内：布目直	
53	8号壙	永添 8号石室	吉代瓦・丸瓦	小片	長さ (7.0)	幅 (6.0)	厚さ (1.8)		淡茶褐色	0.5mm大赤・白色 粒子・多量	良好	外：格子目タタキ 内：布目直	
54	8号壙	永添 8号石室	吉代瓦・平瓦	小片	長さ (6.3)	幅 (4.3)	厚さ (2.5)		茶褐色	0.1～0.5mm大赤色・白 色粒子・多量 0.1mm大黑色粒子・少量	良好	外：格子目タタキ 内：布目直	
55	8号壙	永添 8号石室	吉代瓦・平瓦	小片	長さ (4.5)	幅 (4.8)	厚さ (2.0)		淡茶褐色	0.5mm大赤・白色粒子・ 多量 0.1mm大黑色粒子・中量	良好	外：格子目タタキ 内：タタキ	
56	8号壙	永添 8号石室	吉代瓦・平瓦	小片	長さ (6.4)	幅 (6.2)	厚さ (2.2)		淡茶褐色	0.1mm大赤・白・黑 色粒子・多量	良好	外：格子目タタキ 内：布目直	裏に合わせの痕跡 あり
57	8号壙	永添 8号石室	磁器・染料瓶	小片		(2.5)	(4.6)		釉薬：透明釉		良好		反転復元
58	8号壙	永添 8号石室	磁器・染料瓶	小片		(2.7)	(4.6)		釉薬：透明釉		良好	高台に砂付着	底部外間に鉛あり 反転復元

遺物觀察表(3)

番号	出土遺物名	遺物注記名	種別・器種	残存率	量				色調	胎土	焼成	調整・技法	備考
					口径	縦高	底径	その他					
59	方形周溝直縁	NS3シュコウP4	土師器・杯	小片		(2.1)	(8.0)		淡茶白色	0.5mm大石英・葉色粒子・中量 0.5mm大白色粒子・少量	良好	外内：ナデ 底部：糸切り痕	反転復元
60	4号火葬墓	火葬墓・4	須恵器・蓋	ほぼ完形	11.8	21.3		縦大頭 11.0	淡灰褐色～黒灰色	白色微粒子・中量	堅焼	外：ていねいなヨコナデ、 平打タキ 内：ていねいなヨコナデ、 同心円タキ	
61	4号火葬墓	火葬墓・4	須恵器・蓋	完形	13.9	2.0			淡灰褐色	黑色微粒子・中量	やや甘い	外：回転ヨコナデ 内：回転ナデ	
62	4号火葬墓	NS4火葬墓 床面直上土 器群	須恵器・ 不透明	小片		(8.9)			灰黃褐色	白色微粒子・中量	良好	タカキ目あり	
63	4号火葬墓	NS4火葬墓 床面直上土 器群	須恵器・ 不明	小片		(1.4)			灰褐色	細砂粒多く含む	良好	外：斜めの調整痕が見ら れる 内：ナデ	
64	4号火葬墓	NS4火葬墓 床面直上土 器群	土師器・高 杯	小片		(3.7)			赤褐色	2mm以下の石英・少量 0.5mm以下の角閃石・少量	良好	不明	反転復元 全体に表面が摩耗
65	4号火葬墓	NS4火葬墓 床面直上土 器群	土師器・ 罐	小片		(1.7)			外：赤褐色 内：黄褐色	1mm以下の角閃石・少量 1mm以下の石英・少量	良好	外：表面剥落 内：ナデ	
66	4号火葬墓	NS4火葬墓 床面直上土 器群	土師器・壺	小片		(1.8)			褐色	1mm以下の角閃石・少量 0.5mm以下の石英・少量	良好	不明	全体に表面が摩耗、 高台貼付
67	4号火葬墓	NS4火葬墓 床面直上土 器群	鐵滓		長さ 4.9	幅 5.4	厚さ 0.3	重さ 69.3g					
68	4号火葬墓	NS4火葬墓 床面直上土 器群	鐵滓		長さ 3.7	幅 5.3	厚さ 2.6	重さ 41.9g					
69	4号火葬墓	NS4火葬墓 床面直上土 器群	鐵滓		長さ 3.6	幅 3.5	厚さ 1.8	重さ 19.4g					
70	5号施土坑	NS火葬5	鉄・釘?		長さ (8.0)	幅 (1.3)		重さ 14g					
71	6号火葬墓	火葬墓・6	須恵器・壺	ほぼ完形	12.8	20.7	12.0	縦大頭 24.3	地肌は淡灰褐色 で全体に墨灰色 の自然釉	白色微粒子・多量 斜長石・少量	堅焼	外：ヨコナデ、ヨコ方向ケズ リ面ヨコナデ、まばらにタク ナカ有り 内：ヨコナデ 底：へら切り後や温なナデ	内面に輪横模様あり
72	6号火葬墓	火葬墓・6	須恵器・蓋	ほぼ完形	17.4	1.2～ 1.6			淡灰褐色	白色微粒子・斜長石・ 中量 3mm大的レキ・数個 含む	やや甘い	外：回転ヘラ切り後多方 面アフテ、田畠ヨコナデ 内：ヨコナデ 底：へら切り後、多方 面アフテ	
73	15号火葬墓	NS火葬15	土師器・壺	口縁部は全 て残る	27.6	(7.0)			淡灰褐色	0.5～1mm大白色粒子・ 多量 0.1mm大石英・石英 ・少量 0.5mm大雪母・黒色 粒子・中量	良好	外：ナデ、指押え、へら けズリ・蓋部に器具目 のヨコナデ 内：ナデ、指印压痕	反転復元
74	1号埋直縁	NS火葬2	陶前焼・壺	口縁部以外 はほぼ残存		(8.4)	29.6	縦大頭 29.6	赤褐色	0.5～1mm大白色粒子・ 多量 0.1mm大石英・石英 ・中量	良好	外：ナデ、指押え 内：ナデ	
75	2号埋直縁	NS6埋カメ	瓦質土器・壺	脇部下半は 残る	(46.6)		(32.6)		灰褐色～ 灰黃褐色	0.1mm大白色粒子・ 多量 0.1～0.5mm赤 色粒子・多量 黒色 粒子・長石・少 量	良好	ヘラケズリ	反転復元
76	1号土塗器	NS土塗器1	鉄・刀子	刃先を欠く	長さ (13.7)	幅 (1.9)		重さ 22g					
77	2号土塗器	土塗器2	白磁・壺	完形	15.0	6.0～ 6.8	6.8		白色～白青色	僅かに黒色粒、白色 粒含む	良好	外面回転ヘラ（？）調製	口唇部に小さな欠 けがある。人為的 かどうか不明
78	2号土塗器	土塗器2	白磁・壺	完形	10.3	3.0	4.7		やや緑がかった 白色	精選、やや明褐色	良好	内面見込みの跡を輪状に 焼き取る	内面見込みに胎土 目の痕跡あり
79	2号土塗器	土塗器2	土師器・壺	4分の3	15.2	3.4	8.2		黄白褐色	精選	良	底部回転ホリ切りのちナデ、 内面見込みに胎土 目の痕跡あり	
80	2号土塗器	土塗器2	土師器・壺	4分の3	(16.0)	4.5	9.2		黄白褐色	精選	良	底部は糸切り	画面風化
81	2号土塗器	土塗器2	鉄・小刀	完形	長さ 26.6	幅 2.7		重さ 195g					
82	満1	NS SD1 P1	須恵器・壺	小片		(5.2)			外：濃茶色 内：淡灰色	褐斑 0.1mm大白色粒子・ 雪母・多量	良好	ヨコナデ、平行タキ ハサ調整、平行タキ	
83	-	NS P1	瓦器・壺	2分の1	(16.4)	5.7	(6.0)		青白褐色	0.1mm大白色粒子・ 多量 0.1mm大角閃石・雪 母・少量 0.1mm大石英・微量	良好	ナデ	反転復元

写 真 図 版



遺跡全景（上が西）



遺跡全景（北から南を望む）



1号墳空中写真



2号墳空中写真



3号墳と方形周溝遺構空中写真（右下）



4号墳空中写真

写真図版 6



5号墳（上）と8号墳（下）空中写真



9号墳（右は8号墳）空中写真



7号填空中写真



5～8号填空中写真

写真図版 8



1号墳張り出し部



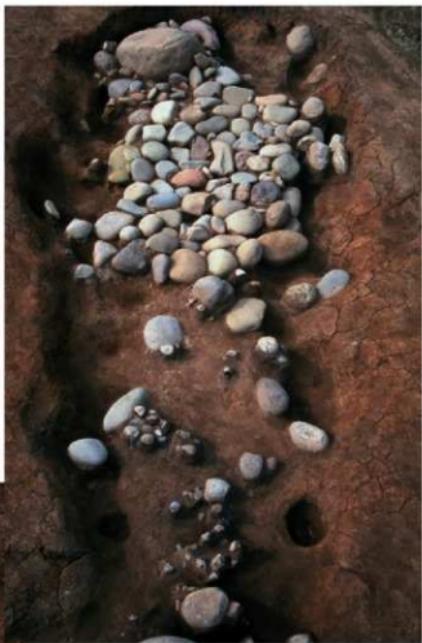
1号墳周溝



1号墳周溝遺物出土状況



2号填近景



2号填石室



2号填遺物出土状況



3号填近景



3号填出体部検出状況



3号填骨蔵器半裁状況



3号埴骨蔵器出土状況(1)



3号埴骨蔵器出土状況(2)



4号填近景



4号填石室



4号填前庭部



5号填近景



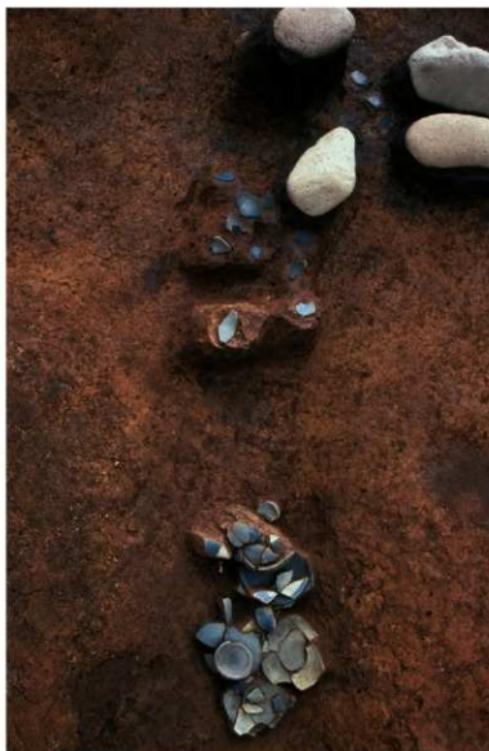
5号填石室(1)



5号填石室(2)



6号墳近景



6号墳周溝遺物出土状況



7号填近景



8号填检出状况



8号填近景



8号墳石室側石



8号墳遺物出土状況（盗難にあったため図面なし）



方形周溝遺構



3号焼土坑



4号火葬墓



4号火葬墓（骨蔵器の蓋石）



4号火葬墓



5号焼土坑検出状況



6号火葬墓



6号火葬墓骨蔵器



7号焼土坑



9号焼土坑



10号焼土坑



11号焼土坑



12号焼土坑



13号焼土坑



14 号烧土坑



15 号火葬墓(1)



15 号火葬墓(2)



17号焼土坑



1号埋甕遺構



2号埋甕遺構



1号土壤墓



2号土壤墓



2号土壤墓遺物出土状況



4号土壤墓



5号土壤墓

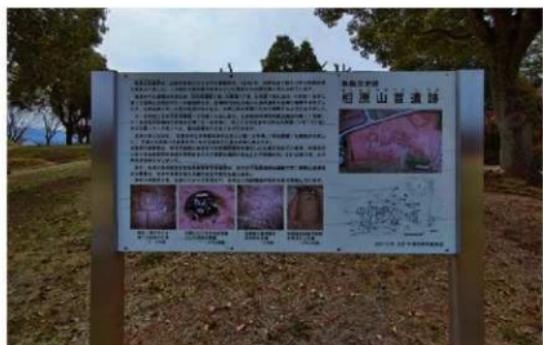


6号土壤墓

写真図版 26



相原山首遺跡上空から見た沖代平野（左上は山国川）



相原山首遺跡の現状（説明看板）



相原山首遺跡の現状（右側 2号墳）



相原山首遺跡の現状（1号墳と1号土壙墓）



相原山首遺跡の現状（2号墳）



相原山首遺跡の現状（3号墳）



出土遺物(1)



出土遺物(2)

写真図版 30



出土遺物(3)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	あいはらやまくびいせき
書名	相原山首遺跡
副書名	「風の丘葬斎場」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	中津市文化財調査報告
シリーズ番号	第113集
編著者名	高崎章子 小柳和宏
編集機関	中津市教育委員会
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 Tel:0979-22-1111
発行年月日	2023年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	○・×	○・×	m ²		
あいはらやまくびいせき 相原山首遺跡	なかつ・し おれあざい・ほらあざやまくび 中津市大字相原字山首 3021～3027番地	44203	203118	33°33'58"	131°11'37"	H5.10.20 ～H6.3.29	4,150	葬祭場 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
相原山首遺跡	墳墓	古墳 古代 中世	古墳・火葬墓	須恵器(骨蔵器) 土師器など	方形に周溝を巡らす火葬墓

要約	5世紀代の張り出し部を持つ円墳1基、7世紀から8世紀にかけての主体部に石室を持つ方形墳6基、骨蔵器を納めた方形に周溝を巡らせる火葬墓1基、その他2基の骨蔵器を有する単独の火葬墓、中世の土壙墓や埋甕遺構2基などを調査。至近に古墳時代後期の上ノ原横穴墓群や豪族居館と考えられる三口遺跡（6次調査区）、古代寺院である相原廃寺、下毛郡正倉と考えられる長者屋敷官衙遺跡などがあり、古墳時代から古代にかけて当該地が重要な場所であったことが改めて確認された。
----	--

相原山首遺跡

「風の丘葬斎場」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告 第113集

令和5年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 勝川原田印刷社